

新古今 その原や伏屋に生ふるは、き木の有りとは見えて逢はぬ君哉 是則

信越鐵道と
善光寺街道

諏訪より東北、和田峠、大門峠を越ゆれば、佐久の地方に出づ。佐久の地方は即ち上野より越後に通ずる信越鐵道の通路にあたる。この鐵道は碓氷峠を越えて、來り、輕井澤より更に進んで、小諸、上田を経て、長野に通ず。中仙道は追分より、西南、諏訪地方に出で、追分にて善光寺街道と分るゝなり。

輕井澤

淺間山

輕井澤は土地高く、氣候涼しきが故に、近年は夏日避暑の客多し。こゝより西北、淺間山に上るべし。淺間山は有名なる噴火山にして、さきには天明三年にも大噴火ありしが、今日にても、時々灰を降らす事敢て珍らしからざるなり。

信濃なる淺間のたけに立つけむりをちかた人の見やはとがむる 業平

上田城

國分寺

戸隠山

上田は眞田氏の舊城市にて、戰國時代よりこゝにあり、永く上杉謙信の軍をこゝにせき止め、又關ヶ原の戰にあたりても、眞田昌幸こゝに秀忠の軍を遮りて、有名なる上田原の戰爭ありき。この東方に國分寺あり。

長野市を西北に去る五里餘戸隠山あり、戸隠山中の奇景近ごろ江見水蔭に

物産

よりて世に紹介せられたり。かく險阻の地なるが故に、古く鬼女の嘶もありて、平惟茂之を退治せし談は、謡曲にも作りて、人の知る所なり。山に戸隠神社あり、手力雄神を祀る。天照大神岩戸籠りの時に、御手を引きて出だしまゐらせしより轉訛して、遂に此の山中に、岩戸を隠したりとの俗説あるにや。鐵道は戸隠山の東方をめぐり越後に入る。

縣下の産業は、先づ養蠶を以て第一とす。生糸、眞綿、蠶卵紙の産出甚多し。農産物また少しとせず。木曾路は森林に富み、良好の木材を出す。紙、漆器等の産、また山國の特性として、縣下其額少しとせず。

参考書

信府統計 三十三册
善光寺名所圖會 五册

信濃地名考 三册
岐蘇路の記 一册

山梨縣 (甲斐)

地勢

山梨縣は甲斐一國を管す、カハは峽の義か、其國山の峽にあるが故に、斯く名づくるにや。四境皆山を繞らして、中に平地を擁す。平地の諸水は、中央に集まり、富士川となり、南流して駿河に入る。國の東方には、また更に、天目山、笹子峠、御坂峠等、一帯の連山の南北に亘れるありて、其東に別に一區劃をな

本邦地理 山梨縣

郡内地方

桂川

猿橋

岩殿山

笹子峠

す。之れ即ち南北都留郡にして、一に郡内地方と稱す。郡内地方は郡内絹の産地にして、山岳多く、桑樹を栽培して紡織の業盛なり。郡内の諸水は、桂川に集り、東南流して、相模に入り、馬入川となる。東京より甲府に通ずる甲州街道は、この流に沿ひて西す。途中桂川を渡る所、猿橋驛に猿橋あり、左右絶壁の上に架し、頗る奇観なり。

猿橋の西方に岩殿山あり、頂上に岩殿城址あり、もと武田氏の將小山田氏の據りし所たり。織田信長の甲斐を攻むるや、武田勝頼は、岩殿城主小山田信茂をたよりて、韭崎の新府城を逃れ來りしに、信茂異心ありて、勝頼を欺き、途中駒飼驛にて之を捨て、質たりし母を奪ひ、ひとり岩殿へ逃れ歸り、遂に武田氏の滅亡を見るに至れり。

駒飼驛は笹子峠の西方にあり。甲武鐵道の後を受け、甲斐信濃を経て、尾張名古屋に通せんとする、官設中央鐵道は、今や相模を過ぎて、甲斐に入り、西方に進む。途中なる笹子峠は、工事困難にして、其隧道長さ三哩、日本第一と稱す。

田野(景徳院) 天目山

勝沼

鹽山鑛泉

惠林寺

酒折宮

善光寺

甲府市

甲府城

駒飼の北方に田野村あり、其北に天目山あり。武田勝頼駒飼にて小田山信茂に欺かるゝや、轉じて天目山に入らんとし、及ばずして遂に田野の民家に自殺す。後に其地に寺を建て、之を吊す、景徳院之なり。武田氏天目山に滅ぶとは、蓋し其地方の著名なる山を取りて汎稱するなり。

駒飼の西方に勝沼あり、甲州街道の名邑にして、多く葡萄を産す。

勝沼より北方數里、鹽山と稱する一小孤山あり、山に鑛泉を出だす。山の西北松里村に惠林寺あり、寺内武田信玄の墓あり。

勝沼より、栗原石和等を経て甲府に至る。甲府の東里垣村に酒折宮あり、日本武尊を祀る。むかし日本武尊東夷を征伐して、歸途こゝに暫く滞在し給ひ、新治筑波を過ぎて幾日か經つると、詠ませ給ひて、我朝連歌の始を成し給ひし古蹟なりと稱す。其西に善光寺あり、參詣者多し。甲府は山梨縣廳所在の地にして、市況繁盛なり。市の東南に公園あり、北方に甲府城址あり。甲府城は一に舞鶴城と稱す。慶長年中淺野長政秀吉よりこゝに封ぜられ、築きし所、今尚石垣を存す。

古府

甲府の北方相川村に梅屋敷の梅林あり、躑躅崎の館址あり。躑躅崎館は武田氏三代居館の地にて、一に古府と稱す。勝頼こゝより韭崎にうつり、新府を建てしに對して斯くは呼べるなり。之より北方要害山を経て帶那山に達す。帶那山には水晶を産す、所謂甲州水晶にて、甲府市には之にて種々の水晶細工を製出す。

帶那山(水晶)

巨摩(高麗人)

甲府より西して、荒川を越ゆれば、即ち巨摩郡なり。巨摩郡は地極めて廣く、殆んど甲斐の西半部に及ぶ。今は分つて南北中の三郡なり。巨摩郡の名は、蓋しむかし甲斐に高麗人を置きしより、其居地の稱の残りしものならん。釜無川北巨摩郡の諸水を集め、東南流す。其中流に勝頼の新府を築きし、韭崎あり、織田氏の甲斐に入るや、信濃より全力を盡して此地に進み、直ちに韭崎城を衝かんとせしなり。

新府(韭崎)

富士川

釜無川東南流して、笛吹川と合して富士川となる。富士川實に南巨摩郡の東境をなすなり。川は急流にして、鵜澤より東海道岩淵まで十八里、小舟に乘じて五六時間にして降るべし。舟行危険なるが如しと雖も、而も舟子よ

身延山

く舟を操るが爲に、巧に岩角を避けて、兩岸の奇景を賞しつゝ下るを得。此川の舟路、實に三百年前角倉與一の濠溝にかゝる。川を上るには、綱を以て引き上ぐるにて、五時にして下る所上るに三四日を要すといふ。早川あり、西より來りて富士川に會す。其會合點の西南に身延山あり。老杉鬱蒼、景物幽邃なり。山に日蓮宗の總本山久遠寺あり、祖師日蓮上人の嘗て草庵を結びし所にして、信徒の尊崇他に比なし。建築宏壯。

富士八洞

甲斐の南境には、富士の高峯高く峙つ。此山の事は、靜岡縣の條下に説くべし。山の北麓を繞りて湖水多し。蓋し富士山の噴出により水溜りを生ぜしものなり。山中湖最も東にあり、桂川の水源をなす。河口湖其西北にあり、周圍五里、最も大なり。西湖、精進湖、本栖湖、順次其西南にあり。貞觀六年五月、富士山大噴火を成し、熔岩甲斐に向つて流る。甲斐國司の奏上に曰く、「駿河國富士の大山忽ち暴火あり、崗巒を燒碎し、草木焦熱し、土礫け石流れて、八代郡本栖井に剝の雨水海を埋め、水熱して湯の如し、魚鼈皆死し、百姓の居宅海と共に埋まり、或は宅有て人無く、其數記し難し、兩海以東亦水海あり、名

富士の熔岩

けて河口海といふ、火焰赴て河口の海に向ふ云々。慘狀思ふべし。剗の海此時に中斷して、精進湖西湖の二湖となる。此等の湖水より、稍西方に離れて、蝦岳カマヤケの山上に、四尾連湖あり。山中、河口西、精進本柄の六湖に、箱根の蘆の湖、駿河の浮島沼を併せて、富士八湖とす。或は蘆の湖の代に、明見湖を加ふ。河口湖のほとりより、御坂峠ミサカトウを越えて、北方なる一櫻村に、國幣中社、淺間神社あり、木花開耶姫を祀り、甲斐の一の宮たり。淺間は富士の神と稱し、駿河甲斐には此の神社多し。

一櫻村の西方、國立村には國分寺址あり、之より西方、英村大字、國衙は、いにしへ國府のありし地なり。之より南方、高家村には、小山氏の小山城址あり。

參考書 甲斐國志 百九冊
甲斐名勝志 三冊

甲州府志 二十冊
甲斐縣志 五冊

淺間神社

國府、國分

小山城

富士山

富士の煙

竹取物語の

淺間大神

富士の噴火

静岡縣 (遠江、駿河及伊豆を除く)

静岡縣は駿河遠江及び伊豆、但七島を除くを管し、恰も富士山の陽に當る。富士山は直立四千メートル餘、富士火山脈中の主山にして、今は一の休火山なれども、むかしは煙絶えず立ちのぼりしかば、古歌には、常に富士の煙をよめり。彼の古今集の序に、富士の煙によそへて人を戀ひ……と云へるものこれなり。竹取物語にも、時の帝、赫夜姫の昇天を恨みて、この山最も天に近しときき給ひ、山頂に不死の藥を燒きすてしめしかば、其煙今も立ちのぼりて、やがて山の名をも不死と名付けたらん様に記せるは、附會ながらも面白し。

山に淺間大神を祀る神は、木花開耶姫なりといふ、後世山麓大宮町にうつる國幣中社なり。いにしへは山を以て直ちに神と見做せしものか、貞觀六年五月、駿河國司奏上の文には、富士郡正三位淺間大神の大山燒くと見えたり。此山古來時々烈しく噴火して、害を近國に迄及ぼしたる事少なからざりき。貞觀六年に於ける噴火の狀は、山梨縣の條下に述べたり、斯の如く變事はた

本邦地理 静岡縣

寶永山

富士の烟火

富士山嶺

富士の裾野

一、二回に止まらず、さきに延暦十九年にも大噴火ありて、足柄路を埋めたりしが、近くは今を去ること百九十五年前、寶永四年の大破裂の如き、山の半腹に新に寶永山を噴起して、稍山の形に微瑕を附するに至りき。其煙の立たずなりしは、何時の比よりか明ならねども、かの阿佛尼の十六夜日記に、富士の山を見れば煙も立たずなりぬ、昔父の朝臣に誘れて、如何に鳴海の浦なればなど詠みしころ、遠江の國迄は見しかば、富士の煙の末も朝夕たしかに見えしものを何時の年よりか絶えしと問へば、さだかに答ふる人だになしとあるを見れば、その比にだん／＼立たずなりしと見ゆるなり。

山頂には劔が峰、駒が岳などの八峯、噴火口をめぐりて立つ。火口内、經僅に五六町之より八方へ緩慢なる傾斜の圓錐形をなして下る。其山容の秀麗なる實に世界無雙なり。其形の蓮葉を伏せたるが如きより一に芙蓉峰の名あり。山頂温度低きが故に、洞内盛夏と雖尙雪あり、富士詣の行者は、綿入を川意して、漸く夏日之に登るを得るなり。山麓長く四方に引く。之を富士の裾野といふ、延久四年頼朝富士野藍澤に狩す、世に富士の卷狩と稱し、會

駿河半紙

富士の水力

田子の浦

東海道鐵道

富士道

竹の下

手越河原

我兄弟仇討の美談を以て著ける。今は多く三極を植えて、有名なる駿河半紙の本場となれり。山麓清水の噴泉あり、水力を利用して、紡績製紙等に從事する大工場あり、紡績會社は足柄路にあり、汽車中より望むを得べし、製紙會社は大宮町にあり、洋紙の製出高、日本第一に居る。裾野より南方は平野、仲次で駿河灣に連なる、之れ即ち田子の浦にして、最も富士を望むに適す。山部赤人嘗て歌うて曰く、

田子の浦ゆ打ち出で、見れば真白にぞ富士の高根に雪は降りける。相模より來れる東海道鐵道は、足柄山を越えて駿河に入り、御殿場より南行して沼津に至り、更に西に折れて田子の浦を經、蒲原、興津等、駿河灣の海濱景勝の地を過ぎつゝ、西行す。

御殿場はもと御厨庄と稱す。富士登山のもの多く此所よりす。新道あり、馬車にて一合目に達するを得べし。御殿場の東北に竹の下あり、新田義貞の足利尊氏を攻むるや、先づ静岡の西方手越河原にて大勝せしかば、尊氏退てこの竹の下と箱根との險を扼し、大に義貞の兵を破れり。

豆相鐵道

沼津の東に三島驛あり、豆相鐵道此所より伊豆に向て分れ、三島町より韭山の西方を過ぎて、修善寺の近傍大仁に達す。

三島

三島町は伊豆第一の都會にして、もと國府の地なり。こゝに官幣大社三島神社あり。韭山は、後北條氏の祖、伊勢長氏が據つて起れる所、當時こゝに堀越御所ありて、足利政知こゝに東國を治せしが、死後内亂あり、長氏之に乗じて伊豆に入り、其子茶々丸を殺して、遂に伊豆相模を掩有せしなり。北條氏の亡ぶるに當つてや、其族北條氏規こゝに拒守せしが、城遂に陥りたり。此

韭山

近傍に、幕末に際して最も卓見なりし韭山の代官江川太郎左衛門が大砲を鑄造せし、反射爐存す、亦以て當時を追憶するに足る。修善寺は源頼家幽居の地にして有名なる温泉あり。こゝに頼家及び範頼の墓あり、但範頼の墓といふは近年の發見建設にて、一考を要すべきものなり。凡そ伊豆半島、國

江川英龍の大砲鑄造

の外、伊東熱海伊豆山湯が島等皆有名なり。殊に熱海は間歇泉として時を定て噴出す、人車鐵道あり、小田原より通ず。伊豆山に走湯權現あり、源氏の尊

修善寺

熱海

伊豆の温泉

熱海

伊豆の温泉

熱海

下田港

伊豆の東南隅に下田港あり、黒船來泊を以て名あり。幕府即ちこゝに下田奉行を置き、一旦開港せしが、横濱開港後閉鎖せり。

駿河海濱

駿河の海濱は景勝の地に富む。沼津より西、田子の浦を経て、富士川を渡り

富士川

蒲原山比興津、江尻等も佳なり。富士川は治承四年平維盛の大軍が、水禽の

清見沼

羽音に驚きて、應病の名を萬世に傳ふる所なり。興津は薩埵峠の西方にして、清見沼にのぞむ。前面に三保松原の斗出する

静岡

あり。清水港をひかへて、清見寺よりの眺望第一と稱す。之より西すれば、江尻を経て静岡に達す。

久能山東照宮

静岡はもと駿河國府の地、故に駿府ともいふ。静岡縣廳所在の地にして、維

磯機山

新後徳川舊將軍の封ぜられし所、もとより徳川氏に縁故深く、東方久能山に

は別格官幣社東照宮の祠あり、元和二年家康の駿府に薨するや、遺命してこゝに葬らしめたるなり。社殿壯麗にして日光につぐべし。又市の北、賤機山には淺間神社あり、亦壯麗を極む。山は今川義元居城の地。山麓に臨濟

寺あり。近傍に義元の首塚あり。静岡市中には漆器竹細工の製造盛んなり。

宇津谷峠

御津

静岡より西方國道は宇津谷峠を越えて岡部藤枝をすぎ島田に出づ。又鐵道はむかし日本武尊が草を薙いて賊火を免れ給ひし古蹟なる焼津を過ぎて之に會し更に大井川を渡りて遠江に入り小夜の中山を懸道にて通過し天龍川を越え濱松町を経て濱名灣口今切より西の方三河國に入る。

大井河

大井川は駿遠二國の境を過ぐ。流れさまで長からざれども上流に高峻なる赤石山脈をうくるが故に降雨の際出水甚しく川幅爲めに半里に及び橋を架するに便ならず徳川時代には雲助を雇ひて逆登渡し肩車渡しかたぐるまの不便を極めし難所なりしが今は大饒橋ありて汽車中に之を越ゆるを得べし。

小夜の中山

大井川の西方菊川あり其西は即ち小夜中山にして西行が年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

見附

とよみし名所なり。之より西見附町を経て天龍川に達す。見附はいにしへ國府の地なりき。

天龍川

新田義貞船橋の美談
秋葉神社

天龍川は信濃國諏訪湖より發し南流遠州灘に注ぐ。義貞竹の下に敗れて西に歸るやこゝに船橋を架し自ら殿して全軍を渡し敵の爲に其橋を残さしめたるの美談あり。川の中流に近く秋葉山あり鎮火の神として信徒の參詣甚多し。

池田宿

天龍川の西にもと池田の宿ありき。河道變りて今は川の東にあり。平重衡捕られて鎌倉へ下向の時宿の長者の娘が

東路の植生の小屋のいぶせきに故郷如何に戀しかるらんと詠みしことはよく人口に膾炙する所なり。

濱松

此西方に濱松町あり。家康の遠江を取るやこゝに城を移して信玄に攻められ三方原の戦争もありき。町をすぎて濱名湖に達す。

濱名湖

濱名湖は遠江の西南隅にありて今は海に通ずれどもこは永正年間の地震に破れたるが爲めにしてもとは淡水の湖なりき。されば國名を遠江といふも淡海の國の義にして都に近き琵琶湖のある國に比して更に遠方にあるが故に遠淡海の國といひしなり。遠江は蓋し遠淡海の略稱なり。湖口

新居氣野の湖

水邦地理 静岡縣

三方原

産物

新居には徳川時代に關門を構へて湖北の氣賀と相俟つて、行人を誰何せし所なり。此邊名勝古蹟多く、東北三方原は徳川武田の古戰場として其名高く、湖畔高師濱、西北なる猪鼻湖等、何れも景勝に富む。静岡縣の産物は、右に述べたる駿河半紙、静岡の漆器、竹細工などの外に、茶及び遠江東部の石油、鹽表、伊豆の石材、木材、鮭、鯉等の魚類、海藻等多く、伊豆節の名は駿河の興津鯛と共に南北相應じて有名なり。殊に茶の産出は實に全國第一等に居り、外國に輸出する額甚多し。

参考書 駿河志料 八十一册 伊豆志稿 十三册

駿河雜志 七十册 遠州一統志 八册

遠江風土記傳 十册

愛知縣 (三河及尾張)

三尾兩國の産物

三尾兩國、足利時代の末世に於て豪傑雲の如く輩出せり。信長あり、秀吉あり、家康あり、部下諸將前田、柴田、丹羽、淺野、加藤、蜂須賀、福島等實に枚舉に遑あらざるなり。中にも豊臣秀吉の如きは、一農家より起りて空前の偉業をなし、多年の戦亂を統一して、今尙豐國神社と崇められ、次で徳川家康は、之れがあとをうけて、江戸幕府の基を開けり。而して、この三尾兩國は、實に愛知縣

地氣の變遷

の管下に屬す。

凡そ地方の盛衰は天運の循環によるものか。鎌倉時代以後、久しく關東武士の天下に覇を稱し、源頼朝をはじめとして、北條、新田、足利の諸氏出でしもの、一度四國に移りて細川、三好の權力を振ふ世となりしが、次でかく三尾兩國に移り、明治に至りて更に變じて殆んど薩長の世の中となれり。地氣の變遷する所奇なりといふべし。

豊橋

三河の名は豊川、矢矧川、大平川の三大河あるより得たりといふ。豊川の下流に豊橋町あり。豊橋もと吉田と稱す、松平氏の舊城下にして今は、此所に第三師團の第十八聯隊衛戍す、明治二十七八年役にあたりて平壤の戦に佐藤少將の下に勇名を海外に轟かせし兵士は、實に此地方三河武士の後裔たる健兒なり。

豊川稻荷

豊橋よりは豊川鐵道分岐して豊川町を經、更に川に沿ひて北にすゝむ。豊川に吒枳尼天あり、一に豊川稻荷と稱し、信徒頗る多し。

長篠

豊川の上流に長篠あり、天正二年武田勝頼來り、攻め、家康、信長連合の援軍の

本邦地理 愛知縣

鳶巢山
阿寺七瀧

爲に大敗せし所なり。此の戦に鳥居勝高敵軍に捕へられ遂に義に死せし美談あり。勝頼の砦を築きし鳶巢山は長篠より川を隔て、南方にあり。鳶巢山より東北山中に阿寺七瀧あり。山間の奇勝なり。

鳳來寺山

長篠の北方に煙巖山峙つ、山に鳳來寺あり、故に鳳來寺山ともいふ。此地方には珍らしき火山岩質の山なり。山中危岩聳え、石橋胎内潜等の奇あり、風景賞すべし。

蒲郡

岡崎町
八ッ橋

遠江より來れる鐵道は、豊橋より更に西にすゝみ渥美灣頭なる蒲郡の海水浴場を経て、徳川家康のもと居城たりし岡崎町の南方にて矢矧川を渡り、むかし燕子花の名所として、在原業平か

清洲

からころも着つゝ、馴れにし妻しあればはるばる來ぬる旅をしぞおもふの歌をよみて有名なる八ッ橋の古蹟なる牛橋村の南方を過ぎて、尾張に入り、大府熱田等を経て名古屋に至り、更に北方に進みて、信長のもと居城たりし清洲を過ぎ、木曾川を渡りて美濃に入る

松平村

岡崎より東北に離れて、松平村あり、徳川氏の代々居住せし所なり。之より

足助村

知多半島

北、矢矧川の支流に足助あり、元弘の忠臣足助重範の故郷なり。

常滑

大府よりは東海道鐵道の支線知多線の分岐して知多半島に入れるあり、半田を経て武豊に至る。凡そ知多半島は醋醬油、酒等の産地として有名なれども、殊に半田の如き最も著はる。半田の西方伊勢灣の海邊に常滑あり、陶器常滑焼を産す、朱泥を用ゐて雅致あり、常滑の北方に大野あり、常滑と共に好海水浴場なり。

野間、内海

知多半島の西南隅に、野間内海等の地あり。平治の亂に源義朝鎌田政家と共に逃れて内海に至り、長田忠致によりて、遂にさし殺されたり。野間の大御堂寺に義朝の墓あり。

鳴海、有松

大府の北方鳴海あり、近傍なる有松と共に鳴海綾有松綾を産す。此ほとりもと海邊にして鳴海瀉の名ありき。

尾張平野の地圖

遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴く音に潮の満干をぞ知る
の歌の如き有名なり。今は海岸を去る一里餘の陸地にぬれども、鎌倉時代に尙海邊なりし事は、十六夜日記の記事にても知らるゝなり。尾張地方土

地隆起の傾ありて、漸次陸地の増加せるは、此一事を見ても知るべきなり。但世に尾張古園と稱するものあり、平地の尙海なりし時の状をあらはす猿投の宮の寶藏より出づと稱すれども、偽作にして信じ難し。

其東南に桶狭間あり、織田信長が大に今川義元の軍を破りて、はじめて英名を轟せし所とす。

熱田

熱田には熱田神宮あり三種の神器の一なる草薙の寶劍を安置し、尊崇他に異なり。日本武尊の東夷征伐に際し尾張氏の女宮簀媛を娶りてしばし留り給ひしといふ所なり。一大古墳あり、俗に白鳥陵といふ、附會なるべし。

名古屋

名古屋は愛知縣廳所在の地にして、もと徳川御三家の一なる尾張大納言家の城下なり。人口廿五萬に近く、むかし加藤清正の築造せし名古屋城の天守閣は、今尙高く聳えて離宮となり、金の鯨はとこしへに其光を放てり。此所に第三師團司令部あり。

中央鐵道
關西鐵道

名古屋より東北、官設中央鐵道は、今や美濃の多治見に通ず、他日信濃甲斐を経て、東京に通せんとするなり。又西方に向つては關西鐵道の、彌富長島を

尾四鐵道

津島神社

經て伊勢に入り、遠く攝津國大阪に通ずるあり。而して其彌富驛よりは、尾西鐵道ありて北の方津島を經、一の宮に至りて東海道線と連絡す。津島に津島神社あり、祭禮の時は神輿河上に浮び、氏子は無數の船に乘じ、燈をかかげ音楽を奏して進行す。最も壯觀なり、世に津島祭と稱す。

秀吉の故郷

清洲の南、名古屋の西に當りて、織田村あり。織田豊臣二氏の名に取れるものか。實に秀吉の出世地なる上中村は、其中にあり、今豊國神社を祀る。

小牧山
長湫
犬山

名古屋の北方に小牧山あり、東方に長湫あり、國の北隅に犬山あり。天正十四年豊臣秀吉織田信雄と隙を生ずるや、徳川家康、義の爲に信雄を助けて秀吉と戦ふ。秀吉犬山に陣し、家康信雄は小牧山にあり、秀吉の將森長可、池田信輝等家康の虚をかきひ、其本城たる岡崎を攻めんとして、却て家康の爲に裏をかかれ、長湫に大敗したり。犬山は後に名古屋藩の臣成瀬氏の封となる。こゝに陶器犬山焼を産す。

尾張の東北隅に瀬戸あり、著名なる陶器の産地なり。むかし加藤四郎左衛門景正なる者、貞應年間道元禪師に従ひて支那に渡り、宋國の法を傳へて此

陶器

七寶燒

木綿織

大根

飛驒

位山

地に陶器の産を開きてより、以來今に至りて尙盛大を極め瀬戸物の名は遂に陶器の別名の如くなれり。蓋此一帶の地多く良好の陶土を産するが上に、徳川時代には、大に尾州徳川家の保護奨励ありしが故に、この盛を致し、なり。又名古屋及び其近郷寶村には七寶燒を製す、これ亦名あり。縣下の地平野廣くして、綿藍の産出多くして三河木綿及び鳴海綾、有松綾、其他の木綿織の産夥しく、又尾張大根の殊に大なるを以て有名なるあり。

参考書 三河國郡志

六册

三河古蹟考

五册

尾張名所圖繪

一册

岐阜縣 (美濃及飛驒)

岐阜縣は愛知郡の北に連なり、美濃飛驒の二國を管す。飛驒は山國にして、東は御岳、乘鞍岳等一帶の山脈を以て信濃に境し、西は白山、大日岳等の連山を界として、加賀、越前に接し、國の中央には位山ありて分水嶺となり、是より北方の水は北流して、越中に入り庄川となり、南方の水は飛驒川となりて南流し、美濃に入りて木曾川に注ぐ。位山に水松を産す。いにしへ公家の用ふる笏の料となすが故に、此木を一

高山町

城山

國府、國分寺

飛驒工匠

神岡鐵山

濃飛平野と河流

位の木、山を位山と稱すといふ。

位山の北に高山町あり。山間の一都會にして、宮川中央を貫き、山水明媚なり。枇目春慶塗、一位細工を産す、又絹糸を以て名あり。枇目細工は寛永中國主全森宗和の創めし所といふ。

其東南城山は天正年間金森右近こゝに封ぜられて居りし所もと永正年間高山外記の始めて築きし所といふ。

高山の北方國府村は古へ飛驒國府のありし所、又東方なる大名田村には國分寺今尙存す。又此國山間にありて多く工匠を出し古へは交番に京都へ上りて飛驒の工匠の名あり。時に大なる名譽を現はし、畫工百濟の河成と飛驒の工匠とが互に技術を闘はしたる有名なる談もありて、其の名世に高し。國の北部に神岡鐵山あり、銀銅等を産す。

木曾川は信濃より發し西南に流る。其下流地方は濃尾大平野をなし、一半は尾張にあり、一半は美濃にあり、美濃北部の諸水は何れも南流して此平野に集まり、木曾川に入る。長良川、糸貫川、揖斐川等大なり。濃尾平野は畢竟

本邦地理 岐阜縣

岐阜縣の洪

此等諸川の輸送する土砂よりなれる沖積層の平野なり。而も又其土地隆起の著しき事は愛知縣の條にも述べし如くにして、従つて諸川の水吐き悪しくなり、爲に大雨の度毎に諸川氾濫の患少しとせず。こゝに於て去る二十年來河身改修の大工事を企て、木曾、長良、揖斐の三河を一所に集め、堤防を以て之を分つ。明治三十四年中工事成功せり。

木曾川改修

岐阜市

鷺飼

稲葉山

長良河畔に岐阜市あり、縣廳の所在地にして、岐阜提灯、岐阜團扇、油團縮緬等の産あり。殊に長良川の鷺飼は夜間の一奇觀にして、其漁する香魚亦名物の一たるを失はず。市東金華山あり、いにしへの稲葉山にして、齋藤氏の稲葉山城ありき、信長齋藤氏を滅ぼしてより、移りてこゝに居る。後に秀信こゝに封ぜられ、關原役西軍に與してより、城遂に廢したり。

大垣

東海道鐵道は名古屋より岐阜に至り、西折して大垣關が原を過ぎて近江に入る。大垣はもと戸田氏の城下にして、天主關今尙存す。大垣の東方墨股は長良川の渡場にして、古來度々戰場となれり。

谷汲山

大垣より北に當りて、徳積村に谷汲山華嚴寺あり、西國三十三所の觀世音打

根尾谷

ち止めの靈場として參詣者多し。之より北方、糸貫川の上流に根尾谷あり、

養老山

明治二十四年大震災の震源地として、世に知られたり。西南に養老山あり、山に養老の瀧あり、孝子の美談を以て著はる。但、此談たるも、一の伽喃たるに過ぎず、確なる記録續日本紀によるも、元正天皇行幸の時の養老泉は瀧にもあらず、酒臭くもあざりしもの畢竟孝子と酒との談は、養老と醴泉とより故事附けたるものなり。

孝子の瀧

關分、關分寺

大垣關が原の間に垂井あり、其北方府中はもと美濃國府の地、其東青野に關分寺存す。此邊一帶に所謂青野が原なり。

關が原

不破關

關が原は慶長五年徳川家康が石田三成等大坂方の大軍と雌雄を決したる、天下分け目の大戰場なり。此地は西方近江境に、伊吹山の連山ありて、交通不便なる所なるが故に、古へは此所に不破關を据ゑて東國の口を扼したりし所なれば、今尙關が原の名あるなり。不破關は天武天皇の時に之を置き、爾後伊勢の鈴鹿、越前の愛發と共に三關と稱せしが、桓武帝の時に至りて廢す。其後久しく荒廢のままに存して、古歌に其狀を述べたるもの多し。

三關

美濃紙

土岐見
多治見
陶器

法宮
横穴

越中境界の
越中

岐阜市より東北の地方は多く紙を製す、紙質強し之を美濃紙と稱す。其名最も高くして、今や他國に産する者にも、此國の産に習ひたる者皆美濃紙と稱し、一種の紙の名となれり。又國の東南部土岐、多治見の邊、即ち尾張の瀬戸に近き地方は盛に陶器を産す、其額或は瀬戸よりも多し。而も世に瀬戸焼と混じて美濃焼の名高からず。正中年間、後醍醐天皇の旨を奉じ、遂に北條氏に殺されたる土岐頼兼多治見國長は此地方の人なりき。多治見の西北久々利村は景行天皇東幸の時の行宮、泳宮（ウイノミヤ）のありし地なりといふ。此邊の山腹横穴多し、古代の墳墓なるべし。

美濃古蹟考 十二册 新編美濃志 六册 岐阜縣地誌(伊東午次郎) 一册 同補遺(神谷道一)二册

富山縣 (越中)

富山縣は越中を管す。越中の國もとは之よりも東にのび、今の西越後の地方をも含みしが、文武天皇大寶二年に東部の四郡を削いて越後に併したり。次で聖武天皇天平十三年には、能登を一旦合併せしが、後、また分立して、遂に今日の形を成せり。其地直ちに岐阜縣の北に連れども、南に海を受け、北は

富山市

富山の寶藥

行商

立山

日本海に面するが故に形勢大に異なりとす。縣廳は富山市にあり、此市にもと金澤前田家の支藩前田氏の城下にして、官設北陸鐵道越前より來り通ず。市は神通川に瀕し、市況繁盛なり、此市に有名なるは、反魂丹其他の寶藥なり。こは天和年中醫師淨閑なるものはじめて藩主前田正甫に反魂丹を獻ぜしより、代々藩主の保護を得て、廣く他國に行商したるものにして、全國殆んど行き渡らざる所なし、其行商の法は、先づ自己の得意と定むる地方の戸數を調査し、戸毎に藥一袋づつを預け置き、爾後毎年巡廻して新しき藥と取りかへ、已に使用せる分の代價を得て歸るなり。されば一旦得たる得意先は即ち其家の財産にして、之を質入書入するを得べく、又之を賣買讓與する事をも得るなりと云ふ。

富山より東南の方にあたりて立山あり、有名なる火山にして、立山火山脈是より南走し、乘鞍岳御岳の脈となり、飛騨信濃の間を走る。立山には奇峰數十屹立す、雄山最も高し、頂に雄山神社あり。夏日行者の登山多し。山中に地獄あり、盛に硫氣を噴出す。又温泉あり。

本邦地理 富山縣

高岡市

富山の西方に高岡市あり、小矢部川、庄川の間にあり、二川合流して射水川となる。河口左岸に伏木町あり、右岸に新港町あり。高岡はもと慶長年間前田利長が富山よりうつりて居城せし所、城は間もなく廢せしむ、此時從ひ來りし武器職工は銅器工業の元祖となり、子孫業をつぎて、今尙盛に銅器鐵器を製し、高岡象眼の名高し。

伏木

伏木は日本海屈指の良港にして、東の方、東岩瀬、魚津を経て、直江津に航通するの要津たり。但し冬季は日本海の常として、風浪ありて舟行に便ならず。東岩瀬は神通河口にありて富山市との交通に必要なり。魚津は更に其東北にあり、此邊の海春夏の際、海市即ち唇氣樓を空中に現出する事ありといふ。

海市

國府、國分寺

伏木の西南に二上山あり、東北の海濱を有磯海といひ、東方を奈古の海といふ。又伏木町のうち、古府は古へ國府の地にして、國分は國分寺の所在なり。高岡より南、中越鐵道ありて城端に通ず。城端より東南、一帶の山脈を越ゆれば、庄川の上流平村、上平村、利賀村あり。此地を總稱して五箇山中といふ。

五箇山中

天柱石

蠶業盛なり。山中には鐵鎖を以て釣橋を作れるもの數所あり。平村の下梨にあるもの最も名あり。同村松尾には天柱石あり、高さ二十丈、實に山間の一奇觀とす。又畚を釣りて川を渡す所もありといふ。

俱利伽羅峠

高岡より西南、石動を経て加賀に通ずる所、礪波山を越ゆ。其通路は即ち有名なる俱利伽羅峠にして、壽永のむかし木曾義仲が維盛の大軍を谷に落し、大に之を破りし所とす。

參考書

越中志

二册

加能越三州志(越中の部)

石川縣 (加賀、及能登)

石川縣は加賀、能登二國を管す。此兩國はもと越前の中なりしを、元正天皇養老二年に、羽咋、能登、鳳至、珠洲の四郡を割いて能登國を置き、又、嵯峨天皇弘仁十四年に、更に其殘部より、加賀、江沼二郡を割いて加賀國を置きしなり。徳川時代にありては、この兩國は、越中と共に前田氏の舊封地にして、宗藩は加賀の金澤市にあり、西南なる大聖寺は越中の富山と共に其支藩ありし地なり。されば其封、宗藩百二萬石餘、支藩各十萬石、併せて百二十餘萬石に及

前田氏

加賀能登の國

本邦地理 石川縣

二百二
ひ、徳川時代に於て實に全國第一の大諸侯なりき。従ひて金澤市の如き、今尙北國第一の繁盛を保ち、縣下美術工藝頗る盛なり。其主なるものには、金澤に象眼細工、銅器あり、小松、大聖寺に加賀絹あり、山中の漆器、山代、九谷の陶器、共に名あり。但絹及び漆器、陶器は金澤にて製するもの亦盛にして、九谷陶器の如き名は九谷を稱するも、製出はむしろ金澤にて盛に行はるゝなり。能登の輪島には亦漆器を産す、堅牢なるを以て殊に名あり。凡そ此等の美術工藝品は古へより傳はれるものもあれども、殊に其盛なるに至りしは、豊臣氏滅亡の時、秀吉恩顧の美術家などの、江戸に歸するを快しとせざりしもの、多く京阪より流れて此國に來りしによるといふ。

加賀の南境に大日山あり、東南に白山あり、共に火山にして、白山火山脈に屬す。白山最も高く、山頂白雲を戴くが故に此名あり。山の邊温泉多く、陶器漆器の産地なる山代、山中の如きは、共に有名なる温泉場なり。大聖寺、川此等の地方を経て、大聖寺を過ぎ、越前境に至り海に入る。大聖寺の東北、柴山、湯、今江、湯等の湖水あり。小松は今江、湯の東北にあり。今江、湯の水は安宅

に至りて海に入る。安宅は義經辨慶等が奥州へ下る時に山伏に姿をやつして過ぎたりといふ關所の地にて、辨慶勸進帳朗讀を以て世に聞ゆ。但、事實詳ならず。又此地方は東海道沿岸殊に尾張平野地方などとは反對に、年々陥没の傾ありて、安宅關址の如き、今は已に海中に没入せりといふ。

金澤市は即ち北國一の大都會にして、中央に前田氏の舊城あり、此城もと一向宗一揆の盛なりし時、門徒こゝに築きて、富樫氏に抗せし所なりしが、信長の時、柴田勝家命をうけて一揆を征伐してより、一族佐久間信盛これに居り、次て柴田氏亡びて秀吉これを前田利家に與へ、以て徳川時代に及びしなり。此市今や第九師團司令部あり、第四高等學校ありて、北陸文武の中心たり。其公園兼六園は水戸の常磐公園、岡山の後樂園と共に、日本三公園と稱せらる。

犀川、淺野川の兩河あり、市中を貫流し、犀川は金石港に至りて海に注ぎ、淺野川は市の北方なる河北潟に注ぐ。河北潟の東に津幡あり、北國鐵道越前より來り、大聖寺、小松、金澤を経て、津幡に來り、こゝより北の方、能登國七尾に至

七尾

石川縣は多雨の地

食鹽

漁業

漆器

總持寺

れる七尾鐵道を分岐し、本線は東方礪波山を越えて越中に入る。
 七尾港は前面に能登島を控へ、また日本海の要津なり。
 凡そ加賀能登の地方は、他の北陸道諸國と同じく、南に脊梁山脈の高く連れるありて、大陸より日本海を経て來れる風を遮ざるが故に、従つて多雨の地方たり、殊に能登に於て甚しとなす。然れども能登の北端なる輪島には、また食鹽の産あり。其類遠く瀬戸内海附近の諸國には及ばざれども、又他の諸地方に勝るものあり。又沿海地方漁業盛にして、鰯、鮪等多く、能登七尾の海參亦名あり。其他山地には漆汁の産多く、縣下漆器の多きも蓋し之によるなり。

輪島より西南、門前村といふに總持寺あり。越前の永平寺と共に曹洞宗の二大本山となす。開山は圓明國師にして、創建ははるかに永平寺より後なれども、末寺多く勢力盛なり。先年大火にかゝり、未だ再建に至らず。

桑考書 加能越 三州志 三十八册
 能登名跡志 二册

第四節 近畿地方

各地方廳管轄國郡市表附 舊郡名 () 内のものは明治二十九年分合以前の郡名也

府縣管轄表

縣名	市郡名	國名
福井縣	福井市、足羽、吉田、坂井、大野、南條、今立、丹生、敦賀、三方、遠敷、大飯	越前
	大津市、滋賀、栗太、野洲、甲賀、蒲生、神崎 (一部は愛知に属す)	近江
	犬上、坂田、東淺井、伊香、高島 (神崎の一部は加ふ)	近江
京都府	京都市、愛宕、葛野、紀伊、乙訓、宇治、久世、綴喜、相樂、加佐、與謝、中、竹野、熊野	山城
	南桑田、北桑田、船井、天田、何鹿	丹波
滋賀縣	多紀、氷上	丹波
	出石、城崎 (城崎、美含、養父、朝來、美方、二方、七方、八方、九方、十方、十一方、十二方、十三方、十四方、十五方、十六方、十七方、十八方、十九方、二十方、二十一方、二十二方、二十三方、二十四方、二十五方、二十六方、二十七方、二十八方、二十九方、三十方、三十一方、三十二方、三十三方、三十四方、三十五方、三十六方、三十七方、三十八方、三十九方、四十方、四十一方、四十二方、四十三方、四十四方、四十五方、四十六方、四十七方、四十八方、四十九方、五十方、五十一方、五十二方、五十三方、五十四方、五十五方、五十六方、五十七方、五十八方、五十九方、六十方、六十一方、六十二方、六十三方、六十四方、六十五方、六十六方、六十七方、六十八方、六十九方、七十方、七十一方、七十二方、七十三方、七十四方、七十五方、七十六方、七十七方、七十八方、七十九方、八十方、八十一方、八十二方、八十三方、八十四方、八十五方、八十六方、八十七方、八十八方、八十九方、九十方、九十一方、九十二方、九十三方、九十四方、九十五方、九十六方、九十七方、九十八方、九十九方、百方)	但馬
兵庫縣	姫路市、明石、美彌、加東、多可、加西、加古、印南、飾磨 (東)	播磨
	本邦地理 近畿地方	二百五

- 〔西〕神崎(神東) 揖保(揖東) 赤穂(赤東) 佐用(佐東) 穴栗(穴東).....
- 津名、三原.....
- 神戸市武庫(武庫、八部)河邊、有馬.....
- 大阪府西成、東成(東成)三島(島上)、豊能(能勢).....
- 南河内(石川、錦部、八上、古市)中河内(丹北、大縣、高安、河内)
(安部、丹南、志紀の一部)
北河内(茨田、交野).....
- 堺市、泉北(大島)、泉南(南、日根).....
- 奈良市、添上、生駒(添上)山邊、宇陀、磯城(式上、式下)、高市、
北葛城(廣瀬、葛下)、南葛城(葛上)、宇智、吉野.....
- 阿山(阿拜)、名賀(名賀).....
- 津市、四日市市、桑名、員辨、三重(朝明)、鈴鹿、河藝(河曲)
安濃、一志、飯南(飯高)、多氣、度會.....
- 志摩(志摩).....
- 南牟婁、北牟婁.....

大阪府

奈良縣

三重縣

和歌山縣(和歌山市、海草(海草)、那智、伊都、有田、日高、西牟婁、東牟婁).....紀伊
以上二府六縣十七國、一百〇七郡、十一市、一百十八町、二千〇十五村。

畿内五國

畿内の意

大化改革
畿内四至

神武天皇美地を求めて東征し給ひてより、大和は遂に我國の中心となり、こゝに橿原の宮に皇都を定め、鈴ひしかば、其後歷朝の天皇往々遷都の事ありしと雖、多くは常に其近傍を出でざりき。依て其附近の五國を稱し畿内といへり。畿内とは王畿内の義なり。支那古代の封建の代にありては、王畿千里の制あり、帝都の四近方千里を劃して、天子の直轄領となし、他の諸侯の分領する所となせり。我國の制も之と同じからずと雖、而も尙この名稱を借り用ひしものか。孝徳天皇大化の改革に際し、畿内の四至を定めたる事日本紀に見ゆ。之によるに、東は名壘(名壘)の横河、即ち今の伊賀、名賀郡(名賀郡)境より、西は赤石の櫛淵、即ち今の播磨、明石の邊に及び、北は狹々波(狹々波)の合坂山、即ち今の逢坂越より、南は紀伊の兄山(兄山)にまで及べる由を記せり。其四至たるや、蓋し交通路の終點を以てせるものなるべければ、今日に比して大差なきなり。

本邦地誌 近畿地方

畿内の名取

開化

上方風

地勢

畿内の地は久しく政治上の中心たりしかば、歴史上の遺蹟多きは言ふ迄もなし。由緒ある神社佛閣、其他名所古蹟等至る所に存す。従つて土地よく開け、人口多く、畿内五國の住民を、其面積四百四十五方に割らざれば、一方里平均六千人に近きを見る。殊に京都は千百年來京都の地として、平安王朝柔弱の後を受け、鎌倉江戸等武家氣質の素朴なるに似ず、風俗自然に貴紳優美の風に化し、其影響は畿内の五國より更に近傍の數國を風靡して、所謂上方風となれり、上方とは京都を我國の上とし、其近傍諸國を汎稱せるものなり、其境域たるもとより漠然たるものなれど、はゞこゝに所謂近畿地方にあたるべきか。

近畿地方の地勢たる、其南部地方は、三面海をうけて、半島狀をなし、北部地方また日本海に瀕し、而も内部には山岳多く、川流は放線狀をなして四方の海に注ぎ、地勢自ら數區に分れて、一様に之を説明すべからず。淀川、大和川の邊には、京都平野、大和平野、大坂平野等の稍見るべきものあり。伊勢播磨の沿海、近江琵琶湖の沿岸、また平地を成せども、其他には著しきものを見ず。

鐵道交通は、頗る發達す、京都、大阪、奈良の三市鼎足の狀をなして、畿内平野の三中心點となり、之より四方に通ず、其主要線路は、

東海道鐵道(官設) 美濃より來り、琵琶湖東を過ぎ、京都、大阪を経て、神戸に終る。

(支線) 敦賀線(官設) 東海道線の米原驛より分れて、越前敦賀に至り、北陸鐵道に連なる。

北陸鐵道(官設) 東海道線の支線なる敦賀線の後をうけ、福井を経て、加賀に入る。

山陽鐵道 東海道線に連絡して神戸より起り、遠く山陽道に通ず。

關西鐵道 尾張名古屋より起り、伊勢伊賀山城を経て、奈良に至り、西の方

河内の中央部を経て大阪湊町に通ず。

(支線) 網島線(關西) 加茂驛山より分れ、河内の北部を經、大阪網島に通ず。

(全城東線(關西) 東海道鐵道大阪驛梅より起り、大阪市東を回りに、湊町に通ず。

(全)河南鐵道 關西鐵道柏原驛河内より起り、富田林を経て長野に通ず。
 (全)櫻井線關西 本線の王子驛和より分れ、櫻井和に通ず。
 (全)草津線關西 東海道線の草津驛と、關西本線の柘植驛和とを連絡す。
 京都地方より伊勢參宮せんとするものなど、之によるべし。
 (全)津線關西 本線の龜山驛より分れて、津市に至り、參宮鐵道と連絡す。
 參宮鐵道 關西鐵道津線の後をうけ、宇治山田町に通ず。
 近江鐵道 東海道線の彦根驛と、關西鐵道草津線の貴生川驛和とを連接す。
 奈良鐵道 京都より奈良を経て、櫻井に通ず。
 南和鐵道 關西鐵道櫻井線の高田驛より分れて五條に通ず。
 紀和鐵道 南和鐵道の後をうけて五條より起り、紀の川に沿うて、紀伊の和歌山に通ず。
 南海鐵道 難波大より起り、和泉の海岸に沿ひて、紀伊和歌山に通ず。
 高野鐵道 沙見橋大より起り、堺市を経て、河内の長野に通ず。紀伊高野山下、橋本に通せんとの豫定なれど、未だ開通に至らず。

京都鐵道 京都より丹波を経て、丹後舞鶴に通せんとするもの。今や關部丹まで開通す。
 西成鐵道 東海道線大阪梅驛より起りて、安治川口に通ず。
 阪鶴鐵道 東海道線神崎驛より起りて、南は尼が崎まで、北は丹波の福知山まで通ず。之れ亦丹後舞鶴に通じ、大阪舞鶴を連ねんとす。
 播但鐵道 山陽鐵道姫路驛より起り、南は飾磨まで、北は但馬の新井まで通ず。

參考書

五畿内志 二十五册

此外は各府縣の條下を見よ

福井縣 (若狹及越前)

福井縣は北陸道の西端若狹越前の二國を管す。北陸道は即ち越路越なり、帝都より出で、北の方一帶の山脈を越えて、彼方あなの陸路の義なり。北陸道を西宮記くわいに、くわいのあちと訓す。あちはみちの誤りか。中古の片假名にはあともと字跡相似たり。後人誤りてあちとなせるか。あともと混同する

本邦地理 福井縣

事肅慎をみしはせともあしはせとも訓ずるにても知るべし。

古北陸道
愛發關

古北陸道は近江の湖西を経て北の方有乳山を越え越前に入る。古へは此山に愛發關ありて不破鈴鹿と共に三關と稱し北陸の口を扼せしが早く廢し殊に後には街道も近江の湖東を経て朽木峠へかゝる様になりしかば故關の名も不破鈴鹿の如く著名ならざるなり。今は東海道鐵道の支線近江の湖東を過ぎて來り敦賀を経て北進す。

福井市

縣廳は福井市にあり此市は徳川幕府御家門の第一たる越前家松平(結城)氏の舊城下にしてもと北の庄と稱し柴田勝家の據りし所なり。市南足羽山に足羽神社あり男大迹皇子を祀るといふ。皇子は即ち繼體天皇にして此地方即ち天皇が潜龍の地なりければ土民其徳を慕ひて祀れるか。近年此山へ新田義貞を祀れる別格官幣社藤島神社を建立せり。これ市北西藤島村より移せるにて此山南北朝の當時に足羽城ありし古址なるによれるものか。義貞南朝の忠臣として後醍醐天皇の皇子尊良親王を奉じて北陸を鎮せしが故に越前にはこの足羽城をはじめとして柳山黒九平泉寺等當時

藤島神社
義貞の關係
遺蹟

金崎岩

の遺跡甚多し。國の南方敦賀灣頭なる金崎亦新田氏の據守せし所にして金崎宮には當時此所に薨せられたる尊良親王及び其の御弟恒良親王の靈を祀る。

名邑

福井の南方に麻生津鮎江武生敦賀等の名邑あり。鮎江敦賀には第九師團に屬する聯隊衛戍す。

洩水

麻生津はいにしへの洩水の地にして洩水の橋の名催馬樂等古書に見ゆ。

武生(國府)

武生は即ちもと越前國府の地にして北朝の將足利高經府中によりて新田義貞と戦ひしといふは此地なり。敦賀は金ヶ崎の南にあたり日本海の要津として貿易港の一なり。其東方に氣比神宮あり神功皇后外六座の神を祀る。敦賀灣はいにしへの筥飯浦にして古代より著名なりし事は崇神天皇の末年に任那より王子都怒我阿瓦斯等なるもの來着し神功皇后遠征の時にもまたこゝより船出し給ひしなどによりても知らるゝなり。氣比神宮に皇后を祀れるまた此由緒によれるものか。また筥飯行宮といふもありき。

氣比神宮
筥飯浦

愛發

敦賀の南方に愛發村あり愛發關によれる名と見ゆ。或はいふ關址は隣村中郷村大字道の口にありと。

九頭龍川

福井市の北方に九頭龍川あり南より武生、鯖江を過ぎて來れる日野川と會して西北に流れ坂井港に至り海に入る。港頭に三國町あり川によりて運輸の便あり。

永平寺

九頭龍川の中流福井市を東に去る四里志比谷村に永平寺あり。始めて曹洞宗を傳へたる承陽大師即ち道元禪師の開きたる所にして能登の總持寺と共に本宗の二大本山たり。總持寺に對し之を越本山と稱す。越前には此外にも著名なる寺多し。眞宗三門徒派、出雲路派、山元派、誠照寺派等一向宗の各本山皆また此國にあるなり。

眞宗諸本山

若狹は若狹灣に面する細長き小國にして越前の西南に連る。敦賀より野坂岳の北麓を過ぎて入るべし。

小濱

國の中央小濱灣に瀕して小濱あり酒井氏の舊城下にして漆器若狹塗を産す。小濱の西南に後瀬山あり山上の眺望よく前面に灣を夾みて遙かに背

青葉山

若狹
海産物

面が濱を望み久須夜が岳の懸崖高く峙てるに對す。

國の西境丹後に境して青葉山あり一基の休火山にして若狹富士の稱あり。此國の沿岸港灣の出入多く漁業の利少からず。小鯛、鰈、鹽鯖等は多く之を京都に致す。鐵道の便開けざりし時にありては京都の魚多く供給を此國に仰ぎしなりといふ。

越前産物

越前西方の海亦雲丹を産す越前雲丹といふ。然れども此國には多く茶、檜、桑、麻等を植ゑ製茶製紙の業盛にして生絲、羽二重、奉書紬等を産し絹織物の産額は京都、群馬につぐものあり。麻織亦多く紙には越前奉書鳥の子、杉原等上等もの多し。

若狹國志 二册 古今類從越前國志 七册
足羽縣地理志 十一册

滋賀縣 (近江)

滋賀縣は近江一國を管す。近江の國名は淡海の義にして詳しくは近淡海と稱す。國內に琵琶の淡海あるが故の名なり。之を近江といふは遠江の濱名湖あるに對して都に近き淡海の國なりとの義なり。後に淡海の文字

本邦地理 滋賀縣

近淡海

琵琶湖

を江に改め訓にちかつを略して近江と書してアフミと訓む事となれり。琵琶湖は日本第一の大湖にして、周囲約六十里地誌提要に七十三里とあり。水西南に流れて勢多川となり、山城に入りて宇治川となる。宇治、勢多は古來東西に分れて戦争する時に、多く戰場となれる所にして、殊に勢多にては壬申の亂、木曾義仲、粟津の戦及び承久の役等に於て最も著はれたり。其が中にも義仲戦死の粟津の地には、後人墓側に義仲寺を立て、芭蕉の「木曾殿と背合せの寒さ哉」の句碑を以て、殊に世に現はる。今井兼平の塚また粟津の耕野中に存す。

勢多の戰場

義仲寺

瀬田の唐橋

大津市

舊郡

湖口に瀬田の唐橋あり、鐵道の鐵橋と相並ぶ。之をすぐれば間もなく大津市に入るべし。こゝに縣廳あり。もと此地は、古來湖上交通の要津として、古くより世にあらはれ、成務天皇の志賀高穴穗宮、天智天皇の大津宮の如きも此近傍にありき。今、市北滋賀村に其古蹟と稱する所あり、長等山に沿へる地にして、薩摩守忠度が
さい波や志賀の郡はわれにしをむかし長等の山櫻哉

弘文天皇陵

古津

近江八景

三井寺
延曆寺

と詠みしは、實に舊都の光景をつくせり。弘文天皇崩御の山前は、またこの長等の山前なりと云、近ごろ大津の別所といふ所に御陵定まりたり。但其考證を知らず。山前の地理亦疑なきにあらざる。大津は斯の如き地なるが故に、志賀都廢替の後一旦名さへ古津と改まりしも、後世稍其位置を南に轉じて繁盛の衝をなし、今尙此市を中心として、數回湖上汽船の往復あり。此所に第四師團に屬する聯隊衛戍す。大津の邊湖畔景勝の地多く、早く已に近江八景の選あり、唐崎の一ツ松、石山の月、三井寺、堅田等最も著はる。八景とは、支那の瀟湘八景に擬したるものにして、比、真暮雪、堅田、落雁、唐崎、夜雨、三井、晚鐘、瀬田、夕照、粟津、晴嵐、矢走、歸帆、石山、秋月をいふ、明應九年近衛政家尙通の父子、佐々木高頼の招きによりて湖畔に遊覽し、八景の和歌を詠せしに始まるといふ。三井寺は大津市にあり、長等山の麓にあり。天台宗寺門派の本山にして、園城寺と稱す。其北方に比叡山の高く聳ゆるあり。山に延曆寺あり、亦天台宗の本山にして、山門と稱し、古へは兩寺共に數千の僧兵ありて、山門寺門の

本邦地理 滋賀縣

山法師

争ひ頗る烈しかりき。白河法皇が嘗て天下睽が意の如くならざるものは、鴨川の水、双六の骰子と山法師とのみと仰せられたる、其山法師とは山門の僧兵の事なり。近年三井寺の下方より、隧道を作りて湖水の水を京都に引く、所謂琵琶湖疏水にして、運輸交通の便あり、京都にては水力を工業に利用する事多し。

琵琶湖疏水

唐崎

唐崎は大津の北方にあり、老松を以て著はる、所謂一ツ松なるものにして、古より名あり。

日吉神社

唐崎の西即ち坂本にして日吉神社あり。日吉は比叡なり、と山上にありしを後にこゝに移せるなり。吉の字、エと訓ず、攝津住吉は、墨の江なるが如し。坂本は即ち比叡の坂本にして、之より山に上るべし。山法師か常に日吉の神輿を奉じて京師を騷したるは、即ち此神にして世に山王と稱す、比叡山王の義なり。

石山寺

石山寺は勢多川に瀕し、庭前奇岩重疊す。寺に觀月亭あり、月を見るに、よるし、又笠を以て名あり。むかし紫式部こゝに源氏物語を書きたり、とて、寺に

遠坂關と三關

交通

源氏の間といふもあり。式部こゝに湖上の月を望みて、先づ須磨明石の巻を著はせりと傳ふれども、こゝより湖上の月は見えざるなり。京都より東國に出づる者、東海、東山、北陸の三道皆此國を經由す。而して大津の西に逢坂關を置きて、一度其通路を扼し、更に鈴鹿、不破、愛發の三關ありて、再び各道の口を守る仕組なり。今は東海道鐵道古への東山道に沿ひ、伊吹山の南を過ぎて、美濃に入り、關西鐵道却て古への東海道に近し。又敦賀線は古への北國街道に近く、布設せられ、米原より分れて、越前に入る。交通極めて便なり。但古への北陸道は湖西を過ぎしものにて、後の北國街道とは同じからざるなり。

野路玉川

東海道鐵道の著名なる驛には、草津、野洲、八幡彦根等あり。草津の附近、野路玉川の故蹟あり、日本六玉川の一なり。之より南方、甲賀郡の山中に入れば、信樂谷あり。むかし聖武天皇の紫香樂宮のありし所、信樂燒の産あり。野

三上山

洲は即ち野洲晒布の本場にして、其近傍に三上山あり、山の形によりて、近江富士の稱あり、藤原秀郷が百足退治の俗傳を存す。其近傍、篠原は平宗盛の

宗盛墓
安土山

斬られたる所にして、其墓あり。八幡は八幡蚊帳の本場なり。八幡は近く
土山あり、信長の安土城の地なり。安土の近傍老蘇村に観音寺山あり、近
江源氏の居城観音寺城の地なり。之より西北方にあたりて湖中奥島あり
長命寺ありて眺望佳なり。

押解皇子墓

八幡より東南市邊村といふあり、之れ古への來田綿の蚊屋野の地にして、顯
宗仁賢二帝の父市邊押解皇子が雄略天皇の爲に害せられし地なりといふ。
近年皇子の墓此地に定まる。

日野

近江商人

之より東南日野川の上流に日野あり、もと蒲生氏居城の地なり。凡そ日野
八幡等の商人は所謂近江商人として古來最も活潑にして徳川時代に於て
早く己に全國に行商し、旅より旅に稼ぎて、富豪の者多く、其足跡の周ねきは
富山の賣薬行商と比すべきなり。
八幡彦根の中間に愛知川あり、上流東小椋村に永源寺あり、臨濟宗の本山に
して楓樹を以て名あり。

永源寺

彦根

彦根は即ち井伊氏三十五萬石の舊城下にして、公園樂々園の有名なるあり。

近江鐵道

近江鐵道此所より起り、東海道鐵道に連絡して、南方八日市、日野を經貴生川
に至り關西鐵道に連なる。

佐和山

彦根の東北佐和山あり、石田三成居城の地、關原役後、井伊氏こゝに封ぜられ、
次で彦根に移れるなり。其東に磨針峠あり。

長濱

彦根の北方に長濱あり、秀吉が城主としてのはじめの居城の地にして、濱
縮緬の産地なり。北に姉川あり、元龜元年信長長政の大戦場なり。又其北

姉川

賤か岳
柳か瀬

方なる賤か岳は北の柳か瀬と關聯して、豊臣柴田の古戰場として有名なり。
長濱より東北にあたりて小谷山あり、淺井氏居城の地、信長の爲に攻められ

小谷

て亡びたるは史上著者の事蹟とす。長濱より西北、湖中に竹生島あり、辨才
天の祠あり、景勝に富む。

藤樹書院

之より湖北に廻りては、鹽津海津等の要津あり、湖西高島郡青柳村は、中江藤
樹の居村にして、藤樹書院今尙存す。

産物

縣下の産物は右に述べたる濱縮緬、八幡蚊帳、野州晒布、信樂焼などの外に、湖
水の魚類多く、中にも源五郎鮎最も名あり、鮎鮎に製して發賣する者あり。

本邦地理 滋賀縣

伊吹山

米、菜種等の農産物伊吹艾イブキ、花筵、硯石等皆名あり。伊吹艾は、其名の如く伊吹山に産す。「かくとだに、えやは伊吹のさし艾」と云ふ之なり。此山美濃境の高山にして、日本武尊が邪神退治の古傳を止む。尊此時毒氣に中り給ひしに、山下の泉に水のみて醒め給へり、今醒が井といふ所、其遺蹟なりと傳ふ。

参考書 近江輿地誌卷 二十册 近江名所圖會 四册 海地志 五册 近江名跡案内記(北川舜治)縮刷 一册

京都府 (山城、丹波の大部及丹後)

管下區域

京都府は山城及び丹波東北の大部分と丹後とを管す。府廳は山城國京都市にあり。

山城の名稱

山城は「山背ヤマセ」なり、古へは帝都常に大和國にありしが故に、山の背ヤマセと稱せしなり、然るに今より千百餘年前京都を帝都となしてより、山河の形勢自然に城を成すとして、山城とは改めたり。舊稱をついでヤマシロと讀む。

山城の地勢

山城の地勢は、四方に山をめぐらし、中央に平地あり、諸水此所に會流す。賀茂川は北より、桂川は西北より、木津川は東南より、宇治川は東より、何れも此平野に集まり來る。桂川に賀茂川を併せて、宇治川と合し、淀川となる。合

淀川

流の所水自ら淀む、此所に淀町あり、淀川の名亦之より起る。川は男山の北をめぐりて、攝津河内の境に入る。男山には岩清水イハシヅク八幡宮あり。淀町は稻

淀町

葉氏十萬石の舊城下なれども、今は淀川の汽船直ちに伏見に通じて繁盛を之に譲り市況衰へたり。

本邦地理 京都府

巨椋池

伏見町

桃山城

京都市

平安京

淀町の東南に巨椋池あり、池の北に伏見あり、伏見は秀吉が城を築きし所、豊臣氏亡びて城廢し、城址桃林となる。故に桃山の名あり。今は梅樹多し、城址は町の東にあり。町は北の方京都市に連る。

平安京の位

古への平安京は、桂川と賀茂川との間にありて、東西千五百八丈、南北千七百五十三丈の長方形をなし、中央に朱雀大路ありて、南北に通じ、市を東西に分つ、東は左京にして、西は右京なり。大内裏は朱雀大路の北端にあり、東西三百八十四丈、南北四百六十丈、四方に十二門あり、別に上東上西の二門ありて、四方に通ずべし。平安京を今日の京都に比するに、其位置今の京都よりは稍西の方に偏す、其大内裏の址は、今の西陣地方より、二條城の北方に當り、朱雀大路は今の千本通りに當る。朱雀大路の南端にありて、羅城門の跡は東寺の西方にあり。されば今日の京都市は古への平安京の左京に賀茂川以東を加へたるものにして、其右京は大半已に田圃となれるなり。賀茂川以

白川

京名所

東山の名蹟

東を洛外と云ひ、以西を洛中と云ふ、左京を支那の洛陽に比し、賀茂川を洛水に比したる所なり。洛外は古への白川の地なり。

京都市は人口三十餘萬、我國第三の都會たり。其地由緒ある名蹟多く、殊に東西北三方の山々何れも景勝に富み、市の内外すべて公園の趣あり。ことに其主なるものを列舉せん。

東海道鐵道の稻荷驛より下車すれば、驛前先づ稻荷神社の朱塗の鳥居あり、朱塗の神殿眼を驚かすに足る。次に泉涌寺あり、歴朝の御陵の所在なり。之より臨濟宗五山の一たる東福寺に至り、通天橋の景勝を賞し、三十三間堂に千體の觀音像を見、更に進まば、大佛の舊址に出づべし。大佛は先に寛文中に鑄造されて文銭となりて、今に世に行はれたれば、古への形また見るべからざるも、其名殘として作れる首ばかりの木像は、巨鐘及び耳塚とともに永く豊公の偉業を忍ばしむるものあり。此所に豊國神社あり、公の靈を祀る。後方阿彌陀峰頭に公の墳墓あり。山麓に京都博物館あり、智積院、妙法院、六谷なる親鸞上人の廟、清水、長樂寺等何れも其北に連り、稍西に離れて

琵琶湖疏水

郊北の社寺

東西本願寺

美術工芸品
其他産物

は建仁寺の莊嚴なるあり。知恩院は東山第一の大建築物にして圓山公園に隣り下方に八阪神社即ち祇園あり其北方に南禪寺あり本堂は先年焼けたり寺の境内には近江琵琶湖の水を引きたる京都疏水開通す水力を工業に利用するあり近江の産物亦船によりて京都に致さるべし。其北方鹿が谷あり之より黒谷真如堂吉田神社に至る。其西南に平安神宮あり樓門を應天門に拜殿を大極殿に摸す。傍に武徳殿あり。更に東方には銀閣寺あり北山なる金閣寺と共に足利將軍榮花の跡を見るべし。市の北部には賀茂上下の社相國寺大徳寺北野神社などあり。西郊には御室の仁和寺花園の妙心寺太秦の廣隆寺などあり市中には東西本願寺あり市南に東寺あり何れも大寺として著名なり。

京都市亦久しく帝國の中心として美術工芸品に富む。中にも西陣の織物其主位たり其質精好産額も亦内國一位を占む。西陣とは應仁の亂に西軍即ち山名宗全の陣のありし所の西北部にあり。此外友禪染繡物清水粟田の陶器漆器京塗七寶燒銅器等何れも有名なり。又京雛京紅京白粉など

名あり。

桂川

嵐山

三尾の紅葉

京都市の西南方を環流する桂川は丹波より來る。上流を保津川といふ懸崖絶壁の間を流れて舟行危険なれども壯快なり。中流を大堰川といふ嵐山の麓をめぐる。山は櫻花を以て名あり。支流に清瀧川あり此川の流るゝ所高雄榎尾梅尾等紅葉の名所あり高雄に神護寺あり和氣清麿の創立にかゝる梅尾の高山寺は今衰へたりといへども明恵上人の住せし所として最も名あり。

鞍馬

愛宕

比叡

山科

京都の北方に鞍馬山あり山中鞍馬寺あり牛若丸の嘶を以て世に知らる。西北に愛宕山あり丹波に堺し東北に比叡山あり近江に連る兩山相對して市の風致を添ふ。中にも比叡山は帝都の鬼門に當るが故に傳教大師は山に延曆寺を立て王城の鎮護とせり。寺は滋賀縣下に屬す。京都の東南は山科にして勸修寺隨心院醍醐寺等眞言宗の諸本山あり本願寺ももところありしが天台宗の僧兵の爲に焼かれて一旦大阪にうつり後今の所にうつりしなり。山科に大石良雄幽棲の故地あり近ごろ大石神

社を建設せり。

山科より東南は逢坂越を過ぎて近江に入るなり。東海道鐵道この逢坂山を隧道にて過ぎて近江より來り、京都市南を経て西南大阪に至る。又京都鐵道あり、京都より起り、西北嵐山の邊を過ぎ丹波に入り、園部に達す。行くゆく丹後の舞鶴軍港に達せんとする豫定なり。又京都より南に向つては奈良鐵道あり、伏見、宇治を経て伊賀より來れる關西鐵道と十字に交はりて、大和の奈良に通ず。

宇治町は宇治川の河畔にあり、むかし應神天皇の皇子菟道稚郎子の住みし菟道と川を挾んで相向ふ。菟道に皇子の御墓あり。此邊宇治銘茶を産す、宇治町には平等院あり、藤原氏榮花の跡を示し、鳳凰堂は藤原時代建築の標本たり。此地は近江の瀬田と關聯して、古來東西の決戦場として史上に名高し。

木津は山城南方の名邑なり。其東北に例幣村あり。徳川氏より伊勢日光例幣使の費用として特に朝廷に奉りし地なり。此地古へ瓶原舊都のあり

鐵道交通

宇治町

例幣村

瓶原

笠置

老の坂

大江山

酒頭童子

し所聖武天皇の皇居たりし大養徳恭仁宮亦此地にありき。地は木津川の上流に瀕せり。此川古へ泉川といふ、瓶原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀しかるらんといふは是なり。其東南に笠置あり、後醍醐天皇一時車駕を駐めさせ給ひし所斷崖絶壁實に要害の地たり。京都市より西京鐵道は保津川に沿ひて丹波に入り、國道は之より南老の坂を越えて丹波に入る。老の坂は大江の坂の義にして、蓋古の大江山なり。道路險惡も大江の關を置きて、こゝに丹波路を扼せり。平安王朝の衰ふるや一時山賊の巢窟となりし事あり、源頼光の酒頭童子退治のお伽噺は、頼光が鬼同丸を亡ぼしたる談と、此地の山賊とを附會して作りしものにて、此事實ありしにはあられざれども、其所謂酒頭童子の大江山が此所なるは古書の文面上毫末の疑ひなし。然るに後の世になりて此地方頗る開け來り、鬼の棲家として似合しからざるより、遂に丹波丹後の境なる大江山を以て之に附會し、大に地理をみだるに至れり。丹波はもと丹後と共に一國にして地勢亦連続す、西北の諸水は福知川と

福知山

舞鶴

宮津

天橋立

浦島子

大江山

なり北流して丹後の海に注ぐ。河畔に福知山町あり阪鶴鐵道攝津よりこゝに來り通ず。

福知川の下流は山良川となりて山良港に注ぐ。山良港の東南に舞鶴灣あり、舞鶴軍港の所在なり。其西北に宮津灣あり、灣頭宮津町あり、灣内の天橋立は陸前の松島安藝の嚴島と共に日本三景と稱す、自砂長く續きて海灣中に突出し、青松と相映して極めて絶景なりとす。

西北に峯山あり、丹後縮緬を産す。

丹後の海濱水産の利に富む。むかし雄略天皇の御代に水江の浦島子が出で、釣し、龜を得て龍宮に至りしとの傳は、與謝海の海濱なり。

丹波丹後の境上に大江山と稱するあり、古書に云ふ大江山とは別なり。此山の東北方、元伊勢と稱する地あり、天照大神及豐受大神の祠あり、伊勢の外宮は雄略天皇の御代に、此所より遷すと稱す。

山城名勝志 三十册 山城名跡志 二十册 雍州府志 十册 山城志 六册
参考書 山城名所記 十一册 丹波志 廿七册 丹後風土記 十册

區域

津市
(津根子)

參宮鐵道

松坂

大神宮

三重縣 (伊賀伊勢志摩及び紀伊の一部)

三重縣は伊賀伊勢志摩の三國と、紀伊東北の一部分とを管す。縣廳は津市にあり。津市はもと安濃津といふ、藤堂氏の舊城下なり。こゝに産物津、緞子あり、有名なり。但此市にて織り出だすにはあらず。

參宮鐵道あり、津市より起りて南方山田に至る、伊勢參宮の道者の便に供するが故に此名あり。道、松坂を過ぐ、松坂は本居宣長の故郷にして、今は本居神社あり。此地松坂縞を産す。

伊勢大廟は宇治山田町にあり、内外兩宮より成る。内宮は本朝三種神器の第一として、皇孫瓊々杵尊の天降り給ひし時、天つ神の親ら授け給ひし八咫寶鏡を御神體として、天照大神を奉祀す。又外宮は豐受大神を祀れるものにして、雄略天皇の御世に、天照大神の託宣によりて、丹波眞名井原(後今は丹)より移し奉れるものなりといふ。内宮は南方宇治にあり、外宮は北方山田にあり、兩宮相去る事約一里。此兩神宮共に、底津岩根(底津岩根)に宮柱太敷立(宮柱太敷立)ち高天

原に千木高知るといふ古代風の建築にして、二十年毎に改築して、御遷宮の式あり。境内廣く老樹繁り、人をして知らずく崇敬の心を起さしむるものあり。西行の歌として傳ふるものに、

何事のおはしますかは知らねどもありがたさにぞ涙こぼるゝ

とあるは、實況をうつせるものなり。

二見浦

宇治の東方に二見浦あり、伊勢海に面して風景よく、殊に大小二個の岩石海中に並び立つの奇景あり。参宮の道者こゝに至りて旭日の其間より昇るを拜するを常とす。

鳥羽

二見浦より東南一帯の海岸出入殊に多く、島嶼散布して風景佳なる所甚多し。中にも志摩の鳥羽港の景最も著はる。港頭に日和山あり、山上より前面の島嶼を瞰下するの景實に絶景となす。志摩東南隅に大王崎あり、奇岩の景勝あり。

大王崎

尾鷲

新鹿
(荒坂津)

之より伊勢の南海岸、即ち所謂外志摩の地方を経て、紀伊に入れば尾鷲、木本等の名邑あり。木本の東北新鹿村は、神武天皇東征の時に方り丹敷戸畔を

花窟

志摩國境の
總題

産物

誅したる、熊野の荒坂津なりと稱す。伊奘册尊の御陵と稱する、有馬の花窟亦このほとりにあり。凡そ伊勢南岸より、此邊に至るまで、もと志摩國の中にして、英虞郡に屬せし事は、古書の記する所によりて明なる所なるが、後世領主の關係より、遂に今日の如く國境を變ずるに至りしなり。此等の海岸地方の産物には、鹿角菜、海鼠、真珠等の海産物多し。之に反して北方伊勢には、米、綿、藍、菜種等の農産物多し。然れども亦伊勢蝦、蛤等の海産物も少からず。

一身田
(専修寺)

津市より北、更に關西鐵道の支線ありて、北の方一身田を過ぎ、龜山に至りて關西鐵道本線に會す。一身田には、真宗高田派の本山専修寺あり。此寺も開祖親鸞上人が、下野の高田に開きし所にして、之を弟子真佛に傳へしが、第十世真慧に至り、後花園天皇寛正年中に、今の地に移し、なり。戰國時代にありては、此派の勢頗る盛にして、本願寺と共に一揆を起して、雄を北越に争ひし事もありしが、後には其力大に本願寺に及ばずなれり。

白子町
(伊勢平
氏)

一身田の東北に方りて、白子町あり。もと伊勢平氏の居所にして、白子氏の

名ありき。源頼政宇治の戦に、白子黨皆緋綴の鎧着て宇治の網代にかゝりけるかなといふは之なり。

關西鐵道

關西鐵道本線は、尾張の名古屋より木曾川を渡りて伊勢に入り、桑名、四日市を経て龜山に津支線と會し、關を過ぎて伊賀に入り、上柘植より近江の草津にて、東海道鐵道と連絡する草津支線を出だし、西南上野を過ぎて山城に入り、更に大和、奈良を経て、遂に大坂に達するなり。

桑名

桑名には時雨蛤の名物あり、又陶器萬古焼を産す。桑名の舊藩主松平氏は、維新前に會津藩と共に禁裏守護の任を以て有名なり。

四日市

四日市市は伊勢灣の要津にして、横濱神戸へ航海の汽船、多く此所を經山し、近來大に繁盛に赴けり。

能褒野

(白鳥陵)

四日市と龜山との間の野、之れ古への能褒野なりといふ。日本武尊の東京征伐の歸途、此地に薨し給ふや、遺骸を此地に葬りしに、白鳥あり、墓より山て、大和の琴彈原に至り、更に又河内の古市に至れり。よりにて此三所に、共に

陵を起す、之を白鳥陵といふと傳ふ。今は此地に尊の靈を祀れる能褒野神社あり。

關

鈴鹿關

關は、尙美濃の關が原の名が、不破關より來りしが如く、古へ此西北にありし鈴鹿關より得し名なり。鈴鹿關は不破關及び愛發關と共に三關と稱し、相並びて東海、東山、北陸三道より近江に入るの口を扼したりし者なり。古へ關東、關西の稱へは之を以て界とす。關東二十八國、關西三十八國の稱あり、後世關八州の稱ありて、箱根關以東を關東と稱する事あり。然れども之に對して箱根以西を以て關西と稱する事なし。

上野

上野は伊賀中央の名邑にして、もと藤堂氏の支城の地なり。町に傘を産す。城側鏡屋の辻と稱する所は、寛永年間渡邊數馬の伊賀越大仇討のありし所とす。

参考書

伊賀伊三田地志 三十三册 伊賀温故 四册 伊賀國志 五册

伊勢桑名所圖會 六册 五鈴遺響 四十册 神郡名勝志 七册

志 關 學 志 一册

本邦地理 三重縣

奈良縣 (天和)

區域
大和平野

奈良縣の管する所大和一國なり。其南部東部は山岳重疊して、たゞ西北部に四方山を以て圍まれたる平野あり、之を大和平野となす。其地良きを以て太古天孫饒速日命、早く已に此地に降り住み、大國主命も、また大和三諸山^{三輪}に跡を留めし事、神代史の記する所なり。神武天皇また此所に良地あるを聞き給ひ、高千穂宮に諸皇兄皇子を集て議して曰く、東に美地あり、青山四周す、必ず以て天業を恢弘し、天下に光宅するに足るべし、蓋し六合の中心^かかと、遂に兵を率ひて東征し、土賊を平げて、都を平野の南方畝傍山の邊に定め給へり。青山四周の地實に大和平野なり。今も尙大和平野の地方を國中と稱す。之より以後桓武天皇が、都を山城に遷さるるまで、殆ど四十代一千四百餘年間の帝都は、多くは此平野の中にありき。從ひて代々の山陵其外古代の遺跡多し。我國號をヤマトと稱するは、この青山四周のヤマトとより、皇威廣く及びたるより、從て其名を廣く全國に及ぼしたるものなる事

國中

ヤマトの國

は總論國號の部に云へるが如し。

奈良市
春日率川宮

奈良市は縣廳の所在にして、平野の東北隅にあり、むかし開化天皇はこゝに宮居まし、^{春日率川宮}て、春日率川宮と呼ひしが、其後元明天皇に至りて、再び此の西方に都を移し給ひ、之より七代七十餘年の間、時に他に遷都の事もありしも、とにかく、所謂奈良朝を通じて帝國の中心たりき。當時佛教隆盛に、文物極めて盛なりしかば、名所舊跡の今に残れるもの尙甚多し。先づ市東には、安倍仲麻呂が支那にありて海邊に月を望み、故郷の事を思ひ出で、青海原よりさけ見れば春日なると詠みし三笠山をはじめとして、春日山、若草山など相連り、藤原氏の氏神として隆盛比ぶものなかりし春日神社は、今も官幣大社として、社殿壯嚴を極め、其境内には神鹿の悠々自適群をなして、參詣の人々に馴親しむもあり、菅公が紅葉を見て、此度は幣も取り敢へずと詠みし手向山^{手向山}八幡は、東大寺の鎮守として、其北に連り、聖武天皇建立の東大寺の大佛、藤原氏の氏寺たる興福寺など、衰微したるながらも、何れも山麓に相連れり。中にも東大寺の正倉院は、幸に數度の火災を免れて、千百餘年の舊形を存し、

手向山八幡
東大寺
興福寺
正倉院

三笠山
春日山
若草山
春日神社

博物館

猿澤池
新薬師寺

奈良名物

平城京の遺跡

奈良市の起原

今尙皇室の寶庫として、無數の貴重なる奈良時代の遺物を藏するあり。近ごろ奈良帝室博物館も、亦此附近に設けられて、數多の古美術品を陳列せり。興福寺の前に猿澤池あり、天平時代の建築を留むる新薬師寺この附近にあり。

奈良市の産物には、木彫の奈良人形、鹿角細工、根來塗、奈良晒布、奈良團扇、奈良漬、酒等あり。近時鐵道の便開けてより、市況殊に隆盛に赴き、遊覽の人多く、此等の品を土産として購ひ去るなり。

然れども平城京の遺跡は今の市よりは稍西方にありしが故に、西大寺薬師寺、唐招提寺等の巨刹、何れも遠く西方田野の間にあり。其他奈良朝の遺跡却て市外に存するなり。蓋し平城京は、平安遷都と共に廢して田野となり、たゞ東方の山麓には、藤原氏の氏神たる春日神社、寺たる興福寺の盛なるありしが爲め、人民群集して、以て今日の奈良市を成せるものなり。現今奈良市より西に向つて、田野の中に一條の直路の通ずるあり、之れ古への三條通なりしならんといふ。

古代陵墓の群集地

鐵道交通

郡山

法隆寺

富の緒川

市の西北、西大寺の東北には、成務天皇、神功皇后、其他古代の陵墓甚多く、又未だ何人のとも知れざる偉大なる古墳群集す。此地方蓋し古代高貴の葬地なりしが如し。

奈良市は鐵道四通の便あり。關西鐵道は山城より來り、此市を経て西南にす、み郡山、法隆寺、王子等を過ぎて、河内に入り、奈良鐵道は京都より來り、同じく此市を経て南の方櫻井に達す。又關西鐵道の支線ありて、王子より分れ、高田を経て、櫻井に通ずるあり。高田よりは、南和鐵道ありて、南の方五條に通じ、こゝに紀和鐵道と連絡して、紀伊和歌山に通ずるなり。

郡山は、柳澤氏十五萬石、舊城下なり。柳澤吉保五代將軍の寵を得て、少身より立身し、遂に甲府十五萬石に封ぜられしが、其子に至りて封をこゝに移されたるなり。

法隆寺は古への斑鳩の地にして、聖德太子斑鳩の宮を以て寺となす。今存するもの、尙當時の建築なりといふ。鳥見の小川あり、其東を流る、古歌に

斑鳩や富の緒川の絶えばこそ我が大君の御名忘れえぬ

鳥見

とあるこれなり。上流は古へ鳥見郷の地、今宮緒村といふ、鳥見の長髓彦の故地なり。神武天皇河内の孔舎衙坂(口下坂)より勝駒山を越えて、直ちに長髓彦の本據を衝かんとし給ひしは、古史の傳ふる所なり。

龍田川

法隆寺の西方に龍田あり、龍田川流る。紅葉の名所なり。

信貴山

其西方に信貴山あり、松永久秀の據りし所なり。

片岡の達磨寺

王子は古への片岡の地、こゝに達磨寺あり、聖德太子嘗てこゝに飢をたる聖者を見る。元亨釋書に之を達磨大師となす。達磨寺は其遺蹟なり。

當麻

之より關西鐵道櫻井線によりて進まば、下田を経て高田に達す。高田の西方に當麻村あり、垂仁天皇の御代に野見宿禰と相模ひたる、當麻蹶速の郷里とす。村に當麻寺あり、禪林寺と稱す。俗に有大臣豊成の女中將媛が、逆絲を以て織りたりといふ曼陀羅あり。中將媛の事正史の尋ぬべきなし、伽嘶雲雀山蓋し其出所か。

畝傍山

高田の東に畝傍驛あり。驛の南方に畝傍山あり、山の東南樞原の地は神武天皇舊都の地にして、都址には今樞原神宮あり、天皇の靈を奉祀す。天皇の

香久山
耳成山

御陵は山の東北にあり。

藤原宮

畝傍山の東方に香久山あり、東北に耳成山あり、三山何れも孤立の山にして、平野の一隅に鼎立の状をなす、極めて見事なり。持統文武兩帝の藤原宮は實に此三山の中央にありき。當時此宮には己に左京右京の設もあり、東西の市もありて、規模は稍小なりしならんも、都制は後の平城京平安京の如きものなりしを知る。世或は斯の如き都制を平城の京に始まれるもの、如く思ふは、非なり。櫻井の北に三輪町あり、素麵を産す。町の東に三諸山あり、大神神社の鎮座せる所なり。櫻井の東に初瀬町あり、町に長谷寺あり、有名なる長谷觀音を安置す。寺は眞言宗新義の本山として、參詣頗る多し。櫻井の南方に多武峰あり、古へ田身峰といふ。山に談山神社あり、藤原氏の祖鎌足を祀る所、社殿壯麗なり。山を越えて南に出づれば、吉野に至るべし。南和鐵道は高田より起り、新庄、御所、葛等を経て、楠木正成の籠りたるを以て有名なる金剛山を右方に見て、五條町に達す。

三輪町

大神々社

長谷寺

多武峰

忍海角刺宮

新庄の東方、北花内に飯豐天皇の陵あり、其南方に天皇の忍海宮あり、當時の

歌に

大和にて見かほしものは忍海のこの高城なる角刺の宮
とあり壯麗なりし事想像すべし。

武内宿禰
入鹿父子墓

御所の邊また皇居及び御陵墓多し。武内宿禰の墓入鹿父子の大陵小陵も
また此邊にあるべし。

五條町

五條町は吉野川に沿ひ大和伊勢より紀伊に交通する要路に方りて市況頗
る繁盛なり。維新の前藤本鐵石等天誅組が此地に事を挙げしはよく人の
知る所なり。

賀名生

丹生川あり南方より來り五條の邊にて吉野川に會す。之によりて遡れば
賀名生に達す南北朝の際一時行在所たりし所なり。

吉野山

五條より吉野川に沿ひて遡れば櫻花を以て有名なる吉野山に達すべし。

吉水院
寶城寺

吉野は南朝三代の皇居の地にして山に吉野宮あり後醍醐天皇の靈を奉祀
す。當時の行宮たりし吉水院は今吉水神社となり寶城寺は今全く廢
したり。此外如意輪堂後醍醐天皇陵等當時の遺蹟ありて五百餘年の今日

に於て倭寇の跋扈を憤慨せしむるなり。

吉野離宮

吉野の地山水の美に富めるが故に古へより世に著はれ應神天皇の御時早
く已に離宮もあり之より奈良朝に至るまで代々の天皇の行幸少しとせず。
但古への吉野離宮の地は今吉野とは別にして之より東方吉野川の川上
にありしなり。應神天皇のこゝに行幸せらるゝや國栖人來朝の事あり國
栖は此地方に住せし一種の土民にして特殊の風俗を有し之より後毎年土
産の物を朝廷に献ずるの風習ありき。

大峯山

吉野山より南はすべて吉野郡の山地にして大天井岳山上岳彌山大日夕岳
釋迦岳等の高峰相連なり其かみ役行者之を開きてより以來修驗者常に其
あとを慕ひて大峯巡りと稱して巡拜する靈場たり。其四方は即ち十津川
郷にして郷民一意南朝の爲に盡くし南北和合の後も尙心を南朝興復に存
して終始變らざりき。

十津川郷

吉野の産物

吉野地方の産物には吉野紙吉野漆吉野葛等あり。
大和平野の東方は亦一帯の山地にして伊賀に近く月の瀬あり梅の名所に

月の瀬

本邦地理 奈良縣

して齋藤拙堂の文を以て殊に世に知らる。關西鐵道伊賀上野驛より至るべし。木津川の上流名張川の河畔數里梅樹相連なる花時遊覽の客多く梅漬梅の木細工の名物あり。

今こゝに奈良縣の記事を終るに際して平安遷都以前の歴代の宮址の縣下に存するものを左に列記すべし。但其うち藤原宮平城京の如きは古書の記事する所毫末の疑を容るゝの餘地なきも其他にありては多くは嚴密なる考證を成すべき資料乏しく固より推定に屬するものなり。

宮 號

宮址推定地の現今の地名

神武天皇 橿原宮
綏靖天皇 葛城高丘宮
安寧天皇 片楮浮穴宮
懿德天皇 輕曲峽宮
孝昭天皇 掖上池心宮

高市郡白樫村大字畝火(畝傍山の東南)
南葛城郡吐田郷村大字森脇(葛城山麓)
北葛城郡浮穴村大字三倉堂の邊
高市郡白樫村大字大輕(畝火山の南方)
檜隈川の邊
南葛城郡掖上村の邊(南和鐵道御所停)

大和の宮址

孝安天皇 室秋津島宮
孝靈天皇 黒田廬戸宮
孝元天皇 輕境原宮

車場の南方
南葛城郡秋津村大字室(同)
磯城郡都村大字黒戸(飛鳥川と寺川との間)

開化天皇 春日率川宮
崇神天皇 磯城瑞籬宮
垂仁天皇 纏向珠城宮

奈良市子守町(率川神社の地)
磯城郡三輪町の東南(式御縣神社の邊)
磯城郡纏向村大字穴師の西(纏向川の上流)

景行天皇 纏向日代宮
應神天皇 輕島豐明宮
履仲天皇 磐余若櫻宮

磯城郡纏向村大字穴師の北(纏向川の下流)
高市郡白樫村大字大輕(檜隈川の邊)
磯城郡安倍村大字池ノ内(耳成川の邊)

本邦地理 奈良縣

允恭天皇 遠飛鳥宮
 安康天皇 石上穴穗宮
 雄略天皇 泊瀬朝倉宮
 清寧天皇 磐余^{いわあ}栗宮
 顯宗天皇 近飛鳥八鈞宮
 仁賢天皇 石上^{いそのかみ}廣高宮
 武烈天皇 泊瀬列木宮
 繼體天皇 磐余玉穗宮
 安閑天皇 勾金^{まがね}磐宮
 宣化天皇 杓隈^{さくまい}廬入野宮
 欽明天皇 師木島金刺宮

高市郡飛鳥村の邊(飛鳥川の上流)
 山邊郡丹波市町大字田村(布留川の邊)
 磯城郡朝倉村大字黒崎(初瀬川の上流)
 磯城郡安倍村大字池ノ内(耳成川の邊)
 高市郡飛鳥村大字八鈞(耳成川飛鳥川の
 間)
 山邊郡二階堂村大字嘉幡布留川の下
 流)
 磯城郡初瀬町大字出雲村(初瀬川の上
 流)
 磯城郡安倍村大字池内(耳成川の邊)
 高市郡金橋村大字曲川(重坂川の邊)
 高市郡坂合村大字杓前(杓隈川の邊)
 磯城郡三輪町大字金屋村(大神神社の

邊

敏達天皇 他田^{たにの}幸玉宮
 用明天皇 池邊雙槻宮
 崇峻天皇 倉橋宮
 推古天皇 豐浦宮、小治田宮
 舒明天皇 飛鳥岡本宮
 皇極天皇 小治田宮
 齊明天皇 飛鳥板蓋宮、岡本宮
 天武天皇 飛鳥淨見原宮
 持統天皇 藤原宮^{文武同所}

磯城郡纏向村大字太田(初瀬川の邊)
 磯城郡安倍村大字阿部寺川(耳成川の
 間)
 磯城郡多武峯村大字倉橋(寺川の上流)
 共に高市郡飛鳥村大字豐浦(飛鳥川の上
 流)
 高市郡高市村大字岡(飛鳥川の上流)
 高市郡飛鳥村大字豐浦(飛鳥川の上流)
 共に高市郡高市村大字岡(飛鳥川の上
 流)
 高市郡高市村大字上居(飛鳥川の上流)
 高市郡鴨公村大字高殿(畝火耳成香久
 山の中間)

元明天皇 以後の平城宮 生駒郡都跡村の邊(奈良市の西方)

参考書 大和志 四册 和洲舊跡幽考 十四册 廣大和名勝志 三十三册 大和名所圖繪 七册等

和歌山縣 (紀伊の大部)

區域 紀の川 和歌山

日前神宮 國懸神宮 龍山神社 和歌の浦 玉津島明神

和歌山縣は紀伊西南の大部分を管し、熊野川を以て三重縣管下の地と境す。熊野川は十津川の下流なり。又大和の吉野川は紀伊に入りて紀の川となり西流して紀伊水道に注ぐ、河口に和歌山市あり、縣廳の所在なり。此市は徳川御三家の一たる紀伊大納言家の番城下にして、海にのぞみ、大阪と日々汽船の交通あり、又南海鐵道は大坂より來り、紀和鐵道は大和に通ず、交通極めて便なり。市中綿フランネルの産あり、紀州キールの名高し。市の東方、日前國懸の兩神宮あり、古來紀の國造の奉祀する神にして、由緒他に異なり。其南方に神武の皇兄五瀬命を祀れる龍山神社あり。市の南方に和歌の浦あり、風景を以て其名高し。聖武天皇嘗て此地に遊覽して、明光浦の名を賜ひき。此に玉津島神社あり、和歌の神として古へより特に尊崇

紀三井寺

黒江

紀州蜜柑

日高川

田邊町

牟婁の温湯

白瓦漬

高野山

金剛峯寺

せらる。東に紀三井寺あり、金剛峯寺といふ、玉津島と相俟つて一段の好景を添ふ。其東南は即ち漆器の名産地たる黒江なり。黒江の南方、有田川一帯の地多く蜜柑を産す、和船を以て他國に輸送するもの多く紀の國蜜柑船の俗歌あり。有田川の南に日高川あり、安珍清姫の嘶ある道成寺は其下流地方にあり。之より東南田邊灣にのぞみて田邊町あり、町より西南にすゝまば、鉛山岬に近く湯崎の温泉あり。古へ紀の國牟婁の温泉と稱し、齊明天皇數度の行幸ありしは此所なりといふ。此邊の漬を白瓦の漬といふ。歌に「真白瓦の漬の走湯」などよめり。和歌山より東、紀和鐵道は紀の川と相並びて大和に入る。其道筋に根來粉河、高野等あり。高野山は大和境に近し。山に登るには紀和鐵道橋本驛より紀の川を渡りて學文路に出で、不動坂によるべし。關西線、南和線を利用するものは必ず之によるべし。和歌山よりするものは、粉河口より上るも可なり。山に弘法大師の開基せる金剛峯寺あり、古來人民の信仰最も厚く、

本邦地理 和歌山縣

山内古へは數千の僧坊ありしも、近時は、大に衰へ、殊に明治廿一年の大火によりて益疲弊を重ねしも、現今尙數十の寺院あり、維新前諸大名が父祖の冥福を祈りて建立せし、大なる石塔婆は、寺より奥の院即ち大師の靈廟に至るまで、約五十町間の道路の左右に林立して、登山者の目を驚かしむるものあり。

紀伊の山林
(木の國)

粉河寺

高野山一帯の山林、木材に富む、熊野地方と共に有名なり。紀伊の國名は蓋し、木の義にして、もと木の國なりしを、奈良朝にあたり、地名を二字となす必要上より、強て紀伊と引き延ばしたるなり。

高野山より西、大門口を下れば、粉河に至るべし。此所に粉河寺あり。

秀吉の根來
破却

其西北にあたりし根來山、大傳法院あり、眞言宗新義派の本山なり。此派は其かみ興教大師が、高野山にありて眞言宗に對し新義を唱へたるより、同儕に容れられず、遂に高野山より分離せしものにして、いにしへ此山内には僧坊多く、甚だ隆盛を極めしも、其僧兵秀吉に抵抗したる爲に、大打撃を被りて、遂に一山滅盡し、其後再興せしと雖も、亦昔日の觀なく、實力は京都の智積院

根來梳

黒江漆器

と大和の長谷寺とに移れり。其隆盛なりし頃には、山内にて膳梳等日用の漆器を製造せしが、其品今尙存するものありて、世之を珍重す。本山破滅後、其職人流れて黒江に集まれるもの、こゝに漆器の業を始めたり。黒江の漆器、今や其製造産額日本第一と稱す。

熊野

熊野三社

那智瀧

紀伊の東部熊野川の流るゝところ一帯の地を熊野と稱す。熊野沖は捕鯨を以て名あり。古事記の傳ふる所によれば、太古神武天皇は此沖より熊野に上陸し給ひ、川に沿ひて大和に入らせ給ひしなり。川の下流に新宮あり、中流に本宮あり、新宮の西方那智川に沿ひて那智あり、此の三ヶ所共に熊野の社ありて、世に熊野の三社と稱す。那智に那智瀧あり、高八十四丈、幅十八間、稱して日本第一といふ。凡そ此一帯の地、山林に富み、木材を出す。又炭に熊野備長と稱する名産あり。

紀伊の南端は小半島をなし、其端を潮岬といふ。潮流急にして、航海者の危険とする所とす。

参考書

紀伊概風土記 九十七册

紀伊國名勝圖會 二十三册

野山名覽集 五册

本邦地理 和歌山縣

二百五十一

大阪府 (河内、和泉、及び攝津の東部)

區城
大阪市

大阪府は河内、和泉、及び攝津の東部を管す。中部に大阪市あり之れ存應のある所人口八十二萬、繁華東京につき、第四師團司令部、造幣局等あり。師團司令部は豊太閤の築きたる大阪城にあり。此市は京都と共に近畿地方交通の中心にして、亦關西商業の中心たり。

鐵道交通

大阪平野に通ずる鐵道には、官設東海道鐵道の外に、關西南海等の線路を主

東海道鐵道

なるものとす。東海道鐵道は淀川と並びて京都より來り、神戸に達し、山陽

關西鐵道

鐵道に連絡す。關西鐵道の本線は、大和より來り、河内の中部を横斷して、大

全網島線

阪市南湊町に通じ、其網島線は、市東網島より起り、河内の北部を過ぎて山城

全城東線

に入る。此兩線は山城の加茂驛に相會して、遠く名古屋に通ずるなり。又

南海鐵道

別に同鐵道の城東線あり、大阪市東を迂回して、東海道鐵道と、關西の諸線と

南海鐵道

を連絡す。市南に起りて、和泉の堺市に通ずる鐵道に二條あり。一は南海

南海鐵道

鐵道にして、市南難波に起り、住吉を経て堺市に至り、更に和泉の海岸風光明

高野鐵道

媚なる境をすきて、紀伊の和歌山に通ず。一は高野鐵道にして、同じく市南沙見橋に起り、堺より東南に進みて、河内の長野に通ず、他日紀伊高野山下の橋本に通ぜんとするなれども、河内紀伊の境上なる、紀見峠の隧道を穿ち兼ねて、工事を中止せるなり。又阪鶴鐵道あり、東海道線の神崎驛より分れ西北に進んで、丹波福知山に至る。こはまきに丹後舞鶴に達せんとするものにして、要は大阪舞鶴を連絡せしめんとするにあり。又別に市北に起りて、安治川口に至れる西成鐵道あり。關西鐵道の河内柏原驛よりは、河内鐵道の通ずるあり。鐵道交通の便甚多し。

阪鶴鐵道

西成鐵道

河内鐵道

難波津

大阪は古への難波津の地なり。其地勢古今に於て甚しき差異あり。むかしは海水深く内地に灣入し、大阪市東の丘陵、即ち所謂上町の地方は、難波の崎となりて、前面難波江の中に突き出で、大和川河内川共に其東に突き來りしものなり。故に淀川と共に三川此所に合して、難波の崎に衝突し、水勢頗る急なりしならん。神武天皇東征の時、奔潮甚だ急なるが故に浪速と名けたりと傳ふ。此時天皇は之より流に溯りて、河内の日下に至り給へるを見

浪速

高津宮

難波堀江

偽作難波古
圖

高津宮址紀
念標

和氣清麿の
土工

大和川流路
變遷

れば當時深く内地迄海水の灣入せし状も推測するに難からざるなり。其後仁徳天皇のこゝに高津宮を定め給ふ頃になりては、地形も大に變じ、廣き低濕の平野を生じたれども、尙南方より來る水害甚多かりし爲、宮北に難波堀江を開きたり。難波堀江は今の大川の邊ならん、從て高津宮址は今の大阪城の邊にあるべし。世に難波古圖と稱する地圖數種あり、何れも偽作にして信據すべからず。去る明治三十二年九月、仁徳天皇の千五百年祭を此地に執行したるに際し、大阪市は高津宮址の所在を調査して、空堀町（大阪城南の空堀の遺址なり）の南方に一大紀念標を立て、之を表せしも、こは例の偽作古圖によりて考證せしものにして、地點確ならず（歴史地理二卷七）和氣清麿嘗て攝津に長官となるや、尙洪水の災あるを以て、市南の丘陵を横斷して、河内川の水を直ちに西海に注ぎ、以て其害を除かんとせしが、工事困難にして失敗に終れり。然るに今を去る殆ど二百年、寶永年間に至りて、其遺志始めて行はれ、大阪城東に注ぎたる大和川の流路を變じて、堺の北方に注がしめしかば、元より大阪市東部の水害は大に減じたりといふ。

大阪城の要
害

石山本願寺

秀吉の築城

天王寺

茶臼山

安倍野

北島顯家の
古墳と稱する

住吉

本邦地理 大阪府

大和川の舊路を流るゝ間は、今の大阪の地は、東北西の三方水を以て限られ、たゞ南方のみ陸續きにして、極めて要害の地なりければ、本願寺の遺如は、早く已にこゝに着目して、石山の別院を作り、後に教如の世に至りて、石山本願寺として、永く信長の大軍に抵抗したり。次て秀吉志を得るに至りては、大に此地に工を起して、大阪城を築き、大阪市繁榮の基を開きたり。元和の始、豊臣氏亡びたれども、徳川氏こゝに城代を置き、市街の繁盛は益進めり。市南に天王寺あり、聖徳太子の建立する所、寺は荒陵山と號す、古くよりこゝに荒陵（あらかた）あるが故なり。荒陵今之を茶臼山といふ、前方後圓瓢形の大古墳にして、周濠尙存す。之より南方安倍野に續きて、古墳少からず。其中大名塚と稱するものあり、北島顯家の墓と俗傳す。甚しく時代を誤れるに似たり。殊に顯家が安倍野に戦死せりといふも非なり、顯家は實に和泉石津に戦死せるなり、こゝに其墓あるべくもあらず。而も今こゝに安倍野神社あり、顯家を祀たるなり。安倍野の西南に住吉あり、住吉神社のある所。此所もと墨の江と稱して、海

堺市

濱なりしも、今は海を離るゝ事一里に近し。其南に堺市あり、新大和川住吉と堺市との間を流れて、攝津和泉の境を成せり。堺市は足利時代に於ける支那との交通の要津にして、當時商工業大に開け、最も繁盛の市街なりしが、秀吉以來大阪繁盛となりてより、次第に繁華を此方に吸収せられ、殊に新大和川開けてより、土砂堆積して港口益淺くなり、頗る衰退の傾きあり、而も尙五萬以上の人口を有し、堺庖刀、堺段通等の産其名高し。

仁徳陵其他の諸陵墓

高鷲村の大塚

河内古市邊の諸陵墓其他の古墳

市東に仁徳天皇の大山陵あり。丘陵三重の塚をめぐらし、周圍十八町、本邦第一となす。履中反正の二帝陵其南北にあり、其外にも巨大なる古墳甚多し。之より東、大和境に至る迄、一帯の平野、古墳至る所にあり、中にも中河内郡高鷲村大字東大塚の如きは、一村落盡く一大古墳の上にあるなり。之より東して、河内の古市、道明寺邊に至らば、應神天皇の譽田陵を始めとして、天皇皇后皇子等の陵墓群集し、中にも安閑天皇陵の如きは、戰國時代に島山氏の高屋城の本丸に利用せられたり。其外荒陵甚多く、石棺の露れたるもの

道明寺

磯長

太子

源氏祖先の遺蹟

弓削道鏡の故郷

六萬寺村往生院

正行の墓と稱する石塔

埴輪の並列せるもの、素より缺損して底部を存するのみなれども、各種のものあれば、古墳に就て研究するには、適當の地となす。道明寺には、天満宮あり。此邊大坂役に後藤基次等戦死の地として、史上に名あり。之より東南磯長の邊に至らば、敏達天皇陵、聖德太子墓等陵墓亦多し。太子の墓側には、叡福寺あり。其北方通法寺は、源頼信以來代々居住の地として、其遺蹟あり、代々の墳墓存す。氏神たる壺井八幡其北にあり。

此等の地を経て、河内鐵道によりて北すれば、柏原に至りて關西鐵道に會す。柏原の北方曙川村あり、其大字東弓削村は、道鏡の郷里として、稱徳天皇の御代に由義宮を置かれたり。之より北に進まば、二里許にして、池島村大字六萬寺に往生院あり、楠氏に由緒ある寺として、寺内に淡川に戦死したる楠木正成の供養塔あり、傍に石碑あり、正成の法名を刻す。近ごろ誤て碑を正成の塔とし、石塔を正行の墓となし、禮拜殿を設けて顯彰せんとするものあり。若し成功せば、誤定高津宮址紀念碑と共に、大阪府下に於ける好一對のものとならん。但四條村此近邊にあり、正行戦歿の四條畷を此邊の地となして

瓢箪山

四條驛

牧方

波瀲院の古蹟

禁野

濱寺公園

より、さる誤傳を生じたるか、眞の戰場は尙北なるべし。但斯く誤れるは河内名所圖繪を始とす。

六萬寺の北方に有名なる瓢箪山あり、山に稻荷神社を安置す。山は蓋し一の瓢形古墳なり。

之より北二里關西鐵道網島線の四條驛あり。こゝに正行の墓及び正行を祀れる四條驛神社あり。但四條村は右に云へる如く此所よりは遂に南にあり。

之より北、淀川の畔に牧方あり、航行の要津なり。

牧方の東北に濱あり、波瀲院の舊蹟にして、惟喬親王の假宮ありし所在原業平嘗てこゝに和歌を奉りし事伊勢物語に見ゆ。其東南禁野は所謂交野の御獵の地にして、古へ皇室の御狩獵地として巨鹿の禁獵地たりしを示せり。

堺市より西南の方和泉の海岸に沿ひて、南海鐵道によりて進まば、景勝の地多し。堺の西南濱寺公園あり、古への高師の濱の地にして、白砂青松相映するの光景掬すべし。黒崎石津等の松原の景は、早く已に貫之が土佐日記に

も述べ盡したり。

狭山池

金剛寺

觀心寺

赤坂千早

吹田

アサヒビール

江口

堺より高野鐵道によりて東南に進めば、狭山池あり、周圍一里に近く、池に葦菜を産す。此池は崇神天皇の時に田地灌漑の爲に掘らしめられたる所なり。此外にも依網池、荻坂池等史上著名の池多し。

鐵道は今長野に盡く。此より以南、南河内の地方は楠氏の根據地として古蹟多し。西に天野山金剛寺あり、一時後村天皇の行在所なり。東南に檜尾山觀心寺あり、正成の首塚及び作りかけの塔あり。之より東南、河内境には金剛山高く聳ゆ。西麓に赤坂千早等の古城址あり。

大阪より、東海道鐵道により東北に進まば、吹田、茨木、山崎等の名邑あり。吹田に大なる麥酒會社あり、アサヒビールを醸造す、現今の趨勢には、我國を二分して、東はエヒスビール、西はアサヒビール専ら行はるゝの勢あり。

吹田より神崎川を越えて東方に江口あり、古への難波江の江口にして、海船の終てし要津たり。こゝに古く遊女ありて繁榮なりし狀は、朝野群載に出でたる遊女賦によりても知らるゝなり。

山崎

櫻井

猪名川

池田

産物

茨木は片桐且元の居所、山崎は明智光秀敗北の所として名あり。山崎に天王山あり、停車場の前面にあり、淀川を夾んで山城の男山と相對す。山崎の西南櫻井は正成が淡川出陣の時、正行に訣別したる櫻井驛の地として傳稱す。外人の建てたる碑あり。

大阪より西北池田川あり、一に猪名川と云ふ、神崎川に注ぎ、ほと兵庫縣との境を成す。川の附近の平野は即ち猪名野にして、古歌に、猪名の篠原風吹けばなどあるもの之なり。河畔池田あり、池田炭の産地なり。又近ごろ多く由多加織を産出す。

右の外、府下の産物には、菜種綿等の農産物あり。綿は大阪市東、河内に運れる平野に産する所にして、有名なる河内木綿の如きは實に此綿より織らるるなり。菜種は種油の原料なり。菜種を産する大阪平野の花の頃は、眺望極めて見事なり。又大阪市及附近よりは、紡績絲、マツチ等の製造工業品を産する多し。

参考書 河内志四冊 和泉志二冊 攝津志四冊 河内名所圖繪六冊 和泉

兵庫

神戸

兵庫開港

古淡川

新淡川

名所圖繪四冊 攝津名所圖繪十二冊 泉州志六冊 攝津群談十七冊

兵庫縣 (淡路播磨但馬及び攝津と丹波との一部)

兵庫縣の管する所淡路播磨但馬及び攝津丹波の西部にして、其區域一畿三道五國に亘る、縣廳は神戸市にあり。此市はもと五港の一にして、横濱と共に最も盛なる貿易港なれども、其開港は僅かに今より三十五年前、慶應三年の事にして、當時西部なる兵庫の方は多少繁榮したれども、東部なる神戸の方は淋しき村落に過ぎざりしに、開港以來頗る神戸港の方繁盛を致し、今や人口廿萬を算するに至る。市中古淡川あり、楠公の戦死を以て著はれ、河野淡川神社の公の靈を祀れるあり。もと此川は短かけれども、流れ急にして、盛に土砂を下流に送り、河身を埋め、平素は水涸るれども、一朝出水の時、往々溢れて害を附近に及ぼす事あり、爲に次第に左右の堤防を高く築き上げしかば、今は其河底附近の屋根よりも遙かに高くなりて、山陽鐵道の如きは、此河の下を隧道によりて過ぐるなり。かゝれば此水害を避けんが爲に、先

本邦地理 兵庫縣

輪田泊

年此川に大工事を加へ、遠く西の方へ水路を變じたり。舊河口は遠く海中に突き出て、港を二つに分つ。東を神戸港となし、西を兵庫港となす。兵庫は古への輪田の泊にして、古より其名史上に著はれ、度々修築の事あり、平清盛福原に住むに及んで大に工事を施こし、後重源上人によりて工事成功せし所なり。

神戸と兵庫

今の神戸市は、兵庫と神戸と兩市街合併の稱なり。人或は湊川を以て兵庫神戸の境となす者あれども、そは誤りにて、兵庫に湊西部湊東部あり、湊川神社の如きは兵庫のうち湊東部にあるなり。

鐵道交通

大阪と神戸との間には東海道鐵道あり、道神崎西の宮、住吉等を過ぎ、西は山陽鐵道に連なる。此神崎よりは阪鶴鐵道の支線の南、尼が崎に通ずるあり、阪鶴鐵道の本線は神崎より伊丹、池田(大阪府下)、生瀬、三田等を経て、丹波に入り、篠山、柏原等を過ぎて、京都府下の福知山に達す。西の宮、尼が崎、神崎、住吉、伊丹等は池田と共に酒造を以て名を得たる所にして、灘の銘酒の本場なり。

酒造地

西の宮

西の宮には蛭子神社あり、有名なり。西の宮の東、武庫川の河口の邊に古へ

武庫の泊

の武庫の泊はありしか。神功皇后征韓の歸途に、務古の港に卜ひ、天照大神の荒魂を廣田に祀れり。今西の宮の北方にある廣田神社之なり。又住吉の住吉神社、神戸の東なる生田神社も、此時に鎮座すと傳ふ。

處女塚

住吉と神戸との間海岸に近く三箇の大古墳あり、處女塚とも求女塚とも稱し、大和物語に、二人の男一人の女を慕ひ、女何れに靡かん様もなく、水に入りて死にけるに、二人の男も共に死して、この三の塚は作られたるもの、如く、面白き事を傳へたり。かゝる事は古くよりありしにや、萬葉集にも之に關する歌見えたり。

多田

池田の北方に多田あり、源氏の祖多田滿仲の居地にして、多田神社あり、滿仲を祀る。

有馬温泉

生瀬の西方湯山町に有馬温泉あり、度々の行幸ありて、古來其名史上に著はる。

須磨

神戸市の西方は安徳天皇福原内裏の故地にして、西の方須磨に連る。須磨は西の方播磨の舞子、明石等と共に風景を以て稱せらる。須磨に須磨寺あり。

一の谷
り源平常時の遺物を藏す。須磨の西方に一の谷あり、北に鶴越つるこし、鍬柄峰くわがらみね等時
ち松風の音も當時を追懐せしむるの料たり。一の谷に敦盛の塔と稱する
大石塔路傍にあり。

舞子瀨

舞子の瀨は特に白砂青松の風趣を以て名あり。此邊の海岸一帯に白砂の
美あるは武庫摩耶等の連山すべて花崗石より成り、其崩壞せるものやがて
砂となるが爲なり。花崗岩を御影石といふは、佳吉の南方なる御影町より
積み出し、が故なり。近傍に石屋と稱する村落あり。

御影石

明石

明石は北に丘陵を負ひ、南は海に面す。須磨明石は源氏物語の巻の名にも
見えて、古來有名なり。丘上に明石城址あり、之と並んで人丸神社あり、柿本
人丸が

人丸神社

ほのくゝと明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞ思ふ
と詠めりといふより、こゝに鎮座せるものならん。此神火防の神として、又
安産の神として信者多し。人丸は火止るなり、人丸は人生るなり、火防を守
り、安産を守るの由來亦滑稽ならずや。

淡路

由良

鳴門

洲本

淡路の開拓

松の名所

明石より、明石海峡を夾んで淡路島あり。島は細長き三角形をなし、東南の
角は紀伊と由良海峡をなして大阪灣の口を扼す。此所に由良砲臺あり、要
塞砲兵を置き、大阪灣の入口を守る。西南の角は阿波と鳴門海峡を夾ん
で瀬戸内海の口を扼す。鳴門は潮流急にして、海面渦巻をなし、其響轟々と
して鳴るか故に此名あり。かく急流を生ずる所以は、北方なる瀬戸内海の
水と、南方なる水と、潮汐の際甚しく水平を失ふが爲めにして、由良、明石等も
潮の流れは早けれども、鳴門の如く甚しからず。鳴門に大なる鯛を産す、鳴
門鯛と稱して名あり。由良の西北に洲本港あり、鳴門の東南に福良港あり、
共に此國の二名邑たり。福良に陶器を産す、珉平焼と云ふ。近ごろ大に改
良を加へ、淡路の名を以て行はる。

淡路は最も早く古史に現はれたる國にして、古來よく開け土地の狭くして
且山多き割合に、人口多く、現今凡十九萬餘、一里四方の地に平均五千二百人
の住民あるなり。

本邦地理 兵庫縣

尾上鐘
石寶殿

高砂尾上の相生の松、別府の手枕松及び曾根天満宮の曾根の松等、何れも名あり。中にも手枕松最も大なり。尾上に有名なる鐘あり、もと舶來のものなり。曾根の邊岩山多く、生石村に石の寶殿あり。俗に大己貴少彦名の二神、一夜の中に之を作らんとして、果さず、夜明けたれば中止したるなりといふ。實に其形たる工事中に中止したる石殿の如き觀あり。播磨風土記には物部守屋の作りしものと傳へたり。とにかく一奇觀なり。世人多く播州廻りと稱して、此等の名所を巡覽す。

姫路

曾根の西北に姫路市あり、もと酒井氏の城下にして、城は今尙存す。こゝに第十師團司令部あり。姫路の産物に姫路木綿、姫路草等あり、これは明石の明石縮、明石玉神戶の神戶牛肉等と共に地名を冠して呼ぶを見ても、其盛なるを知るべし。中にも木綿は、舊藩主酒井氏の代々大に保護獎勵せし所にして、以てよく今日の盛を致し、ものなり。

書寫山

姫路の西北二里餘、曾左村に書寫山圓教寺あり、俗に武藏坊辨慶の幼時修業せし所とす。

生野銀山

播但鐵道あり、姫路の南方飾磨津より起り、姫路を過ぎて北方但馬の生野を經今や新井に通ず。生野に銀山あり、本邦屈指の金銀山なり。朝來川此所より發し、北流して圓山川となり、更に豐岡川となりて日本海に入る。其中流に出石川の合流するあり、出石は出石川に沿へる一名邑にして、新羅王子天日槍の古蹟たり。日槍の子孫に田道間守あり、常世國へ行きて、橘を取り來れり。田道間は但馬なり、此地の人なりしならん。此所に陶器出石燒の産あり。

出石

豐岡
城崎温泉
玄武洞

出石川の豐岡川に合流する附近に豐岡町あり、京極氏舊城市にして、柳行李の産あり。豐岡川の下流に城崎の温泉あり。其近傍なる玄武洞は玄武岩柱狀をなして相並ぶ。一奇觀たり。

龍野
赤穂

姫路の西方に龍野あり、醬油を以て名あり。龍野の西南に赤穂あり。食鹽を以て名あり。凡そ食鹽の製造は、雨少なく、空氣乾きて、海水多く、鹽分を含み、且つ水分を蒸發せしむるが如き地を最も適當となすものにして、この瀬戸内海の如きは、北に中國山脉あり、南に四國山脉あり、兩脈南北に並行して

瀬戸内海と
食鹽

よく雨雲を遮るが故に、年中降雨の量割合に少く、自然に製鹽地たるの性を具ふ。故に内海にのぞめる各國、盡く多量の鹽を産せざるなく、日本全國産中十の九は殆んど内海附近に製せらるゝなり。而も赤穂の鹽最も著はる。但、赤穂は鹽よりも更に淺野長矩の舊封地として、義士仇討を以て一層世に知らるゝなり。

山陽鐵道龍野驛の次に那波驛あり、驛の東南二里室津港あり、西國航行の要津なり。

赤穂の西方備前境に舟坂峠あり、元弘のむかし兒島高德の一度後醍醐天皇の車駕を奪はんとして待ち受けしも道を違へて果さざりしと傳ふる所なり。

参考書 鳥馬考 十冊 播磨縣 十一冊 播州名所巡覽圖繪 五冊
淡路常務草 (備前丹波の分は、大阪府京都府の條下を見よ)

室津

舟坂峠

第五節 中國

各地方廳管轄國郡市表 附舊郡名 (内ものは明治二十九年分令以前の舊郡名也、但廣島岡山三縣は明治三十三年に郡廢合ありき)

縣名	市郡名	國名
鳥取縣	鳥取市、岩美 <small>(邑美、法美、岩井)</small> 、八頭 <small>(八上、八東)</small> 、氣高 <small>(高草、氣多)</small> 、伯耆 <small>(河村、久米、八橋)</small> 、西伯 <small>(會見、八橋)</small> 、日野	因幡
	松江市、八東 <small>(島根、秋鹿、意宇)</small> 、能義 <small>(能義、能義、能義)</small> 、大原、飯石	出雲
	仁多、漣摩、安濃 <small>(邑智、那賀、美濃、鹿足)</small> 、周吉、嵯知、海士、知夫 <small>(但此の四郡は現今島根の管する所なり)</small> 、眞庭 <small>(眞島、吉野)</small> 、勝田 <small>(勝北、勝南)</small> 、久米 <small>(久米南條、久米北條)</small> 、英田 <small>(吉野)</small>	石見
	岡山市、御津 <small>(御野、津高)</small> 、赤磐 <small>(赤坂、赤野)</small> 、邑久、上道、和氣、兒島、都窪 <small>(都宇、窪屋)</small> 、後月、小田、吉備 <small>(下道、下道)</small> 、川上、上房、阿哲 <small>(阿賀、阿賀)</small> 、淺口、尼道市、御調、世羅、深安 <small>(深津、深津)</small> 、沼隈、蘆品 <small>(蘆田、蘆田)</small> 、神石、甲奴 <small>(三上、三上)</small> 、雙三 <small>(三上、三上)</small> 、比婆 <small>(比婆、比婆)</small>	備前
廣島縣	廣島市、吳市、安藝、佐伯、安佐 <small>(沼田、沼田)</small> 、山縣、高田、賀茂、豊田	安藝

本邦地理 中國

附註管轄表

山口縣 大島、玖珂、熊毛、都濃、佐波、吉敷……………周防
 赤間關市、厚狹、豊浦、美禰、大津、阿武……………長門
 以上五縣十二國六十四郡七市一島(四)六十七町一千七百三十二村、
 (但一島(四郡)は隱岐にして、六十四郡の外なり)

位置
 名義
 西國といふ

中國とは本州の西端なる半島部に於て、近畿地方即ち上方の西に連なる。中國の名義は其由来を明にせず、思ふに上方即ち近畿地方と、下筋即ち九州地方との中國の義ならんか。古へは畿内以西すべて之を西國と稱へたり、源平盛衰記太平記等、其他の諸書多くは播磨以西、山陽道諸國を九州と共に、常に西國と記するを見る。(西國三十三所の觀世音と稱する場合の西國は、畿内、紀伊などより、美濃の谷汲寺までを含み、本文云ふ所の西國と同じからず、之は坂東三十三所の觀世音に對したる稱呼にして、觀世音の場合にのみ云ふものなり、本文云ふ所に混ぜべからず。)而して、その播磨以西をすべて西國と稱するが中にも、特に九州地方を下と稱へて、以て近畿地方の上方に對したりし事は、足利時代に専ら行はれしものと見えて、佛人著の日本西教

中國

中國の範圍

史にも見え、今日に至るも九州通ひの船を下通ひと稱するにて知らるゝなり。すてに下と上とあり、其中の國ある自然の勢なり。茲に於てか、山陽道地方に中國の名稱起り、亦下なる稱呼と同じく、足利時代以後専ら行はるゝなり、但漠然山陽道地方と云ふうちにも、播磨はもと畿内の影響を受け、今も攝津と共に兵庫縣に屬して、何れかと云へば、むしろ上方のうちなり。故にこゝには、播磨備前の境上なる、舟坂峠を以て中國、近畿の境となし、岡山縣以西を中國となす。中國の背部なる山陰道中の諸國は、之を中國と稱する事、適切ならざるが如しと雖、南北朝以後、歴史上往々山南諸國と關係を保ち、地形上また併せ説くを可とするを以て、こゝには、島根鳥取二縣を之に附記す。近時の地理教科書著者、往々中國といふ文字を、山陰山陽兩道の名稱となす。誤れるの甚しきものなり。丹波丹後但馬等、之を位置上より見るも、歴史上より考ふるも、また古來の中國と云ふ語の使用に徴するも、今日の行政区劃より説くも、決して中國と稱すべきものにあらざるなり、然れども、兩道を比較して地勢を説く事説明上其便少しとせず、依て今左に聊か、兩道を對比せ

中國なる名稱の誤用

本邦地理 中國

ん。

山陽山陰の

名
雨道地勢の
比較

山陽山陰の名は山の南北の義なり畿内より西一帯の山脈長く西に向ひて延び地勢自ら南北に分れたり。北は陰即ち裏にして南は陽即ち表なり地勢上表裏の別は奥州と出羽とに於ても東海道と北陸道とに於ても已に之を見たりしが陰陽雨道に於て更に著しきを見るなり。

山陰道は北海を受けて雨多く山陽道は瀬戸内海に面して雨少なし。雨少きは中國山脈と四國山脈とが其南北を壅蔽するが爲なり。雨少きが故に山陽道諸國は何れも製鹽の業盛なり。殊に瀬戸内海沿岸には良港多く航行の便に富み對岸四國九州とも常に往復するの要あり陸上また已に山陽鐵道の全通せるありて交通便利に且つ往來頻繁なるに反して山陰の沿岸航行不便に鐵道の便未だ起らざるが故に山陽道には繁盛なる都邑多く人口亦稠密なるに反して山陰道には繁華なる都邑少なく人口亦粗なるを免れざるなり。即ちこゝに所謂中國のうち山陽に屬する三縣には一方里平均二千六百十餘人の人口あるに山陰に屬する二縣には僅に一千七百十人

雨道人口の
比較

倭寇

鐵道交通

にも足らざる割合なり。之を雨道の全部に就て見れば更に甚しきものあり山陽道には一方里平均二千七百餘人の住民あるに對し山陰道には僅に一千六百九十餘人を算するに過ぎざるなり。

山陽道諸國の近海には島嶼多し住民水上の動作に馴れ中世海賊の之に據り自ら海賊大將軍など稱して盛に支那朝鮮臺灣等の沿海を掠めたる事多し彼の國人は之を倭寇と稱し其船を八幡船と稱して甚しく恐れたり。八幡船とは其船八幡大菩薩の文字ある旗を建てたるによる名なり。

中國の鐵道交通は右に云へる如く山陽には頗る發達せるも山陰に於ては未だ全く開通せず。だゝ二三豫定線路及び工事中のものあるのみ。

山陽鐵道 神戸より起り播磨を経て來り岡山尾道廣島三田尻等を経て馬關に終る。之より海上を汽船にて豊前門司に航し以て九州鐵道と連絡するなり。

中國鐵道 岡山市より起り北の方美作に入り津山に達す。

鳥取縣 (因幡伯耆)

鳥取市

鳥取縣の管する所は因幡伯耆の二國にして縣廳は因幡の鳥取市にあり。鳥取市は千代川の支流袋川に跨る。もと池田氏の城下にして人口二萬八千餘山陰第二の都會なり。

國府及國分二寺

鳥取市の東南一里國府村ありこれ因幡國府のありし所にして遺蹟は大字宮下にありと云ふ。其南に大字國分寺あり法花寺と云ふもあり。國府國分寺の事は已に東京府の條下に之を説明せしがこゝに法花寺といふは精しくは法華滅罪寺にして、聖武天皇の建立せしめられたる國分二寺のうち尼寺の事なり。尼寺はもと各國にありしも多くは早く滅びて傳はらず地名に法花又は法華寺、尼寺などあるは多くはこの遺蹟なり。更に其東北には因幡山の時つあり百人一首にも入れる立ちあかれ因幡の山の峯に生ふる松とし聞かば今歸り來んの歌は在原行平が因幡守となりて此の國府に下りし時によみしなり。

尼寺

因幡山

米子

千代川は下流を賀露川と云ひ上流を智頭川といふ縣下第一の大川にして國の南境より出づ。他日播州姫路より此川にそひ鐵道布設の豫定あり。鳥取市を經西行して伯耆の米子に至り更に出雲に通せんとするなり。米子は伯耆西北隅の要津にして岡山より津山に通ずる中國鐵道はまたこゝに來らんとするなり。

温泉及火山

鳥取より西賀露川を渡り西すれば吉岡温泉、勝見温泉等あり。山陰の諸國概して温泉あるは火山脈の通過するものあるによるか。伯耆の大山、但馬の間鍋山などは著名なる休火山なり。

氣多時と因幡の白兎

因幡の西北隅に長尾鼻あり北海に斗出す。古史に所謂氣多の時は之か。地は遙に隱岐に對す。隱岐より鰐魚の背を踏みて因幡に渡れる兎の嘶あり、兎を助けたる大國主命は因幡の八上媛を娶らんが爲に出雲より來れるなり。因幡八頭郡にもと八上郡あり、之れは八上媛の居地の傳説ある場所か。

之より西伯耆に入りて二里ばかり東郷の池あり、近傍に山田温泉、三朝温泉

本邦地理 鳥取

名和及び御
來庄

等あり。

更に西すれば船上山、大山の北方を過ぎて、名和村、御來屋村あり。名和村は古への名和庄にして、實に名和長年の出生地なり、今こゝに名和神社あり、長年を祀る。御來屋崎は、後醍醐天皇が、隱岐より逃れて來着し給ひし所なり。長年即ち帝を船上山に奉じて、義兵を擧げたり。當時天皇の御製に

忘れぬや、寄るべも波の荒磯を御船の上にとめし心は

船上山及大
山

船上山の西南に大山あり。大山は甚著名なる休火山にして、其裾野は廣き原野をなす。所謂大山の原なり、牛馬の牧場あり。

之より西、日野川を越えて米子に至る。

夜見濱

米子の西北、一大砂洲あり、長く海中に斗出して、出雲の島根半島と相對するあり、長さ五里、以て其西に中ノ海を擁す。之を夜見濱といふ。夜見濱の端に境港あり。貿易港として日本海の良港なり。夜見の名は黄泉に通ず、太古伊弉諾尊が其妻を慕ひて根の國即ち黄泉國に入り給ふや、出雲伯耆の境よりせし事、古史の記する所なり。夜見濱の名亦多少の因縁あるか。

境港

夜見の因

白黒珊瑚

沿海の地、白珊瑚を産す、杖又は簪に作るべし。又鐵樹の産あり、一に海松或は黒珊瑚といふ。パイプ等となして販賣す。

参考書 因幡志

三十三册

伯耆志

十二册

島根縣 (出雲、石見、及隱岐)

松江市

宍道湖

島根縣は出雲、石見、隱岐の三國を管す。縣廳は出雲、宍道湖の東岸松江市にあり、此市はもと關原役後に、堀尾吉晴の封せられたる所、後には松平氏の居城となり、山陰第一の都會となれり。宍道湖は出雲北岸の大湖にして、天神川を以て東の方中、海と通ず。湖中鱸の名産あり。支那松江の鱸に比すべしとて、堀尾氏築城後に名けしものなりとの説あり、以前は白瀉末次の兩地なりきといふ。

中ノ海

美保關港

中ノ海は島根半島と伯耆の夜見濱を以て其口を擁する入海なり。中に大根島あり、牡丹を産す。島根半島の東端に美保關港あり。伯耆の境港と對して日本海の良港たり。此地は神代に於て、事代主命が天神の命を拜せし

本邦地理 島根縣

際にあたりて出で、釣せりと傳ふる所なり國幣中社三保神社あり、事代主の神を祀る。

神代の遺跡

出雲國には神代の遺跡多し、素盞鳴尊が八岐の大蛇を退治して奇稻田姫を娶りしも大國主命が據りて以て大八洲國を平けたるも皆此出雲なり。尙又伊弉册尊の入り給へりと稱する根の國即ち黄泉の國は、出雲伯耆の境より往來せりと傳へ、素盞鳴尊また根の國へ放逐せられて、出雲に迹を垂れたるを見るに、古傳説の根の國は、此の出雲國と、或は關係あるらしく思はるゝなり(四二頁參照)。大國主命は、天神の命を畏みて其征平したりし國土を天孫に奉りしかば功を以て其身は出雲大社と祀られ、今に至りて尙特別の尊敬を受く。其社は國の西北隅、杵築町に在り。大國主命を従はせん爲に使若として高天原より降りし天穗日命の子孫は、代々此社に奉仕す。所謂出雲國造にして、後、千家北島せんげきたじまの二家となれり。

出雲大社

日御時

簸川

杵築の西北に日御崎ひのみさき突出す。こゝに日御崎神社あり、素盞鳴尊を祀る。簸川ひらあり、國の東南隅、船通山より發し西北流し更に東北に折れて宍

道湖に入り、派流は、杵築の南に注ぐ。素盞鳴尊が八岐の大蛇を退治せしは此川上なり。此時大蛇の尾より寶劍を獲、本邦三種の神器の一たる叢雲の劍之なり。今熱田神宮に祀る。

陶器及碧玉

宍道湖の南に布志名、玉造等の地あり、布志名に布志名焼の産あり、玉造地方には瑪瑙、水晶、青玉等の産あり。玉造の名は、古昔此地方に玉造部の人民の住せし所なるを知る。出雲の玉古來名あり、中にも、管玉として普通に使用せられたる青玉は之を出雲石と稱して、最も著しく、今尙各地の土中より此種の玉を發掘する事頗る多し。

中ノ海、宍道湖の南方を経て、鐵道布設の豫定あり、東南は伯耆美作を経て、備前の岡山に至り、西南は安藝の廣島に通じ、西は杵築の大社に達せんとするなり。此鐵道にして開通せば、山陰道の交通極めて便利となるべし、

柿本人丸

石見は出雲の西南に連なれる狹長なる國なり。奈良朝の歌人柿本人丸嘗て國司として此國に下り、此地にて詠じたる數首の歌は萬葉集にあり、從つて歌名所も多し。中にも

高津の山

本邦地理 島根縣

石見のや高角山の木の間より我が振ふる袖を妹見つらんか
といふ歌は、最も名あり。國の西方に高津川ありて、川口に近く高津山あり
此山即ち高角山なりとの事にて、山上に人丸神社あり。人丸は和歌三神の
一として、世に崇められしより、かくは所々に祀らるゝものか。

津和野

江の川

鐵山

高津川の上流に津和野あり、近傍に銅の産地あり。
中國第一の大河たる江ノ川は國の東北部を貫流す。江ノ川より東北には
邇摩、福光、湯里等の温泉多し。邇摩に銀山あり、多額の銀を産す。其他縣下
には鐵山多く、鐵の産出夥し。江ノ川を渡りて西南に進まば日本海岸に濱
田町あり。

隱岐

西郷港

後醍醐天皇
の行在所に

隱岐は日本海中の火山島なり。分つて島前島後となす。此國は嘗て後鳥
羽、後醍醐兩天皇の遷幸し給ひし地として、歴史上著名なり。島後北にあり
て最大なり、島に西郷港あり、出雲美保關を去る十八里餘。島前は知夫里西
島、中の島の三島相よつて三ツ巴の狀をなす。中の島に後鳥羽天皇の廟址
あり。西の島には、黒木と稱する地ありて、こゝに黒木神社あり、後醍醐天皇

關する隱岐

國分寺の行
在所

隱岐の産物

の行在所たる、黒木の御所の地なりと稱す。或は知夫里島に、天皇の行在所
の址と稱する所あり。但天皇の隱岐に遷され給ひて後は、國分寺に居給ひ
たる事、古史に明文あり、知夫島又は西の島なる黒木御所に居させらるゝ筈
もなかるべし。國分寺は島後にあり。

隱岐は土地火山質にして、耕耘には適せざれども、陸に牧場あり、海に海産物
あり、殊に鰯海鼠の利多し。

參考書

出雲風土記
隱岐郡誌合記

一冊
五冊

隱岐志

十四冊

石見八重葎

十三冊

岡山縣 (美作、備前及備中)

吉備國

山陽道の中部地方、古へ吉備國の名ありき。其地黍の生育に適せしが爲か。
神武天皇東征の御時、吉備の高島宮に留る三年、大に兵食を用意して、遂に大
和を平定し給ひしは、我建國の歴史に於ける著名なる事蹟なりとす。崇神
天皇の四道將軍を派遣せらるゝや、吉備津彥命を西道に遣はされたり。西
道とは即ちこの吉備國の邊に及びしものか。吉備國後分ちて前中後の三

本邦地理 岡山縣

津山町

國となし、更に備前より美作を分てり。岡山縣は其東方の三國を管す。美作は備前の北に接す、津山高田の兩川此國に起り、備前に入りて、東西の兩大川となる。津山川に瀕して津山町あり、備前の岡山よりこゝに中國鐵道開通す。

院の庄

津山の西方に院の庄あり、元弘元年中後醍醐天皇が隱岐國に遷され給ふに當り、兒島高德之を途中に奪ひ奉らんとして成らず、即ち此宿に來り、庭前の櫻樹を削りて、赤誠を聞こえ上げ奉れりと太平記に傳ふる所なり。此縁故を以てか、こゝに作樂神社ありて後醍醐天皇と兒島高德とを合祀す。然れども史家多くは太平記に記する兒島高德の事蹟を信せず。

佐良山

津山川の支流に佐良川あり、河畔佐良山村あり
美作や久米の皿山しらくゝにむかしの人の戀しきやなぞ
といふ皿山は此所なり。

誕生寺

津山の西南誕生寺村に誕生寺あり、淨土宗の開祖圓光大師誕生の地なるを以て此名あり。

西大寺

津山川は南流して東大川となる、下流を西大寺川といふ、河畔西大寺村に西大寺觀音院あり、毎年正月會陽と稱する大法會を修し、遠近群參して頗る著名なり。

和氣

閑谷學校

中流に和氣あり、和氣清應由緒地なり。其東方、藤野村の實成寺に清應の墓ありといふ。其南方伊里村大字閑谷に閑谷學校あり有名なり。

伊部

和氣の南方には伊部村あり、伊部は忌部なり、古へ忌部氏の部族の民こゝにありて祭器を作りしものか。今尙陶器伊部焼を産す、赭色にして堅牢なり。

岡山市

西大川本名を旭川といふ。その下流に瀕して岡山市あり。もと池田氏三十萬石の城下にして、縣廳の所在なり。舊城は市の東北隅にあり、天主閣尙存す。後樂園はもと池田氏の庭園にして日本三公園の一と稱す。山陽鐵道は、岡山を経て縣下の南部を東西に通じ、更に岡山よりは中國鐵道の北行するありて、陸上交通の中心たり。

兒島

岡山の南方に兒島灣あり、兒島半島其南を擁す。兒島半島はもと吉備の子島と稱して、太古以來已に史上にあらはれたる一の離れ島なりしが、漸次海

戸の波

底の隆起によりて遂に陸続きとなりしものなり。半島の頸部に藤戸村あり源平戦争の當時佐々木盛綱が淺瀬を尋ねて海を渡り、兒島に屯在せる平家の大軍と戦ひし、有名なる藤戸の渡の遺蹟なりとす。然るに此渡今は全く埋れて僅に一の小川を残せるのみとなれり。此地方の地理の變遷は最も甚し。

吉備津彦

岡山の西方一の宮村に吉備津彦神社あり。其西南十町許備中國に亦吉備津彦神社あり。共に吉備津彦命を祀る。命は孝靈天皇の皇子なり、四道將軍の一として西海に派遣せられ、跡を此地に止めたりと稱す。備後にも同社あり。蓋し備中のもの其本社にして吉備國を前中後に分轄するに際して、各國に之を分ち祀りしものか。備中のは、今國幣中社たり。此社の北に吉備の中山あり、こゝに吉備津彦命の墓ありといふ。

高松城址

之より西方一里、高松村には有名なる高松城の遺蹟あり。天正十年織田氏兵を中國に出だすや、城將清水宗治據守して降らず、秀吉遂に之を水攻にせし地勢のありさま、想見すべしといふ。

川邊川

水島灘

高梁町

食鹽と鯛其他の産物

川邊川あり、備中一の大川にして、國中の諸水を集め、南流して兒島半島の西方、水島灘に注ぐ。水島灘は源平海戦の古戰場として有名なり。こゝに玉島港あり。瀬戸内海航行の要津なり。川邊川の上流を高梁川と云ふ。川に瀕して高梁町あり、此邊の地近來多く麥稈真田を産す。

沿海の地には多く食鹽を産す。蓋し内海に此産多き理由は、前已に述べたり。以下の諸國亦然り。亦鯛の産あり、鯛は鹽と共に、亦瀬戸内海に最も多く産する所、内海の島嶼多く、水勢強きか故に、殊に美味なり。陸地の産としては花菱、墨表多し。美作地方には雲齋木綿、煙草等あり。

参考書 作陽志 六十一册 東作志 五十一册 備前國志 四册
吉備國志 六十册 備中府志 五十一册

廣島縣 (備後及安藝)

廣島縣は備後及安藝の二國を管す。其地勢は山陽道の他の諸國とは異にして、分水嶺國中を横斷し、北部の諸水は江ノ川に集まり、西北に流れ石見に入る。この山脈以北の地は自ら一區域をなす、之れ即ち古事記に所謂伯伎

渡邊國

の國、日本記に所謂波區ハク、舊事本記に波人岐ハクの國ならんとの説あり。吉田東伍氏説、古事記に曰く、伊邪那美命は、出雲國と伯伎國との堺なる比婆ヒバの山に葬ると。古來此伯伎を伯耆と解し、比婆を雲伯二州の間に求めんとせり。今吉田氏の此説によれば、伯岐は波區ハクにて、今の伯耆とは別なりとなすなり。近年備後の北部に新に比婆郡を立つ。蓋、山る所あるに似たり。

鐵道交通

瀬の津尾の

縣廳は廣島市に在り。山陽鐵道備中より來り、福山、尾の道等を経て此市に來り、更に周防に入る。福山は蘆田川の下流にあり、もと阿部氏城下なり。舊城の天守尙存す。停車場は實に其傍にあるなり。福山の南方に瀬の津あり、内海の要津にして、保命酒の産あり。尾の道亦要津なり、鹽を産す。

糸崎

因の島

此地方の前面瀬戸内海中に島嶼多し、倭寇の本據たりし因ヱの島院の島院の如き最も著はる。

愚海の要塞

糸崎より西南に方りて、愚海あり、前面に大三島を夾んで伊豫の北端と相對す。所謂越後海峡にして、要塞あり、瀬戸内海航行の要衝を扼す。

廣島市

廣島市は太田川の下流に在り。もと毛利輝元の築城にはじまり、次で福島正則之を領し、後淺野氏の領に歸せり。人口十萬中國第一の都會なり。今第五師團の司令部あり。明治二十七八年戦役の際には、大本營を此地にすゝめられ、大元帥陛下の御親征あらせられたり。

三次

此市より東北三次を経て出雲に入らんとする鐵道の豫定あり。此鐵道にして全通しなば、山北との交通大に便利を得ん。三次は山間の小都會にして南北交通の要路に當り、江の川の河畔にあり。

宇品

廣島市の南方に宇品あり。宇品は國音得支那に通ず。明治廿七八年戦役に於て、此港より軍を出したること、其地名に於て已に吉徴あり。果して大勝を得たり。其東南に吳軍港あり。軍港の前面なる江田島には海軍兵學校あり。廣島灣は實に帝國海軍の中央根據地たり。

吳及び江田島

江田島の東南に倉橋島あり、島の北端瀬戸島村の瀬戸を音戸瀬戸といふ或は穩渡に作る。俗説に之を平清盛の開鑿となす確證なし。地形を見るに然らざるが如し。清盛嘗て安藝守たり、又太宰大貳たりしかば、海上交通の

音戸瀬戸

牡蠣と牛肉

利便を圖り、修築せし事はあらん。こゝに清盛の塔と稱する大石塔あり、依て御塔の瀬戸と稱するなりといふ。廣島灣には大なる牡蠣を産す。毎年冬期には船を以て之を西國の諸港に輸送し、船中に調理して客に供す之を廣島の牡蠣船と稱す。又廣島牛肉亦著名なり。

嚴島

廣島の西南海中に嚴島あり。西對岸なる山陽鐵道宮島驛より汽車發着毎に小汽船の交通あり。島に嚴島神社あり、社殿海濱にありて、滿潮の時は水上に浮び極めて壯觀なり。前面の海中に大鳥居あり。高さ七間、和船帆をあげて其下を過ぐ、這般の風景絶佳にて實に日本三景の一なり。こゝに宮島細工(竹細工)の名物あり。此地は嘗て毛利元就が陶全姜を滅したる古戰場なり。

産物

縣下の産物には蠶糸の著名なるあり、遂に備後表の名は一の普通名稱となれり。又花籃を産す。食鹽及び鯛の如きは、瀬戸内海に瀕する地方の一として、其額多き事は特に述ぶる迄もなし。

参考書 福山史料 三十五册 西瀨道志 九十二册 西瀨道志 七册

山口縣 (周防及長門)

山口町 大内氏と毛利氏

山口縣は防長二州を管す。此地方はもと大内氏根據の地にして、代々山口にありて富強を極め、明國と直接貿易をもなして、外國の文化流入の門戸をなし、殊に義隆の比に至りては京都の公卿の、京畿の亂を避けて來り投ずるもの多く、文學も頗る盛にして、早く已に書籍の開板などもありしが、一朝陶全姜の爲に亡ぼされ、次て毛利氏之に代るに至れり。之より毛利氏は、頻りに近傍の諸國を服し、中國の大部を有するに至りしが、關が原の役に、大阪に與してより爲に大に其領地を削られ、遂にこの防長二州をのみ有して、長門の萩に移るに至れり。然るに幕末に方りて、毛利氏再び社會に雄飛するの機を得て、居城をもとの山口に移し、遂に徳川氏を倒して、明治の維新に、大功を樹てしかば、今尙藩士の盛閑に列し、或は社會樞要の地を占むるもの甚多し。蓋、三百年間善へ來りし潛勢力のこゝに發したるものか。今も縣廳は

本邦地理 山口縣

三田尻

此の山口町にあり。町は榎野川に瀕す。山口高等学校あり。但交通は頗る不便なり。

山口の東南に三田尻あり、内海の要津にして、食鹽の名産地なり。縣下の地瀨戸内海に瀕して、近隣の諸縣と共に食鹽の産額は極めて多し。

廣島縣下より來れる山陽鐵道は、岩國、柳井津、徳山等を経て、三田尻に至る。

山口に至らんには、こゝより車馬によらざるべからず。鐵道は更に之より西して、赤間關市に達し、馬關海峡を隔て、九州鐵道と連絡す。

岩國

岩國はもと吉川氏の城下にして、岩國川にのぞむ。川に錦帯橋あり、一奇橋とす。この地岩國縮、岩國半紙の産あり。

室積港

柳井津の南方には室津半島斗出し、上の關島と相對す。其西部に室積港あり、徳山三田尻と共に、周防灘の要津なり。

錢司

三田尻より西三里餘、錢司村あり。古へ錢錢司を置かれたる所なり。錢錢司とは今の造幣局の如きものなり。

下の關

赤間が關市は一に下の關又は馬關と稱す。下の關とは室積の對岸なる上

環の浦

の關三田尻の西南なる中ノ關に對するの名馬關とは赤馬關の畧稱なり。ここに明治廿七八年戰役の媾和談判は開かれ、爲に馬關條約の名あり。此地硯の名産あり。又近傍石炭の産あり。

馬關の東北の沿海を壇の浦といふ。壽永の昔、源平兩軍の激戦のありし所、安徳天皇は寶劔と共に海に没し、平家一門此一戦に全滅してまた起らず、但し、跡を九州其他薩南の諸島に晦ましたるものは少からざりしが如し。此近海平家蟹といふを産す。其甲羅に醜惡なる人面の如き皴あり、俗に平家の怨靈の化したるものなりといふ。市に赤間宮あり、安徳天皇を祀る。天皇の御陵は、近年此境内に定まれり。

豊浦

市の東北に豊浦町あり、今長府村に屬す、もと長門國府の地にして、仲哀天皇の豊浦の宮址亦此地なりといふ。

早瀬瀬戸

馬關の前面は即ち早瀬瀬戸にして、瀬戸内海の西口を扼し、對岸なる豊前の門司市に對す。要塞あり、この口を扼す。維新前毛利藩士はこゝに佛國軍艦を砲撃して攘夷の先鋒をなせり。

早瀬瀬戸より西に出づれば即ち響灘なり。之より北東に廻れば沿海に萩町ありもと毛利氏の城下なりしも土地僻遠なるが故に却て繁榮を山口の方に奪はるゝの傾あり。山口を去る九里餘途中隧道によりて車馬を通ずる所あり。

参考書

長防風土記

三百九十五冊

防長温知録

一冊

長門志

三冊

第六節 四國

各縣管轄表

縣名

市郡名

國名

各地方廳管轄國郡市表附舊郡名 ()内のものは明治二十九年分合以前の舊郡名なり。但香川縣は、明治三十二年に廢合ありき。

德島縣

德島市、板野、名東、名西、阿波、麻植、美馬、三好、勝浦、那賀海部

阿波

香川縣

高松市、丸龜市、大川、(大内)小豆、木田、(三木)香川、綾歌、(阿野)仲多度、(那珂)三豊、(三野)豐田

讃岐

愛媛縣

松山市、宇摩、周桑、(周布)越智、(越智)温泉、(久米、風早、和部)新居、上浮穴、喜多、東宇和、西宇和、南宇和、北宇和、伊豫、(下浮穴、伊豫)豫の大部

伊豫

高知縣

高知市、安藝、香美、長岡、土佐、吾川、高岡、幡多

土佐

以上四縣、四國三十六郡、五市、三十六町、七百七十九村

地勢

四國は中國と瀬戸内海を夾んで相並ぶ、四國山脈其中央を東西に連亘して中國山脈と並行す、山脈によりて地勢を南北兩部に分つことは、ほゞ中國に似たり、南北各二國合して四國あり、よつて四國島と稱し、四縣各其一

本邦地理 四國

國を分督す。其瀬戸内海方面に降雨少なく、製鹽に適するの事情は山陽道と同じ、又内海島嶼多く、戦國時代に倭寇の根據たりし島嶼の少からざるの状亦同じ。

四國八十八ヶ所靈場

四國は眞言宗の開祖弘法大師の出生地として、眞言宗盛に行はれ、之に屬する寺院多きが中にも、四國八十八箇所の靈場と稱せらるゝ寺院は特に由緒深く信者の之を順拜するもの甚多し。諸國に新四國など、稱して信者の參詣所を設けたるものあるは、皆この八十八箇所の形を模したるものなり。四國は離れ島として、殊に山脈の高く聳ゆるありて、陸上の交通は發達せず。山北の二國は、多くは海路山陽道と交通し、或は神戸大阪に航行し、山南の二國は、何れも直ちに大阪に通ずるなり。従つて鐵道も未だ十分の發達を見ず。其中にも主なる線路は、

交通

徳島鐵道 徳島より吉野川に沿ひて船戸に通ず。他日土佐高知に至らんとする豫定なり。

讃岐鐵道 高松より、九龜多度津を経て琴平に至る。

伊豫鐵道
道後鐵道
南豫鐵道

何れも松山市附近に通ずる短距離の輕便鐵道なり。

徳島縣 (阿波)

徳島縣は阿波一國を管す、四國の東方にあり。四國山脈國の中央を東走して地勢自ら吉野川流域地方と那賀川流域地方との二部に分る。吉野川流域地方を北方といひ、那賀川流域地方を南方といふ。北方は古へ粟の國と稱せし所にして、南方は長の國の故地なり。

吉野川

吉野川は土佐より來る。四國第一の長流にして、古來四國三郎の名あり。

その兩岸及下流地方平地多く、其阿波麻植二郡の如きは其名を以て已に古代に粟及び麻の産出著しかりしを示すなり。傳へ云ふ、忌部氏の祖天宮命其部下天日鷲命を卒ゐて粟の國に來り、楮麻を植ゑて農業を此地に起すと徳島市にある國幣社忌部神社は此の天日鷲命を祀れるなり。天宮命は後

粟の國と長の國

忌部氏

本邦地理 徳島縣

に部下の民を率ゐて房總半島に殖民せし事、前已に述べたり。かゝれば今も尙此の地方農業盛にして、藍の産出最も盛なり。但、藍の業の斯く盛大となれるは、舊藩蜂須賀氏の保護奨励によれるものにして、遂には日本第一の名聲を博するに至りしなりといふ。

徳島市

吉野川の下流は數派に分る、即ち一大三角洲を成せるなり。河口に近く徳島市あり、もと蜂須賀氏の城下にして、阿波縮及綿ヲルを産す。

徳島鐵道

徳島市より以西、徳島鐵道あり、吉野川に沿ひて上る。河畔に川島、脇町、半田、池田等の名邑あり。半田に半田榎の産あり。池田に煙草の産あり。

祖谷山

池田の東南に祖谷山村あり、深山の間に僻在し、其地東西十三里、南北七里、其間數十の村落ありて、殆ど他と交通を絶てる一別區域をなす。山内の各村落は之を名といふ名に名主あり。名とは其地の領主、即ち名主の名を負へる地なるが爲の稱なり。古へは諸國とも名田多く、各名に名主あり。其大なるものを大名と稱せしが、徳川代になりては、萬石以上の領地を有する武士を大名と稱し、名主はなぬしと訓讀して、村長の稱となれり。但、尙斯の如

名

名主と大名

祖谷川の壱橋

劍山

き山間には、往々斯かる稱呼を存するなり。祖谷に於ては、名主が其名の人民に對するは、今尙多少主従の如き關係ありて、ほと武士崛起の世に於ける地方の豪族が、郎等を率ゐたるの狀を想見するに足るものあり。各名の名主は多くは名家の後裔と稱し、往々系圖古文書等を有す。中にも壽永の際、讃岐八島に没落せる平國盛の後裔と稱するもの、如きは最も著し。祖谷川あり、山間の諸水を集めて吉野川に注ぐ。川は絶壁の間を流れ、山深きが故に一朝大雨あれば、如何なる橋も忽ち流失す。茲に於て土人は、其必要上より、蔓橋なるものを案出して之を架す。其製たる兩岸の大樹より、丈夫なる蔓を引き來り、數條を高く河上に懸け渡し、細き木の長さ四五尺なるものを横に網み附けたるものなり。歩行の際上下左右に動きて、一見危険の如くなるも、土人は敢て其危険を感ぜずといふ。中には長さ三十餘間に及べるものあり。

祖谷の東方に劍山高く峙つ。山頂に大劔神社あり、俗に安徳天皇の御劔を祀ると稱す。祖谷には、此外にも天皇に關する遺跡及び傳説あり。蓋平家

本邦地理 徳島縣

掛巻町

の後裔こゝに籠れりといふより附會せしものならん。劔山には夏日行者の登山するもの多し。

小松島

徳島の北方に撫養町あり齋田鹽を産す。其東は即ち有名なる阿波の鳴門にして淡路と相對す。

大龍寺

南方には小松島富岡日和佐等の名邑あり。小松島の北に日峰あり山上の眺望佳なり。海岸白沙青松長く相連り胃島に至る。風景極めてよし。

海部

富岡より那賀川に沿うて上らば加茂村に大龍寺あり寺は山頂老杉鬱蒼の間に入り峻嶮なる岩石峙つ所の傳へて弘法大師修行の所と稱す。日和佐に藥王寺あり大龍寺と共に眞言宗の巨刹なり。

日和佐一帶の地方は南方太平洋に面して漁業の利多し。此地方の郡名を海部といふ海部は海人部なり漁夫の部落の稱なり。諸國に海部を名とするもの或はあまと訓み或はあまべと訓むも共に古代漁夫の多く住せし地なる事を示す。海部もと那賀郡のうちなり。那賀郡は即ち古への長の國なり允恭天皇の時天皇の命を奉じて明石の海底を探り大なる眞珠を獲た

瀧頂瀧

る長島の海人男秋磯の如き或はこの海部の部民なりしならんか。那賀川の北に勝浦川あり勝浦はむかし義経が八島攻撃の時に上陸せし地なり。川の上流藤川村に瀧頂瀧あり水は石に激して飛沫霧の如く旭日に向はゞ五彩を現す山間の一奇觀なり。近傍に鐘乳洞あり穴禪定と稱して行者の之に入るもの多し。

参考書

阿波志

十二冊

粟の藩政

三冊

香川縣 (讃岐)

面積と人口の比

香川縣は讃岐一國を管す。四國の東北部にありて阿波と背中合せを成す。面積最も小阿波の二分の一伊豫の三分の一土佐の四分の一にも足らず。而も土地よく開け其住民の數に至りては阿波とほゞ同じく土佐よりも甚多し。

水利

讃岐は南に山を負ひて土地狭く河流みな短少なり。殊に瀬戸内海に瀕して降雨少きが故に何れの河も平常殆ど水なく以て田地の灌溉に利すべき

本邦地理 香川縣

萬農池

空海

高松市

なし。故に農家は、多く溜池を作りて水を貯ふ。此等の池の中に就て、弘法大師の力によりて成就せし萬農の池の如きは最も名あり。池は仲多度郡神野村真野にあり。此池の工事にあたりて、國司朝廷に奏請して曰く、去年より萬農の池の堤を築き始むと雖、工事大にして民少く、成功を期し難し。僧空海は此土の人なり、山中に坐禪すれば、獸馴れ鳥狎る、海外に道を求め、虚に往き實に歸る、茲に於て道俗衆を慕ひ、民庶影をのぞみ、居れば即ち生徒市を成し出づれば即ち追従雲の如し。今舊土を離れて常に京都に住す、百姓戀慕する事實に父母の如し。若し師來ると聞かば、必ず履を倒にして相迎へん、伏して請ふらくば、別當にあて、其事を濟さしめん」と。斯くて朝廷其請を容れ空海國に下りて池の邊に法を説く事三年、人民群集して、大工事遂に成功せりといふ。空海は仲多度郡郡屏風が浦の産なれば、故郷の爲にこの工事を助けしなり。

縣廳は國の中央部の北岸なる高松市にあり、此市もと水戸の分家たる松平氏の城下にして、舊城は海にのぞみ頗る景勝に富む。其栗林公園は幽邃を

八島

次て名あり。

高松市の東に峙てる小山を八島となす。此山もとは一の離れ島なりしも、今は陸續きと成れり、八島一に屋島と書く、其の形恰も屋の棟に似たるが故に名あり。壽永のむかし、平家安徳天皇を奉じて、こゝに行在所を設けしが、義經風波を侵して大阪灣を横ぎり、阿波より山越えに此國に入りて、遂に之を陥れたる事、史上最も名あり。山上に八島寺あり。山上より海上を眺望すれば、大小無数の島嶼、其前に横はり、左には高松市を見下ろし、右に八栗山を望み、實に絶景となす。

八栗山

八栗山は八島の東に峙つ。火山岩質の山にして、岩石磊々、其絶頂は五峰を束ねたるが如きを以て、一に五劔山五劔山の名あり。山に八栗寺あり、眺望亦極めて佳なり。

壇の浦の誤傳地

八栗八島の間の入海、之を此地の人は壇の浦と稱し、傳へて平家全滅の地となす。之れ長門の壇の浦を誤れるものにして、最も笑ふべし。但地方に史蹟と稱するもの、往々にして此類なり、學者よろしく注意すべきなり。

小豆島

寒霞溪

東渡の名邑

白峯

國府と官公

八栗入島の前面、島嶼多きが中に最大なるものを小豆島となす。最東北にあり、其名すでに太古史にあらはる。島に花崗岩多く、石材を産す。又寒霞溪あり、火山岩より成る、奇岩の景勝、豊前の耶馬溪、上野の妙義山に比すべし。たゞ島上にあるが故に、人多く之を稱せざるなり。由來火山岩より成れる山、往々にして岩石奇變に富む、妙義山、耶馬溪の奇岩、皆其一例とすべし。高松より東、牟禮、志度、白鳥等の名邑を経て引田に至る。引田より大阪越を越ゆれば、即ち徳島縣なり。牟禮は源平當時の古戰場なり。志度に志度寺あり、白鳥に白鳥神社あり、共に著名なり。高松市より以西、讃岐鐵道あり、西の方、白峰の南方を經、坂出、丸龜、多度津を過ぎて、東南に折れ、善通寺より更に琴平に達す。白峯は一に綾の松山と稱す、保元のむかし、崇徳天皇の遷幸ましくし所、山上に御陵あり。白峯の南に國分寺あり、其の西方に府中あり、府中は即ち讃岐國府のありし所、菅公嘗て讃岐守として、此の國に下りて、令名あり、近傍瀧宮村は公の遺跡

飯山

丸龜市多度津

鹽飽群島

善通寺

金刀比羅宮

なりと稱し、こゝに天満宮を祀れり。

府中の西方、坂出には鹽田多し。此外にも沿海の地、食鹽の産多きは、瀬戸内海に瀕する國として、他と異なるなし。又讃岐には多く砂糖を産す。

坂出の西南に飯山あり、山形圓錐狀をなして、讃岐富士の名あり、一の休火山なるべしと云ふ。

丸龜市はもと京極氏の城下にして、縣下第二の都會なり。多度津は内海航通の要津にして、大阪より中國九州通ひの商船多く、此地を經由す。備中玉島より、海上僅に二時間にして至るべし。

丸龜、多度津の前面亦島嶼多し。中にも鹽飽群島の如きは、倭寇の本據として、當年海賊大將軍のよつて、以て海外を震恐せしめたる所なり。

善通寺には第十二師團司令部あり、もと丸龜より移りしを以て、今尚丸龜師團の名を以て稱せらる。此地の善通寺は、弘法大師誕生の靈蹟、屏風が浦の地なりと稱す。眞言宗の巨剎善通寺あり。

琴平に金刀比羅宮あり、即ち世に所謂金毘羅大權現にして、海上航行の守護

神として航海者の特に尊信する所なり。もと神佛混淆の社なりしが、維新後純粹の神社となり、祭神も大物主神に合祀するに崇徳天皇を以てしたるものとなり、もとの金毘羅を改めて、文字も似寄りの金刀比羅と改めたり。但、世には舊によりて金毘羅と稱し、○に金の字の徽章を以て信者の尊信を得つゝあるなり。

琴平より西方、讃岐の西海岸に観音寺町あり。町に琴曳山あり、西の方海を見晴し、前面には伊吹島の波上に浮べるが如きあり、海岸白砂相連なり、眺望極めて佳なり。

参考書

讃州府志 十五册

全讃志 九册

四讃府志 六册

十七册

愛媛縣 (伊 豫)

愛媛縣は伊豫一國を管す。此縣を愛媛といふ事、他と稍其趣を異にするものあり、凡そ府縣の名は、其府縣廳所在の郡名又は、市街の名に取るを常とすれども、だ、此縣のみは頗る古き由來あり。我國神代に關する傳説による

愛媛の名義

観音寺町

に、國土は諸冊二卷の生成する所にして、何れも人格を有し、それ／＼に名前あり、四國の島は一昧四面にして、阿波と伊豫とは女性讃岐と土佐とは男性なり、阿波を大宜都媛、讃岐を飯依彦、伊豫を愛媛、土佐を建依別といふと傳へたり、愛媛縣の名全く之に基く。

縣廳の所在松山市は、國の西北隅、温泉郡の平野の中にあり、久松氏の舊城下なり。近傍には數多の小規模の鐵道ありて、道後、三津が濱、其他附近に通ず。市中其他に伊豫紵を産す、産額近年頗る多し。

道後には道後温泉あり、温泉郡の名之より起る。道後とは古へ伊豫を二部に分ち、東部を道の口、西南部を道の後と稱せしより、道の後の温泉といふ名が世に喧傳して、遂に温泉地のみの一地方の名と成りしならん。この温泉は頗る古へより世に知られ、早く已に聖徳太子の撰める道後温泉の碑文あり、碑石は埋没して、今日其所を失すれども、碑文は風土記の逸文によりて世に傳はるなり。其後齊明天皇の行幸もありしが、天武天皇の御代大地震ありて、一時湧出を止めたりし事、日本紀に見えたり。其後再び出て、今日に

松山市

道後

温泉

本邦地理 愛媛縣

三百五

石手寺

興居島及忽那島

高細半島

石槌山

鑛山

至れるにや。道後の附近に石手寺あり、眞言宗の巨刹なり。松山の西北海中に伊豫の小富士あり、山形より此稱あり、本名興居島なり。興居島の北に忽那島あり、設岐の鹽飽島備後の因島院等と共に、倭寇の根據地として知らる。

道後の東北にあたりて高細山あり、此脈引いて南北に走つて高細半島の脊梁をなし、東南石槌山に連なる。伊豫の道前道後はもと此分水嶺を以つて分ちしなり。高細山に河野の城址あり。高細半島は瀬戸内海に向つて突出し、燈灘と硫黄灘とを分つ。波止濱、今治等は其東側沿海の名邑なり。

石槌山は阿波の劔山と東西相對する高峰にして、山上に石槌神社あり、夏日行者の登山するもの多き事、阿波の劔山に似て、道路の險惡なる事は之に倍す。鐵鎖によりて登山するが如き所あり。

石槌より東方、別子市の川等の鑛山あり。別子は銅を出だす、産額下野の足尾につぐ、大阪住友家の有なり。市の川にはアンチモニーを産す。其見事に結晶せるもの他に多く類例を見ざる程なり。

砥部

西豫の名邑

速吸門

宇和島町

日振島

松山の南方に砥部あり、陶器を産す。

砥部より西南、肱川に瀕して大洲あり、之より更に西南にあつて八幡濱あり。八幡濱の西北より、半島長く西南に向つて突出するあり、其端を佐田岬となす。豊後の地藏崎と相對して、瀬戸内海西南の通路を扼す。海峡に高島あり、潮勢急なり、古史に速吸門と稱するものこれならんか。速吸は潮勢の急なるの意、もと蓋し普通名詞なり、神武天皇東征の際に通過せし速吸門は、日本紀の記事によれば、此所を指す、但古事記の文によりて、播磨淡路間の明石海峡を以て其傳説地に擬するものあり、蓋亦是ならん。畢竟普通名詞なり、二書互に其傳へを異にするあるのみ。

八幡濱より東南にあたりて宇和島町あり、もと西園寺氏居城の地、後伊達氏之に居る、舊城尙存す。宇和島には半紙を産す。

宇和島の西方海中には島嶼多し。中にも日振島は、藤原純友が亂を起せし際に據りし所として世に知らる。

伊豫の産物には、右述べしもの、外に、鹽砂糖等あり。

高知縣 (土佐)

地形
面積と人口
の比

高知縣は土佐一國を管す。此國は其形弓狀をなし、東に室戸岬、西に蹉跎岬、共に南海に斗出して、内に土佐灣を擁す。其面積は四國中に最大なれども、土地南海に僻して、山多く、人口は四國中最も少なし、其稠密の割合を以て蹉跎に比すれば、實にその四分の一にも足らざるなり。

風俗

土佐は斯く南海に偏在して、他と交通不便なるが爲に、風俗も従つて質朴にして、殊に頗る古代の音韻を其まゝ傳へて、他國人が混用し、識別し得ざる、「サ」と「ズ」と「ゾ」の如きも、よく明瞭に之を區別するなり。又維新の際には、多く有志の士を出だして、國事に盡力する少からざりしより、世に薩長土肥と並べ稱せられて、今尙政事上樞要の地位を占むるもの多し。

高知市

縣廳の所在高知市は、土佐灣の北部より更に北方に灣入せる浦戸灣に瀕す。もと山内氏の城下なり。舊城の城櫓尙存す。

國府址

高知市より東北、凡そ三里、國比左村に土佐國府の址あり。むかし紀貫之出て、此國に守となり、其歸途、土佐日記の紀行あり、此書専ら世に行はれしよ

土佐日記の地理

り此國府址も従つて殊に著名なるものとなれり。碑あり之を標示す。土佐日記は、國府より浦戸灣に出て、之より土佐灣の海岸に沿うて東し、室戸崎をめぐりて、遂に和泉の灘に出てはて淀川を遡りて京都へ歸る航路の記なり。其日記に記する名所には、大津○長岡郡、鹿兒崎○大津浦戸、浦戸○浦戸大津、○香美郡前池村、○長岡郡三里、宇多松原○香美郡赤那波の泊奈、○安藝郡羽根、○安藝郡濱村の邊、○池村大字池村、○安藝郡室戸村大字、○古の室津は今の室津等を経て、室戸崎にかゝれるなり。

室戸崎

室戸崎は遠く南海に斗出し、岬端絶壁をなし、岩礁海岸に立ち、風景最も雄壯なり。こゝに最御崎寺あり、東寺と稱す、弘法大師嘗てこゝに勸念して明星來影せりと稱す。之より西北、金剛頂寺あり、西寺と稱す、東寺、西寺は共に弘法大師の開基と稱し、前に述べたる阿波の太龍寺、藥王寺、讃岐の志度寺、八栗寺、屋島寺、善通寺、伊豫の石手寺など、共に何れも四國八十八箇所靈場の一なり。室戸崎の邊、捕鯨を以て著はる。

甲の浦

室戸崎を東北に廻れば、甲の浦を過ぎて阿波に入る。岩石途上に累々として飛石、刻石、ごろ／＼石等の名あり。

有井庄

一條氏

龍串

龍串

宿毛灣

産物

浦戸より西仁淀川を渡り須崎を経て更に遠く西南に進まば幡多郡に入り佐賀港に達す。此邊の地は古へ有井庄と稱せし所にして後醍醐天皇第一の皇子尊良親王が北條氏の爲に土佐國島に移さるといふは此地方なりといふ。之より更に西南にすゝみて四萬十川に達すべし。河口に下田港あり下田港より川に沿うて上る事一里餘中村町に一條神社あり一條教房以下五代の靈を祀る。一條氏は足利時代に京師より下りて國司と仰がれし家なり。墳墓は中村の西方藤林の藤林寺にあり。下田より南に進めば蹠蹠岬に達す足摺山金剛福寺あり。南は大洋を見晴らし道路の海岸を廻る所奇景多し。

蹠蹠岬を回りに西に進まば沿岸絶景の所多く遂に龍串の奇景に達すべし。岩石波に洗はれて種々の形をなし奇勝一々名狀すべからず。之より更に進まば即ち土佐の西南端にして宿毛灣あり此邊の海多く珊瑚を産す。其南方なる柏島の邊最も多しとなす。

土佐の産物は右に述べたる鯨珊瑚などの外に鯨節の著名なるあり土佐節と稱す又土佐半紙あり産額甚多し。

参考書

南路志

八十六冊

土佐州郡志

(殘欠) 五冊

第七節 九州地方附琉球

各縣管轄表

縣名

郡市名

國名

各地方應管轄國郡市表附舊郡名 () 内のものは明治二十九年分令以前の舊郡名なり、▲印あるものは島司の管轄なり

福岡縣 福岡市、糟屋宗像遠賀鞍手嘉穂(嘉麻)朝倉(上座、下座)筑紫(御笠、那)糸島(怡土、志摩)早良……………筑前國

福岡縣 久留米市、浮羽(竹野、生)八女(上妻、下妻)三井(御井、山本)三潁山門三池……………筑後國

福岡縣 門司市、小倉市、企救、田川京都(京都)築上(築城)……………豊前國

大分縣 下毛、宇佐……………豊前國

大分縣 西國、東國、東速見、大分、北海部、南海部、大野直入、玖珠、日田……………豊後國

佐賀縣 佐賀市、佐賀、神崎、三養基(基、養、三根)小城、東松浦、西松浦、杵島、藤津……………肥前國

大邦地理 九州地方

長崎縣

長崎市、佐世保市、西彼杵、東彼杵、北高來、南高來、北松浦、南松浦

壹岐國、對馬國

熊本縣

熊本市、飽託、鹿本、菊池、宇土、玉名、阿蘇、上益城、下益城、八代、葦北、球磨、天草

肥後國

宮崎縣

宮崎、南那珂、北諸縣、西諸縣、東諸縣、兒湯、東臼杵、西臼杵

日向國、日向國、日向國、日向國

鹿兒島縣

始良、大島、鹿兒島市、鹿兒島、伊佐、川邊、日置、薩摩

大隅國、薩摩國

出水

位置 名稱 沿革

沖繩縣

那覇區、首里區、島尻、中頭、國頭、宮古、八重山、琉球國、右九州地方及琉球八縣十二國八十五郡(四島)九市二區百二十町二千三百八十九村

九州島は、中國と馬關海峡をはさみ、四國と豊後海峡をはさみて、西南に位す。中に筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩の九國なるが故に此名あり。此島古へは、筑紫の島と云へり分つて四部と成す。古事記に、筑紫の島は身一ツにして面四つありと云へるもの之なり。北部の中央を筑紫と云ふ、筑紫の島の名は蓋し之より起れるもの、名稱は引いて全島に及び、筑紫の日向の橋の小門の楳が原など古事記に見ゆ。後ち分つて筑前、筑後となす。西北部を肥の國と云ふ、後分つて肥前、肥後となす。東北部を豊の國となす、後に豊前、豊後の二國と成れり。其他南方一帶の地は、之を熊曾國と云へり、後に薩隅日の三國に分れたり。古事記の別本及舊事記には、薩隅二國を熊曾國となす。こゝに於て九國なり。天武天皇の朝に、南島内附して、多嶽島廳を置きたり、又別に壹岐對馬の二島あり、こゝに於て九國三島あり。淳和天皇の朝、多嶽島廳

本邦地圖 九州地方

を廢して、大隅に合併せしかば西海道は九國二島となれり。後之を西海道十一國といふ。近年琉球を之に加へて十二國たり。

九州地方拓殖の由來極めて古く、我國史は實に此島より始れるが如き次第なれども、神武天皇東征後は、變じて僻遠の地となり、熊襲華人種族勢力を專にして、却て王化に遠かるに至れり。茲に於て景行仲哀二帝の代に、熊襲征伐あり、殊に九州は其地支那朝鮮に近く、外敵に對しても特別の設備を要するものありしが故に、朝鮮に於ける日本府廢して後は、こゝに太宰府を置き、九國三島は二國を管せしめたり。九州に太宰府あるは、恰も現今臺灣に總督府あるが如きものなり、奈良朝平安朝に於ける九州島の政府に對する位置は、今日臺灣島に於ける關係と髣髴たりしものなり。九州の南部地方には、奈良朝の頃まで隼人種族尙跋扈して王命を奉ぜず、時々騷擾を來せり。王化漸く及んで、和銅六年大隅を日向より分置するに至るも、叛亂尙やまず、大伴旅人等、其他時々征隼人將軍の遠征を煩はし、その全く王化に服して、他と同一の制度の下に管治せらるゝに至れるは、平安朝のはじめ、延暦年間のことなりとす。

太宰府

隼人服屬

事なりとす。

鎮西

藤原廣嗣の太宰府に叛するや、一時太宰府を廢して鎮西府を置きたる事ありき。鎮西府間もなく廢せられて、太宰府は復せられしと雖、九州を鎮西と稱する名稱は、こゝに始めて見えたり。源爲朝幼時九州にありて、鎮西八郎と稱し、鎌倉幕府は鎮西探題を筑前に置き、後には鎮西奉行といふも置かれたり。足利末世には、一般にシモと稱する名を以て、此地方を呼びしが如し。シモは下なり、京阪地方を上方カミガタと稱するに對するものにして、此名稱は、今も尙船頭及旅人等の或る範圍に於て行はるれども、徳川時代には、専ら九州といふ名を以て呼ぶに至れり。

地勢

九州島の形は、人之を形容して猿の立つて躍るが如しといふ。大體の地勢はもと中國山脈と四國山脈との續きなる、九州北部及南部の兩山脈連亘して、霧島阿蘇等の火山脈に屬する諸火山其間に進出したるものにて、爲に頗る錯雜したる現形をなせるならん。

九州の北部地方鐵道交通頗る發達す。殊に石炭坑多きが故に、一層の進歩

鐵道交通

を示せり。南部地方には僅に官設鐵道の一部分開通せるあるのみ。而して是北部に於ける諸線路は盡く九州鐵道會社の獨占する所たり。主要なる線路は左の如し。

九州鐵道門司八代間(本線) 小倉折尾博多鳥栖熊本宇土等を経過す。

全 豐州線 小倉より分岐し行橋中津等を経て宇佐に達す。

全 筑豐線(伊田經山線) 主として炭坑を目的とする線路にして若松港より起り折尾にて本線と交叉し直方伊田香春等を経て豐州線の行橋驛に會す。諸炭坑に通ずる支線甚多し。

全 長崎線 島栖より分岐し佐賀有田早岐等を経て長崎に通ず。

全 唐津線 助原より唐津を経て妙見に通ず。長崎線牛津驛に連絡せん豫定なり。

全 伊萬里線 長崎線有田驛より伊萬里に通ず。

全 佐世保線 長崎線早岐驛より佐世保に通ず。

全 三角線 八代線宇土驛より三角港に通ず。

官設鐵道國分鹿兒島間 加治六を経て。

參考書 太宰管内志 八十二冊

福岡縣 (筑前筑後及び豊前の北半)

位置 福岡縣は九州の北部を管し其範圍兩筑及び豊前西北の半に及ぶ。其地は九州中の主要なる部分を成し九州の各地に通ずるもの必ず此地を経由せざるなし。筑紫の名が九州全島に及べるも蓋し之が爲か。筑紫といふ名義は筑前續風土記には築石と解せり此解釋の當否はともかくも此地方は古代常に外國に對する要衝として海岸に石を築きあげて敵を防ぎし所にして特に太宰府を置きて外敵に備へしめ兼ねて壘島を管轄せしめし事前すでに述べたるが如し。太宰府は筑紫の太宰の義なり。いにしへの太宰府の位置は今の太宰府町より稍西方水城村大字觀世音寺にあり礎石數多尙田畦の間に存す都督府古趾の碑あり。觀世音寺其近傍に存す。此寺は

本邦地理 福岡縣

いにしへは我國三戒壇の一として九州一の巨刹たりしが今は僅に残れるのみ。

道真左遷せられて太宰府にありし時の詩に、

都府樓閣看瓦色 觀音寺唯聽鐘聲

戒壇

水城

とあるは此寺の事なり。三戒壇とは大和東大寺、下野薬師寺及びこの觀世音寺にして、坂東諸國のものは薬師寺に、太宰府管下のもはこの寺にて、何れも受戒せし所なりとす。此地の北方には水城の長堤存す。天智天皇の御代に築かしめたる所にして、中に水を貯え新羅、唐等の入寇に備へしものなり。九州鐵道はこの長堤を切斷して進めり。

武藏温泉

太宰府神社

九州鐵道によりて。水城を越えて南に進まば二日市驛あり。近傍に武藏温泉あり、御笠川の底より湧出す。風景の見るべきなきも、太宰府町に近きと、鐵道の便あるとによりて頗る繁昌せり。太宰府町は之より僅に一里餘、菅公を祀れる太宰府神社あり。

福岡以内の平野の地勢

水城より北方は平野遠く連りて、福岡市に至る。土地極めて低濕、蓋し比較

那の津

那の津屯倉の遺址

太宰府は海に臨む

警固所及び日佐

的遠からぬ時代に生成せし陸地ならん。いにしへ太宰府を設けたる際には、必ず遠く内海の此地方まで灣入したるものなりしや必せり。こゝに古へ那大津ありき、或は那珂の大津といふ、那珂川の河口なり。今は那珂川の河口に福岡博多あり、よりて人多くはこれを以て古への那津にあつ。甚しく地點を誤れるに似たり。安閑帝の時、那津に屯倉を置き、諸國の穀を輸送して、蓄積せし事あり、其屯倉の目的たる、外人接待等の準備にして、必ず海岸ならざるべからず。而も其遺蹟は、那珂川の中流、三宅村にあるなり。天智帝外敵に備えんが爲に、水城を築き、栗隈王を筑紫率率即ち後の太に任じたるや、王が弘文帝の勸誘を辭したる言に、筑紫國は元より邊賊の難を成るなり、其の城を峻くし、濶を深くし、海に臨んで守るものは、豈に内賊の爲ならんやとあり。城を峻くし、濶を深くし、海に臨んで守るとは、水城を指せしものと覺ゆ。されば福岡博多より東南一帯の平野は、もと内海にして、古への那の大津は今の三宅村に遠からざる所にあり、天智帝の比までは、水城村の邊まで海なりしを知るなり。三宅村の南方に警固所の遺蹟なる上警固村

本邦地理 福岡縣

あり是近傍には通譯官の名を留むる曰佐村あるなど亦以て傍證とすべし。試に記して後考を俟つ。」

博多

福岡市は博多灣頭にありもと博多福岡の二部より成り那珂川を夾んで東西相連る。今は兩市を合併して福岡市と成せり。博多津は古來外國交通の要津として其名高く東は箱崎千代の松原より名島香椎に連る。此等の地方いにしへ石壘の設ありて道眞の歌に、

石壘

箱崎や千代の松原石だゝみ崩れん代まで君はましませ

福岡

とも見えたり。後文永弘安の役にあたりて更に大に石壘を修築して西は福岡姪濱の邊より今宿の方にまで及びしが如し。而も之等の石壘或は砂中に埋没し或は福岡築城の際に取り去られたりとの事にて今明にそれと見るを得るものなし。博多には名産博多織あり。

福岡はもと黒田氏五十二萬石の城下の地舊城は前に荒津山をひかへ後に大堀を負ふ。

荒津山はもと沿海の小島なりしもの今は公園たり風景よし大堀は内海の

能古島

志賀島

海の中道

一部分の今尙残れるものと思はる。舊城内には兵營あり。

福岡より西早良川を越えて姪濱ありこゝに鎮西探題の館址あり。之より西海岸を過ぎて糸島郡に入る。前方に殘島あり元寇の際に著名なる能古島之なり。殘島の西南に毘沙門岳あり北方に志賀島あり。此等はともにもと離れ島なりしを今は砂洲陸地より續きて何れも半島と成れるなり。殊に志賀島を東方に連接せる大砂洲は海の中道と稱し長さ四里に近く福岡灣の口を擁するなり。之を海の中道と云ふはもと未だ砂洲の今日の如く水面上に現れざりし節に一帶の淺瀬を生じて海中に歩いて渡るべき道となりし時代のありしを示せるものと云ふべし。玄海灘に向へる所何れも島嶼と陸地との間に砂洲を生じ遂には之を連接せんとするの傾向を示さざるはなし。前二者は其著しきものなるのみ。次に述ぶる糸島郡亦其一例なり。

志摩郡
糸島の大門

糸島郡はもと怡土郡と志摩郡とを合併せるもの。志摩郡は島の郡なりもと離れ島なりしものが怡土の地と連続せるなり。其西部なる芥屋に大門

崎あり、絶壁海にのぞむ高さ二十餘丈、岩洞あり、船を容るべく、材木岩並び立つて極めて奇觀なり。

伊賀國
怡土城

怡土はいにしへ怡土縣主本據の地、渡土の史に伊賀國とも倭奴國ともあるはこれなりと云ふ。怡土村大字高祖に怡土城の址あり。怡土城は吉備の眞備が太宰大貳たりし時に建言して築きし所、十數年を経て成る、實に太宰府の前衛なり。而も今其地形を見るに遠く海を離れて内地にあり、前衛の目的なるに反するが如し。蓋し當時の城たる、後世の籠城を目的とするが如きものとは性質を異にし、必ず要衝の地にありて、外敵の入寇に對するものならざるべからず。果して然らんには、奈良朝の當時にありては、内海遠く此地方まで擧入し居りて、志摩郡は怡土の地と離れ、肥前の松浦瀨より、此間の海峡を過ぎ、怡土城の前面を経て博多、太宰府の方へ航行せしものと想像せざるべからず。今この地形を見るに、怡土と志摩との間、土地極めて低く、海潮小河を逆りて、遠く内地まで侵入するあり、殊に其東部地方の如きは、貞享元祿のころ、有名なる宮崎安貞の新に開發せし新田にして、其以前には

怡土郡平野
の地變

今宿の邊より周船寺に至るまで、遠く入り海なりし事を思はゞ、以て奈良朝のころに、吉備公が要衝の地を見立て、太宰府の前衛をここに置きし理由を推測するを得んか。此邊の地變尙研究を要するものあり、記してまた後の考證を待たんのみ。

高祖城

高祖に高祖城の址あり、蓋し原田氏が怡土城の墟を修築せし所、石壘の尙殘れるものあり。原田氏の墓存す。

雷山

高祖より西南、肥前の境上に雷山あり。山中築石の大遺蹟あり、溪間に水門を設け、左右に切り石を並列せしめ、一の區域を限れるものゝ如し。筑前續

神籠石

風土記には之を以て怡土城の墟と成す、素より誤れり、福岡縣に此類の遺蹟多し、筑前嘉穂郡の鹿毛馬、筑後三井郡の高良山、山門郡の女山、八女郡の遠の迫などにもあり、高良山にては之を神籠石と云ふ、雷山にも香盆石の名殘れり、されば一般にかゝる遺蹟を神籠石と呼ぶ事至當ならんか。神籠石に關して諸説を成すものあれども、何れも其要領を得たるを見ず、之に關する卑見は記して歴史地理四卷六號、明治三十五年六月發行にあり、よりてこれに詳説せず。

本邦地理 福岡縣

箱崎

宮崎宮

名島

帆柱石

香椎宮

筑後川

博多より東、松林中を過ぎて箱崎に達す。松林中近ごろ元寇記念日遊上人の碑を建てんとして、今や殆ど成れり。箱崎に入幡宮あり、延喜式に入幡大菩薩箱崎宮とある之なり、樓門に額あり、敵國降伏と標す。別に敵國降伏の四字を記せる醍醐天皇の宸筆を藏す。九州大學建設地この近傍にあり。箱崎より北、多々羅川を越えて名島あり、今は陸緞きなり、前面に妙見島ありて風景よし。名島は小早川隆景居城のところ。海岸絶壁の間、帆柱石と稱するものあり、俗に神功皇后征韓の船の櫓の化石せるものと稱す、もと岩層の間に夾まれる大木の化石にして、岩層海波に洗はれて、其大部分を現はし、數個に切斷せるものなり、其兩端は尙岩層中に存す。名島の東北に香椎あり、仲哀天皇熊襲親征の時行在所、香椎宮の地なり。官幣大社香椎宮あり、神功皇后をまつる。鐵道によりて二日市より南にすゝまば、一旦肥前に入り、更に筑後川を越えて筑後に入る。筑後川は一に筑紫二郎と稱し、九州一の大河なり、筑後肥前の國界を迂曲回流して、筑紫瀉に注ぐ。下流地方平野多く、筑後米の産あり、

久留米

高良山

岩戸山

石人山
(磐井墓)

河流迂回して、水害多きが故に近年放水路の大工事を起し、出水の節、水を直流せしめて氾濫を防ぐ。筑後川にのぞみて久留米市あり、もと有馬氏の城下にして、今は井上傅女の創製に成れる久留米紵を産する事多し。久留米の東方に高良山あり、山頂に高良神社あり、神籠石山麓より起りて之を繞る。神社は高良玉垂神といふ、古傳に武内宿禰を祀るとも云へり、武内の一族久しく九州に勢力を占めれば、此説據なきにもあらざるべし。高良山の南方、福島町に至る途中、吉田村の邊には古墳多し、中に岩戸山と稱する瓢形の大古墳には石人あり、人或は筑紫國造磐井の墓ならんといふ。岩戸山とは石柳の露出せるものありしによれる名なり、但、石柳今は開掘せられて存せず。岩戸山の邊より西北に向つて、一帶の丘陵連亘し、一條村の邊に至る。こゝに石人山あり、また一の瓢形の古墳にして、石人あり、石庫あり、筑後風土記に所謂磐井の墳墓は、此方なるに似たり。要するに此地方は、筑紫國造の代々

勢力を振ひし根據地なりしなるべし。筑紫廣門が福島城を築くにあたりて、これ等の石人を取りて築城の用に供せしかば、今存するもの少なく、却て城址より數箇を發掘して、今福島公園に陳列せり。

三池炭坑

久留米より鐵道によりて南方にす、まば、肥前境に近く大牟田驛あり、近傍に三池町あり、有名なる三池炭坑ありて爲に地方の繁榮を致せり。由來福岡縣には石炭の産額最も多く、日本全國産の四分の三は、實にこの一縣下より出づると云ふも不可なき程なり。而して其最も多く産出するは、遠賀川の流域地方にありとす。洞の海の入り口なる若松町より起りて九州鐵道本線と折尾驛に交叉し、更に南方に進んで、遂に豊前に出づる鐵道は一にこの炭坑の爲に設けられたるものにて、植木、直方等より、其支線の通ずる宮田、飯塚、長尾、大隈、勢田等其他豊前に入りては、川崎、夏吉等何れも多量の採掘あり、若松及び門司等の停車場は、常に石炭運搬車を以て充満せらるゝを見るなり。

炭坑地方

製鐵所

洞の海の東岸に技光あり、近年政府の製鐵所の設置せられたる所なり。製

小倉

鐵に石炭の供給十分なるを要す、こゝに製鐵所を設けられたるは、其便あるが爲か。

門司

之より東方板櫃を経て小倉市あり。藤原廣嗣の反するや、三道より進んで板櫃川に至り、軍遂に潰えたり。小倉はもと小笠原氏城下の地名、産小倉織あり、今は第十二師團司令部の所在なり。小倉より東北に進んで、門司市あり、九州の最北端にして、馬關海峽を夾んで下の關に對す。九州鐵道の起點にして、九州の入口なると共に、また福岡縣石炭の出口なり。山陽鐵道と九州鐵道との間汽船ありて、彼此の連絡を保てり。

其他の産物

小倉より豊州線は東南に進み、豊前の海岸に沿ひて行橋に至り、宇の島港を經、山國川を越えて大分縣に入る。縣下の産物には、右述べしもの、外に清酒、藍、種油、菓産、榎實等あり、榎實は鐵を製するの原料なり。

参考書、筑前續風土記 二十八冊 筑後志 三冊 豊前志 四冊
本邦地理 福岡縣

大分縣 (豊前の東南部及び豊後)

大分の名蹟

景行天皇熊襲を親征して豊の國に至り給ふや、碩田の國あり、其地形廣大にして亦麗はし、因て碩田と名くと云へり、大分の名由來古し。大分縣の管する所豊後の及び、豊前の東南の半部に於て、九州島の東北部を占め、福岡縣と限るに、英彦山及び山國川の下流を以てす。

耶馬溪

豊州線により、福岡縣下より山國川を越ゆれば中津町あり、小倉嶺を産す。中津より川に沿ひて上る事四里、耶馬溪の奇勝あり、河岸絶壁相連なり、隧道を穿ちて道を通ずる所あり。支流羅漢溪に沿ひて進まば、羅漢寺あり、殊に奇岩の勝を極む。古羅漢また奇趣あり。耶馬溪は、讃岐小豆島の寒霞溪、上野の妙義山など、同じく、集塊岩より成れるなり。

英彦山

山國川の水源に英彦山あり、兩豊及び筑前の三國に跨れる一高山にして、山に英彦山神社あり、世に所謂彦山権現なり。

宇佐神宮

豊州線は中津より進んで、宇佐驛に終つ。宇佐驛は驛館川の河口柳浦にあり、之より對岸長州町に出で、宇佐町に至るまで、二里許を隔つ。宇佐に宇佐八幡宮あり、延喜式に八幡大菩薩宇佐宮とある是れにして、和氣清原嘗てここに神勅を受けたる美談あり。八幡宮は應神天皇を祀れるなりと稱す、而も大日本史には其微證なきを言へり。

國東半島

宇佐より東南、國東半島の頸部を過ぎて、別府灣頭日出に出づべし。國東半島に双子山あり、休火山なり、溪流は之より四方に向つて、放射狀に流る。南方に鋸山あり、山頂鋸齒狀を成す頗る奇觀なり。

別府灣

別府灣は、國東半島の南方に灣入する海灣にして、一に齒齒灣とも云ふ。灣の西頭に鶴見岳の高く峙てるあり、一大休火山なり、其西に由布火山相並ひ、火山脈は、引いて西南久住山に至り、肥後の阿蘇山に連る。火山の邊温泉多く、灣頭の別府、濱脇龜川等最も著はる、此邊の地何れも地を穿つて深きに達すれば、温泉の湧出を見ざるなしといふ、海岸の砂濱中亦温泉を出だし、浴客は海水浴と温泉浴とを同時に成すを得るなり。別府より、西北に進む一里

温泉

ばかり鉄輪温泉あり、此邊温泉の盛に涌出するもの、水蒸氣の地中より放散するもの甚多し、之を地獄と稱す。坊地獄、海地獄、血の池地獄等最も著し。坊地獄と稱するもの、直徑五間ばかりの穴あり、底に泥土を充たし、絶えず沸するの状、極めて物凄し。海地獄、血の池地獄は共に盛なる温泉の涌出場なり、試に卵を海地獄にひたす事四五分容易に熟すべし。此外にも地獄は至る所にあり、住民之を利用して物を煮湯を沸かすに供す、名物に地獄製造極樂餅など稱するものあり、一に火入らず餅といふ、薪を使用せざるを云へるなり。火山の邊往々にして地獄と稱するあるは、珍らしからねども、鶴見山麓に於けるもの、如きは殊に著しきものなりとす。

別府より東南、大分町まで電氣鐵道あり。大分は松平氏の舊城下にして、城内に縣廳あり。之より東に進まば、佐賀關半島の斗出して、伊豫の佐田崎と相對して、海峡を扼するあり。半島に佐賀關の良港あり。之より南方、臼杵灣、佐伯灣等の灣入するあり、灣頭何れも同名の港あり、國東半島なる日出杵築等と共に、豊後の名邑なりとす。

縣下名産と稱すべきもの少なし、近年青筴の製出稍盛なり、其他火山地方の硫黃明礬、山林地方の木材、椎茸、沿海地方の鹽鯛、其他の魚類等、稍列擧するに足るべし。

豊前志 四册 豊前國志 四册
参考書 豊後風土記 一册 豊後國志 九册

佐賀縣 (肥前の東半)

佐賀縣は肥前東北の半部を管す、縣廳は佐賀市にあり。佐賀はもと鍋島氏三十五萬石の舊城下の地、現今縣の管する所は、主として佐賀領と、唐津藩小笠原氏の領地となり。九州鐵道、鳥栖より分れ來り、佐賀市を過ぎ、牛津、武雄、有田を経て、長崎縣下に入る。牛津より北、小城を経て、藤原に至れば、之より鐵道ありて唐津に通ず。此鐵道の通する所、炭坑に富む。此等の石炭は、唐津港より積み出ださるゝなり、唐津港は唐津の西北、大島の陰にあり。

本邦地理 大分縣

多久の聖堂

唐津

陶器

領巾振山

防原の近傍、多久の地は古來漢學の盛なる所、こゝに聖堂あり。
 唐津は松浦潟の要津にして古來外國の交通往々此地を經たり、唐津の名蓋し之より起る。上方以西の地方にては陶器を呼ぶに唐津物の名を以てする事尙關東に於て瀬戸物の名の一般に行はるゝが如きものあり、之れ古へ支那朝鮮等の陶器の多く此地より輸入せられて、上下の愛玩する所と成り、また此地にても陶器を製造せしによるなり。唐津城址は海にのぞみ、左右に松林を見下し、前面島嶼散布して風景極めて佳なり。

唐浦より東南松浦川を隔て、領巾振山あり、松浦潟にのぞみて孤立したる山にして、山頂に一の湖あり。大伴狹手彦征高麗軍に將として、松浦潟より船出するや、其妾弟媛○萬葉集の歌離別を悲しみ此山によりて領巾を打ち振り遠ざかり行く船を見送りしより此名ありと、肥前風土記に見えたり。萬葉集の歌に、

遠つ人松浦佐用媛夫戀ひに領巾振りしより負へる山の名とあり。此嶺の山來頗る古きを知るなり。俗説に、佐用媛夫を慕ひて佇立

呼子

名古屋

武雄温泉

本邦地理 佐賀縣

之を久うし、遂に化して石と成れりといふ。之は肥前風土記の山名の山來を記して、佐用媛に關する記事を述べたる文の結尾に「登此峯舉帙招、因以爲名とあるを、名」の字を「石」と誤寫したる本によりて、此峯に登りて帙を振りて招く因て以て石と爲ると讀み誤りしに基けるものと思はる。俗に山中巽夫石ありと云へど、土人は之を知らず、却て唐津町の東なる松浦川の中に佐用媛の足痕岩といふ傳説をとなへ、之より數里を隔て、呼子の前面なる加部島の田島神社の前なる大石を以て、佐用媛山上より一躍して松浦河中の石に足痕を留め、再躍してこゝに至り、遂に石と成れりと傳へたり。何れにしても妄説ながら、其附會には一笑の値あり。

唐津より西北、山を越えて呼子港あり、前面名古屋をのぞみ、加部島等、其他島嶼多く、亦絶景とす。名古屋は即ち秀吉征韓の際の名護屋本營の地。城址に上りて眺望すれば、近く壹岐島を一時の中に收め、正に對馬を経て朝鮮を呑まんとするの趣あり。此邊の海漁業の利多く、殊に鳥賊の漁多し。武雄は著名なる温泉の地。

有田
(陶器)

有田は陶器有田焼の産地なり。有田より伊萬里港に向つて鐵道あり、有田の陶器は多く伊萬里を経て、他に積み出ださるゝが故に、或は伊萬里焼の名を以て世に稱せらる。有田の陶器は秀吉征韓の役に際し、鍋島直茂從軍して、彼の地の陶工を伴ひ歸り、之をして陶窯の開かしめしに基せり。當時茶の湯大に流行し、人々甚だ支那製朝鮮製の茶碗を珍重せし際なりしかば、たゞに有田のみならず、薩摩の島津の如きも、亦盛に陶器を作らしめたり。但有田のは其質最も堅牢なるを以て稱せられ、金彩燦然として、極めて見事なり。其産額甚多く、價格に於て、尾張美濃京都につぐ。今や學校を設けて、尙盛に其業を奨励しつゝあり。されば其はじめに當りては、我國の陶器は多く茶の湯用に供せしものなりしが故に、後世に至りても、喫茶用にあらざる陶製の器具を一般に茶碗と稱する事あるなり。縣下の産物には、右に述べたるものゝ外に生蠟あり、多く楡を植えて、其實より製するなり。

参考書 松浦風土記 六冊 肥前風土記 一冊

其他の産物

長崎縣 (肥前の西部、南部及び壹岐對馬の二國)

半島及び島嶼

肥前の西部南部地方海岸線頗る錯雜して、半島、島嶼殊に多し。北松浦、西彼杵、南高來、北高來等の諸郡は、皆それ〱に自ら半島を成し、平戸島は北松浦に屬し、南松浦は五島列島を成す、其外島嶼の散布するものに至りては、枚舉に遑あらず、之に加ふるに、壹岐對馬の二島國を以てす、長崎縣は實に半島及び島嶼を管するなり。従つて海岸線甚長く、漁業の利に富むと共に、良港に乏しからず。平戸、佐世保、長崎等最も著はる。

九州鐵道佐賀縣下より來り、早岐より佐世保線を分ち、更に大村灣頭に出で、沿岸を迂回して、大村をすぎ、遂に長崎に達す。

長崎

長崎は徳川時代に於ける唯一の外國貿易場にして、こゝに和蘭人及び支那人の居留地あり、海外の知識は常にこゝより輸入せられしなり。當時の居留地たりし、出島は今は大に地形を變じたれども、古き和蘭領事の館は、今尙殘れり。今や商業は、神戸横濱に及ばざる事遠しと雖も、尙外人の居留する

本邦地理 長崎縣

高島炭坑

もの多く市街甚繁榮なり。此地方の産物としては、長崎煙草名あり。長崎の西方海中に高島あり、所謂高島炭坑のある所にして、石炭の採掘甚だ多し。

島原半島

長崎より北方に向つては、西彼杵半島遠く斗出して、大村灣を擁し、東方には島原半島ありて、筑紫灣の口を扼す。島原半島に温泉岳あり、著名の火山にして、地獄あり、温泉の涌出するもの亦多し、中にも小濱温泉の如き最も著はる。半島の東岸に島原港あり、南岸に口の津港あり、共に要津とす。口の津の東北に原城址あり、有馬氏嘗てこゝに居城せし所にして、切支丹一揆其廢墟によりて、肥後の天草と共に、島原亂を起したる遺蹟なり。島原半島は、西の方天草灘を望む、山陽嘗て此風景を詠じて、雲耶山耶吳耶越、水天勞髣青一髮の詩あり。

威城址

天草灘

佐世保

佐世保は九州西方を管する軍港にして、帝國海軍の西部根據地なり。其地僻遠にあれども、近年甚しく繁盛に赴けり。

平戸

平戸は平戸島の東北部にあり。徳川初世に於ける外國貿易場として其名

生月

五島

現はれ、當時英吉利の商館などもありき。彼の支那明末に於ける忠臣鄭成功の如きも、實に此地に於て生れたる、支那人と本邦人との雜種兒なりき。後、切支丹嚴禁の爲に鎖港と成れり。

平戸の西北に生月島あり、捕鯨を以て名あり。

平戸より西南にあたりて、五島列島相並ぶ。此列島は古へ値嘉島と云ひ、奈良潮にありては、一時島廳を置きて、肥前より獨立せしめ、上近下近の二郡と成せし事ありしも、いつしか廢して、松浦郡の中へ編入せられしなり。徳川時代にありては、五島氏之を領して、福江に在城せり。五島には鳥賊及び鯨の漁獵を以て著ける、五島鯨名あり、鮟鱇、鰻、節等亦多し。

壹岐及對馬

壹岐對馬の二島は肥前と朝鮮との間に飛び石の狀を成して列べり。壹岐の郷の浦勝本、對馬の嚴原、鹿見、竹敷、佐須奈等皆要津なり。中にも竹敷の名は古來著はれて、今は海軍の要港たり。徳川時代には、對馬は宗氏之を領し、壹岐は平戸島等と共に、松浦氏之を領したり。壹岐對馬の二島は古へは邊要の地として、防人を置いて之を守らしめたり、防人は崎守の義なり。今は

防人

對馬及び五島に警備隊あり。壹岐對馬には、五島と同じく、鯨、鮪、海鼠、鰯等の海産物多し。

長崎古今集覽 十四冊 長崎志 八冊 蝦長崎志 十三冊
参考書 空岐國蝦風土記 五十冊 對馬紀事 六冊

熊本縣 (肥後)

火の國 熊本縣は肥後一國を管す。肥後は内海を夾んで肥前と相對し、もと一國にして肥の國と稱せり。肥は火の義なり、傳へ云ふ景行天皇西征の時海を航して暗夜に火光を望み、之を指して八代縣やしろのあかたにつくを得たり、而して其火の主を知らず、之れ人間の火にあらずとて、火の國と名付けたりと。之れ世に所謂不知火にして、今も尙海上に現出する事ありといふ。

田原坂 九州鐵道筑後より來り、植木、熊本、宇土を経て八代に達す。植木の西北に田原坂あり、明治十年西南役の際、激戦のありし所、當時の彈痕尙見るべし。

熊本 熊本は細川氏五十四萬石の城下の地にして、白川の流に跨る。舊城は市の

本妙寺

水前寺

阿蘇山

宇土

中部にあり、加藤清正こゝに封を受けし際の築城にして、天守をはじめ、城櫓大抵西南役の際に焼失せしも、規模の廣大なりし事、今尙見るべし。今第六師團司令部あり。本妙寺には清正の廟あり、信者の崇敬甚厚し。加藤氏は滅亡に終りたれども、清正は士民の尊崇を得て、千歳に廟食するなり。市中朝鮮館の名産あり、之れまた清正が朝鮮役の際に製法を傳へしものとして、其恩澤を稱するなり。近郊に水前寺あり、園庭幽邃にして、清水の盛に池中より噴出する所、最も妙なり。市外第五高等學校あり。

白川は源を阿蘇山中より發す。阿蘇は著名なる火山にして、舊火口は直徑凡そ七里に亘り、中に一町十四村あり、約四萬の人民は、舊火口内に太平を謳歌しつゝあるなり。白河はその舊火口の外輪山内部の水を集むるもの。舊火口内更に數多の火山あり、其中に就て、高嶽は現に盛に噴火しつゝあるなり。近傍地獄あり、温泉多し。

宇土は熊本の南方にあり、小西行長嘗てこゝに封ぜられ、清正と肥後を分領したりしが、關東役西軍に黨して滅びたり。

本邦地理 熊本縣

三角港
天草島

宇土より西、宇土半島斗出す、其端に三角港あり、鐵道こゝに開通す。其西南海中には、天草上下の二大島あり。天草島は、肥前の島原と關聯して、寛永に切支丹一揆の起りし所。此亂ありてより、切支丹禁制ますく、嚴重となりしにも拘らず、宗教の熱心は遂に全滅せらるゝに至らず、天草及び島原の内地には、種々の形を以て、耶蘇教尙保存せられて、明治に及べる所もありといふ。

八代
球磨川

八代は球磨川の河口にあり。球磨川は、肥後日向の境なる五箇山中より發し、南方に迂回して、更に北流して、此所に注げるなり。此川は富士最上と共に、日本三急流と稱せらるゝ所にして、其中流なる人吉より、八代に至るまで、十六里の間、小舟にて僅に四五時間にして達すといふ。舟行危嶮なれども、亦極めて痛快なりとす。

五箇山中

五箇山中は、阿波の祖谷山中と同じく、平家の落人の隠れ籠れる所なりといふ。其地峻嶮にして、遠く村里と離れ、人世に遠かる事、祖谷山中よりも一層甚しきが故に、世人は久しく斯かる村落の山中に存するを知らざりしが、室

産物

町時代の末の比にやありけん、ある人椀の川上より流れ來れるを見て、川筋を尋ね上り、遂に之を發見したりといふ。山中もと食鹽なし、水煮にて食事をなせりといふ。後には肥後侯より年々之を下賜し、村民に分ち與へたりとぞ。

縣下の産物としては、菊池川近傍の肥後米、天草島の石炭、無煙炭、其他麥等の穀物、甘藷、琉球表備後表等の壘表、燒酎、赤酒等の強烈なる飲料あり、されども、また朝鮮餉の如き下戸的名物もあるなり。

参考書 肥後國志 三十冊 肥後古記集覽 十九冊

宮崎縣 (日向)

日向

宮崎縣は日向一國を管す、其地九州の東南部にありて、東の方遠く太平洋を望み、直ちに日の出づるに、向ふが故に、日向と云ふにや。此國は開拓の山來極めて古く、我國に於ける天孫種族勃興の本源地として、實に我が皇室の祖國を成せども、西西北の三方は深山を以てかこまれ、東方沿岸また良港なく、

拓殖

本邦地理 宮崎縣

高千穂

海陸の交通共に不便なるが故に、其後の拓殖行届かず、人煙極めて稀少にして、一方里平均九百三十五人を容るゝに過ぎず、北海道と岩手縣とを除きては、他に比すべき地方を見ざるなり。従つて繁花なる都邑もなく、縣廳の所在たる宮崎町も、未だ市たるに至らず、都城高鍋佐土原、美々津、延岡等、何れも人口多からざるなり。

霧島山

延岡は五箇瀬川の河口にあり、之より川に沿ひて上らば、上流西臼杵郡に高千穂村あり。此地古へ智鋪の郷と稱す、日向風土記の逸文によれば、天孫降臨の高千穂の二上峯は此所なりとなす。天孫が果して天より此所へ降臨せられたりや否やは、史上自ら別問題に属すれども、此地が天孫降臨の古傳説地なるは、疑なきに似たり。後世或は日向大隅の境上なる霧島山を以て高千穂峰に擬する説あり、峯は東西兩峯に分れ、二上峯と云ふにも當れるが上、山は高峻なる噴火山にして、景色豪宕なれば、神仙の境として、斯かる説を成すものも起れるならん。凡そ火山は、其山容秀峻にして、奇景に富むを常とし、急激の噴火に際しては、山裂け地震ひ、忽ち山神が憤怒の形相を現す

火山は神仙の境

宮崎

宮崎宮

鶴戸神宮

るが故に、古來多くは火山を目して神仙の域となす事、前々已に觀察し來れるが如し、霧島山亦其一例に漏れず、遂に附會するに高千穂を以てするに至りしものならんか。山上天逆鉾と稱するものあり、後世修験者などの建てしものなるべし、俗に神代の遺物となす、妄誕笑ふべし。大淀川あり霧島山より出て、東流して宮崎町を過ぎ海に入る、宮崎町の北方に宮崎宮あり、神武天皇を祀る。宮崎町より南して、加江田河口を過ぎ、更に進まば、鶴戸崎あり、奇岩峙ちて、岩窟あり、鶴戸窟といふ、鶴戸神宮あり、鶴鶴草葺不命尊を祀る。

参考書 日向國舊地考 一册

鹿兒島縣 (大隅及び薩摩)

大隅及び薩摩は古へ隼人の國、史に大隅隼人、阿多阿多後後に隼人多たれつせやと嶺嶺隼人など見えたり。薩隅兩國九州南部に二大半島を成して、中に鹿兒島灣を擁す。灣内櫻島あり、著名の活火山なり。此島噴火の事、往々古史に見えたり。島

本邦地理 鹿兒島縣

に櫻島大根を産す、又大なる蜜柑の産あり。

櫻島の西方對岸に鹿兒島市あり、もと島津氏七十七萬餘石の城下の地なり。明治維新に際しては、薩藩は主として勤王の爲につくし、山口と共に世に薩長と並べ稱せらる。市外城山あり、明治十年西南の役にあたりて、西郷隆盛の終を遂げし所なり。市に薩摩上布、薩摩紵の産あり。

鹿兒島より東北、鹿兒島灣頭に沿ひて、官設鐵道あり、大隅の國分まで開通す、他日更に北に進み、肥後に入りて九州鐵道に連絡せんとするなり。

國分は有名なる國分煙草の産地なり。鹿兒島の地方にも煙草を産す、薩摩煙草名あり。

國分の北方に、隼人城と稱する所あり、峻峻なる岩山にして、岩洞あり、熊襲酋長の居城なりきと傳ふ。但古史には熊襲に八十梟帥ありしを云へり、酋長一人に限らず、酋長の居城といふ事漠然たり、もとより信じ難かるべし。

鹿兒島より西北、伊集院には陶器薩摩焼を産す。この陶器の由來は、肥前有田のと同じく、島津義弘が征韓役の際に、伴ひ歸りたる陶工の始めし所なり。

金山

其他の産物

坊の津

天孫種族の遺蹟

韓人の苗裔は、集りて、伊集院の西苗代川村を成す。久しく固有の朝鮮風を存せし由なれども、今は他の風俗に化したり、其製造する薩摩焼はまた黄金を焼き付けて、甚美なり。縣下には金山多く金の産出に富めるが故に陶器にも自由に之を使用し得るなり。金山には薩摩に鹿籠かしのこ芹せりが野大隅に入りては、山が野金山など、最も名あり、其産出高は佐渡にも勝り、現今にては、本邦第一位を占むるなり。この外産物には、砂糖及び甘藷あり、海産としては、薩摩節せつ鯉節りせつの著名なるあり。住民多くは強烈なる飲料を好み、焼酎の産出は全國に冠たり。

薩摩の西南隅には、坊の津あり、もとは博多及び伊勢の安濃津と共に、日本の三津とも稱せられたる所、支那と交通せし所なりしも、今は衰へて一漁村と成れり。

大隅薩摩の地は、熊襲隼人の國として、天孫種族の古代遺蹟を發見せざるよし、考古學者の往々にして言ふ所、之に反して、日向に天孫種族の遺蹟多きは、何人も認むる所なり。而して延喜式には、神代の三陵即ち瓊々杵尊の埃え山

種子島屋久

陵、彦火火出見尊の高屋山、上、陵、鷓鴣草葺不合尊の吾平山上陵は共に日向國にありと成せり、然るに今は此等の御陵は却て鹿兒島縣下に其地あり、頗る不審なきにあらず、大隅薩摩とは日向のうちなりしも、延喜の頃にありては、明に別の國となれり、而も延喜式に日向と明記せるは、争ひ難きにや。

大隅の南方に種子屋久の二大島あり、推古天皇の朝に屋久人來朝の事あり、多禰島は、天武天皇の朝に内附し、之より後、多禰島として獨立の政廳を置いて支配せしめしが、費す所多く、得る所少しとて、淳和天皇の朝に之を廢して、大隅國に附けたり。推古天皇の朝小野妹子隋に使して、當時隋の軍が琉球を伐ちて分捕し來りし器物を見て、之は耶久人所用のものなりと云ひし事あり、隋の史に見ゆ。之によりて、或は古へ夜玖と云へるは、今の屋久島のみに限らず、遠く琉球をも指し、推古の朝に來朝せしものは、琉球人なりしならんかとの説を成すものもあれども、必しも然るを要せざるべし。近來の研究によれば、隋の伐ちし琉球は、今の琉球にはあらずして臺灣なりといふ。

されば妹子が耶久人所用の器と云へるは、嘗て耶久人が臺灣人の所用の如

鐵砲傳來

き器物を所用せし事ありしを見て、深く研究せずして斯く放言せしものなるべく、甚しく價值ある言とも思はれざるなり。

種子島は鐵砲傳來を以て名あり、天文十二年に葡萄牙人こゝに漂着して、始めて鐵砲を島主種子島時堯に傳へたるより、次第に世に行はるゝに至れるなり。よりて鳥銃に種子島の別名あり。屋久島に入重山あり、一に宮浦嶽といふ、山中に杉の良材あり。

寶七島

屋久島より西南海中に島嶼多し、總稱して寶七島と稱す。薩摩の川邊郡に

口永良部島

屬す。七島表と稱する壘表の産あり。七島中、口島、中島、諏訪瀬島、惡石島、寶

硫黃島

島等大なり、何れも火山列島なり。屋久島の西北に口永良部島あり、其北に

竹島

硫黃島あり、亦共に火山島なり。口永良部島には牧畜の業盛なり、硫黃島は

硫黃多きより名を得たり、硫黃島の東に竹島あり、遣唐使の船の寄航なせに

よりて、その名古史にあらはる。奈良朝の前後にありて、屢々遣唐使を唐に出だすや、當時造船の術未だ精しからず、航海の法また未だ發達せざれば、其船住々にして漂流の難に遇へり。茲に於てか大に南島探檢の必要を生じ、

南島探檢

文武天皇の朝には文忌寸博士を遣して探検に従事せしめ、聖武天皇の天平七年には、特に人を派遣して、南島に標柱を樹てしめ、其島名より、近傍の島或は港泊への方角路程等を記して、漂着船の便に供したり。後、其木標損して改め建てしめたる事もありき。奈良朝の比は頻りに南島を招撫せしもの其動機は、一は遣唐使の派遣にありしものと云ふべし。

奄美群島

奄七島の西南海中に奄美群島あり、大隅に屬して、大島郡を成せり。大島最も大にして、周圍六十里に近し、古史に奄美とあるは是なり、文武三年奄美來朝す、藤原清河、安倍仲磨等の乘れる遣唐使の船、歸途風に遇ひて奄美島を指して走り、遂に漂流して、再び支那に歸れりとある奄美島、皆この島の事なり。大島の附近に喜界島、加計呂麻島、徳の島、沖の永良部島、與論島等あり。徳の島は古へ度感の島とあり、文武天皇の朝始めて來朝の事、史に見えたり。これ等の諸島はもと琉球に屬せしを、慶長年間島津家久琉球を伐ちて國王を擒にし、大島以下の此等の諸島を改めて薩藩の直轄領と成したるより、今尙鹿兒島縣の管下に屬するなり、但産物及び住民の風俗等はすべて琉球的な

喜界島

り。

喜界島は治承年間、僧俊寛等が流されたる鬼界島なりといふ。當時平康頼の歌に、

薩摩潟沖の小島に我ありと親には告げよ八重の汐風

とあり。孤島に於ける心惜憐むべし。平家滅亡の後、義経の徒此島に隠れたりとの風聞ありて、鎮西奉行天野遠景をして之を伐たしめしよし、吾妻鏡に見えたり。

大島

大島には六萬七千に近き人口あり、住民の風俗は沖縄に等しく、男女共頭に簪をさし、平袖の衣服を着し、前にて細帯をめぐり、跣足を以て常とす。氣候温暖、蘇鐵、芭蕉竹等熱國産の植物繁茂し、柑類の果實多し。蘇鐵の根及び幹は食用に供すべし。農業には甘蔗、甘蔗を作る事最も多し、之は薩摩も同様にて、薩摩砂糖の名高く、甘蔗に薩摩芋の名もあるなり。又紬織、蘭蓆等を製造す。他の諸島の風俗生業亦相似たり。

参考書 薩摩日地理考 二十八册 三國名勝圖會 四十册

本邦地理 鹿児島縣

沖繩縣 (琉球)

沖繩の名

先島列島

沖繩島

那覇

那覇

沖繩縣は琉球を管す。琉球は鹿兒島縣下の諸島と共に九州と臺灣との間に飛び石の状をなして羅列せるなり。島數五十五分つて沖繩群島、先島列島の二部となす。沖繩島最大なり。沖繩の名は天平勝寶年間に遣唐使藤原清河が漂着せるによりて國史に見ゆ、然れども沖繩内附の事見えず。沖繩島の西方に久米島あり、先島列島には宮古島、石垣島、西表島等あり、石垣島、西表島等を一に八重山列島といふ、和銅年間信覺球美の人來朝の事史に見ゆ、信覺は石垣島にして、球美は久米島なりと云ふ。沖繩島は周圍百十里餘分つて國頭中頭島尻の三部となす。更に之を各間切に分つ。國頭を山北とし、中頭を中山とし、島尻を山南とす。國頭に運天港あり、島尻に那覇港あり、沖繩南北の二良港なり。那覇に沖繩縣廳あり、全島中最も繁榮の地たり。大阪神戸より鹿兒島を経て、毎月數回

波上宮

首里

崇元寺

久米村

風俗

汽船の定期航海あり。那覇に官幣小社波上宮あり、波上岬の懸崖の上にあり、風景極めて佳なり。那覇の東一里餘中頭の南部に首里あり、もと琉球王城の地、那覇との間に大道通じ、往來頗る繁し。首里の西泊村に崇元寺あり、舜天王より前國王に至るまで三十六代間の祠廟あり。泊村の西南に久米村あり、支那明朝の時に移住せし支那人の後裔にして、代々儒學を崇び、支那風を存し、村内に聖廟ありて、今尙孔子を祀れり。この村民常に母國を崇み、之に心酔するの情あり、琉球をして久しく支那に通ぜしめたるもの、この村民の刺衝あづかりて力ありしといふ。沖繩の風土産物及び住民の風俗等、何れもほゞ前に述べたる大島に類似せり。言語は大に内地と趣を異にして、初來の旅客は互に談話を通ずる事難し。然れども、詳に其語を観察すれば、大抵内地の語と其源を一にし、國語の轉訛したるものなる事を知るべし。近時は學校に於て、東京語を普通語として授くるが故に、今數年ならずして、言語の統一を見るに至らん。人名に

は、日本流のものと支那風のもの二様あり、日本風の名は其種類甚だ少きが故に、同名の人甚多し。農産物には落花生、甘藷多し、甘藷は人民の常食なり、之を一に琉球芋と稱する事、琉球蓋し其本場なればなり。又豕を牧畜す、農夫は豕を縛して頭に戴きて取て汚穢なりとせず。其他、頭に物品を戴きて歩行するは一般の風習なり。蘇鐵多く、食用に供すべき事、大島に於けると同じ。氣候は温暖にして、海風涼を送り、敢て苦熱に至らず。草木よく繁茂す、但暴風多きが故に、家屋は多く平家建にして、繞らすに石垣を以てするの習慣あり。製産物には、薩摩紵、芭蕉布、紬、砂糖、漆器、泡盛酒等あり。

沖繩開關に關する傳説を尋ぬるに、太古志仁禮久阿摩美姑なる一男一女ありて、大島なる阿麻美岳即ち今の湯灣岳に天降り、次て天帝子出て、天帝子の長子天孫氏始めて王統を此島に垂れたるなりといふ。天孫氏世を傳ふる事二十五、其間の事蹟其詳細を知り難し。天孫氏徳衰へて、賊臣利勇の爲に滅ぼされ、浦漆ウラシの按司アサ名尊、敦利勇を滅して王位につく、之を舜天王となす。之より以後の事蹟稍尋ぬべし。崇元寺の祠廟にも舜天王を以て第一祖と

なし、其前に遡らず、蓋し故あるか。時恰も我が鎌倉時代の初にあたり、尊政は源爲朝が琉球に入り大里按司の妹を娶りて生める子なりとの説あり。舜天王の統は三世にして絶え、天孫氏の裔再び王位につきしが、其後國內亂れてしばし革命あり。支那明朝のはじめに當りては、山南山北共に獨立して、一時は沖細島に三王を見るに至れり。中山王明の招に應じて其冊封を受け、遂に全島を統一し、之より琉球は支那に通じて、代々其冊封を受くる事となれり。王統は文明年間に再び舜天王の裔たる尙氏に歸し、以て明治に及べり。

琉球は斯の如くにして、支那の附庸たるが如き形を呈したりしと雖も、もとその種族、言語、風俗等、内地と其源を等うするのみならず、前にも已に述べたるが如く、四七五頁及三政治上の關係に於ても、すでに室町幕府に通じ、島津家久征討以後は、永く薩摩の附庸として、幕府に通じ、租賦を薩摩に納めて、明に我國の屬國たる事を示せり、茲に於て明治五年に至り、朝廷は琉球を收めて、西海道の一國となし、藩を置きて國王尙泰を華族に列して藩王と成せし

が更に明治十二年に至り琉球藩を廢して沖繩縣となし他の地方と同一の統治を受くる事となれり。

參考書 沖繩志 五冊 南島志 三冊 中山傳信錄 六冊

第八節 臺灣

臺灣は明治二十七八年戰役の結果として新に清國より得たる大島にして帝國の西南端にあり。其形は一葉の木の葉の如く海岸に屈曲極めて少く脊梁を成せる山脈は稍東に片よりて長く島の方向に走り東部は傾斜急峻にして海岸絶壁を成せる所多く船を寄すべき港少きに反し西部は傾斜緩にして末は廣き平野に連り田園よく廣げて海岸また碇泊場に乏しせずこれ等の平野地方には支那より移住せる種族多く住して主として農業に従事し今尙固有の風俗習慣を有するあり。東部の山地には土着の蕃民住す所謂生蕃にして之れまた固有の殺伐なる蠻風を存し主として漁獵を業とす。蕃民の支那人に化せられたるもの即ち所謂熟蕃はぼぼ其間に住し

區縣

地勢

支那人

生蕃

熟蕃

蕃社

臺灣の住民の種類

人口

風俗習慣は支那人に同じ。こは全く支那政府に服従したりしものなりされどその服従を肯んせず而も競争に堪えずして遂に東部の山地に退去せしものは依然生蕃として存するなり。生蕃には數多の蕃社あり互に相闘争する事ありて中には好んで他人の頭骨を取り所謂首狩を行ひて其獲る所の多きを以て榮譽とするものすらあり。殊に熟蕃支那人に對しては甚しく敵意を挾むが如き風ありと云ふ。臺灣が我が版圖に歸してより以來内地人の政治の爲商業の爲其他殖産工業等の爲に移住するもの出稼すのもの亦少からず。即ち現時の臺灣の住民には左の種類あり。

内地人 赴任、出稼又は移住のもの、

臺灣住民

臺灣土人

支那人 支那より移住せしもの、
土着の民 熟蕃
生蕃

右四種の住民合して明治三十二年末の調査によるに約二百七十六萬人あり。其うち移住支那人最も多く熟蕃は約三萬人蕃社に屬するもの約十萬

本邦地理 臺灣

移民

土人固有の
風俗の維持

三百五十六

人あり。もとより、こは精密なる數にはあらざるべきも、亦以て大概を知るべし。内地人は約三萬三千餘人あり。此數は日に月に増加しつゝ、あれば此調査の時より、今日までには頗る多きを加へたるものあらん。

現今臺灣にては、移民支那人をはじめとして、生蕃熟蕃ともに、何れも尙舊來の風習を守り、特に支那人に對しては、すでに其慣習あるものは、帝國の國禁たる鴉片の喫用をすら許すの制度を設けたる程にて、すべて特別の施政をなせるあり、又時に尙土匪の蜂起あり、生蕃の襲來するが如き事もあり、統一の治を見る事、前途尙遠きが如き觀あるも、次第に施政其宜しきを得て、教育普及するに至らば、奥羽に於ける蝦夷、九州に於ける隼人が、全く天孫種族と同化したるが如く、共に皆我帝國の善良なる臣民と成る期あるべきなり。

臺灣はもと本邦人が高砂島と稱せし所。支那の古代に流求と稱し、隋の煬帝が遠征を企てたるも、今の琉球即ち沖繩にはあらずして、此臺灣の事なりと云ふ。後世支那人其地理を誤り、隋書に記したる流求を以て、沖繩島に推定してより、遂に臺灣流求別地の如く、世に信ずるに至れり。然れども、今尙

臺灣の名義
流求の事

フォルモサ

倭寇及支那
の海賊

和蘭人占領

濱田彌兵衛

鄭成功

臺灣西南の小島に、小琉球島の名あるもの、偶以て古名を存するものと見るべし。西洋人は、之をフォルモサと云ふ。葡萄牙人の稱呼に従へるものにして、美麗の義なりと云ふ。もと土蕃之に住して、久しく未開のまゝに存せしが、我が南北朝より、足利時代の比にあたりて、西海の邊民支那朝鮮等の沿海を侵掠するもの、遂に、其所謂倭寇の範圍を、此島にも及ぼし、ものゝ如し。支那に於ても、明朝の紀綱衰ふるに及んでは、有力なる海賊起りて、顏思齋鄭芝龍の如きは、前後相ついで、此島の要所を占領せし事ありき。芝龍が歸順して、此島を去るや、怡も和蘭人が、東洋經營に力を用ふる際なりしかば、來て澎湖島を占領し、更に本島に渡りて、其根據地を定めたり。かの長崎の商人濱田彌兵衛が、臺灣の和蘭人の、我商船を掠めたるを憤り、其甲比丹を捕へて大に之を懲らしたるは、此際之事なりとす。和蘭人臺灣にある事三十餘年支那明末にあたりて、鄭芝龍の子鄭成功は、明の王室の爲に義兵を起し、此島に渡りて和蘭人を驅逐し、遂に之を占領せり。鄭成功は即ち有名なる國姓爺なり。父芝龍我國に來り、平戸にありて妻を娶り、成功を生む。成功年七

本邦地理 臺灣

三百五十七

歳明に入りて學を講じ、名あり、後明帝より明國の姓を賜へられて、朱成功と云ふ。世に之を國姓爺と云ふは、之が爲なり。父芝龍は、清帝に降りて成功を招きしも、成功應せず、尙明の爲に忠誠を盡し、明室恢復の爲につとめしが、遂に、其支那本土にありて、急に功を成し、難きを見て、轉じて澎湖島より、此島に渡り、和蘭人を、其本據なる瓜哇のバタビヤに逐ひ、こゝに尙明朝の正朔を奉じたり。これ、我後西院天皇寛文元年にして、清の世祖順治十八年なりき。成功即ち臺灣を改めて安平鎮となし、兵を休め、農を勸め、以て時の至るを待たんとせしが、不幸にして病にかゝり、翌年五月、年三十九歳を以て歿せり。成功の死後、其子鄭經は、自ら征討大將軍と號し、尙明の年號を用ひて、清に抗し、清之を招きしも、談判遂に不調にして、尙二十年間互に兵を交へしが、而も其志を成すを得ずして歿し、其子鄭克塽年幼にして、繼ぐに及んで、遂に清に抗する能はずして降れり。之れ實に、我が靈元天皇天和三年八月にして、清の聖祖康熙二十二年に當る。之より臺灣全く清に歸せり。清は即ち之を福建省に屬せしめ、首府を島の西南方臺南當時臺灣府と云ふに置き、全島

清國征服

生蕃我邦人を害す

明治七年征臺の役

清佛戦争後の臺灣

を統治し、之より支那人の之に移住するもの續々として、踵を接するに至れり。臺灣清に歸してより、二百十餘年間時に叛亂なかりしには、あらざりしも、而もよく之を統治し、蕃民の一部は、全く其化に服して、熟蕃と成るに至れり。然れども、所謂生蕃に至りては、尙其化を受けず、往々殺伐を擅にして、害を他國人に加ふる事ありき。明治四年、我が琉球人六十餘人、風に漂ひて此島に至るや、土人の爲に害を被り、僅に十二人よく逃れ歸るを得たり。次で、明治六年、備中の民亦漂うて此島に至り、同じく土人の害に遇へり。茲に於て、我政府は、當時偶支那にありたる副島種臣をして、之を質さしめしに、清國は、生蕃を以て化外の民なりとし、敢て其責に任せんともせざりければ、明治七年、我國は西郷従道を都督として、之を征せしめしに、清は我軍の頻りに功を臺灣に成すを見て、異議を挟み、遂に談判の末、清より五十萬兩の償金を得て、我征臺の師を撤去し、事全く落着するを得たり。其後明治十七年に至りて、清國は安南の事件に關して、佛蘭西と戦端を開き、

本邦地理 臺灣

佛蘭西艦隊は、一時臺灣を封鎖せり。茲に於て、清國は臺灣統一の輕々に附し難きを見て、更に臺灣を以て獨立の一省となし、劉銘傳を擧げて巡撫として之を管せしむ。劉銘傳即ち大に之が改善を圖り、三府一州十一縣三廳を置き、鐵道を敷き、郵便電信等の業を起し、着々改善の効を奏して、臺灣の面目爲に一新せんとするに至りしが、偶明治二十七八年役の結果として、遂に我國の版圖に歸するに至りしなり。

我國の臺灣を得るや、臺北に總督府を置いて、全島を管する事、尙古代に、太宰府が九國二島を管するが如くし、下に、臺北、新竹、臺中、嘉義、臺南、鳳山の六縣、臺東、宜蘭、澎湖の三廳を置きしが、明治三十一年に至り、新竹、嘉義、鳳山の三縣を廢して三縣三廳とし、三十四年五月に至りて、更に恒春廳を増して三縣四廳となし、同年十一月に至りて、更に大に地方制度を改め、在來の縣を廢して、

臺北、基隆、宜蘭、深坑、桃仔園、新竹、苗栗、臺中、彰化、南投、斗六、嘉義、鹽水港、臺南、蕃薯寮、鳳山、阿猴、恒春、臺東、澎湖の二十廳を置き、全島及び澎湖島を分轄統治せしむる事となれり。

かくて我政府は、此島の守備に任せんが爲に、三個の混成旅團を派遣し、臺北、臺中、臺南の三地に、其司令部を置き、要地には、更に守備隊を分遣せしめ、又澎湖島の媽宮は、特に海軍の要港と指定し、此地と基隆とに、要塞砲兵を設置せり。

又島民を教育して、其智能を啓發せしめ、善良なる國民を養成せんが爲には、臺北に國語學校を設け、其他師範學校、國語傳習所、小學校、公學校等の設あり、尙各地には、在來の私塾的學校甚多し。

本島の貿易港には、基隆、淡水、安平、打拘の四港を始として、西岸の舊港、鹿港、後壠港、梧棲港、東石港、東港及び東岸の蘇澳港、澎湖島の媽宮港あり。合して十二港なり。此うち基隆と淡水とは北部にあり、安平と打拘とは西南部にあり。此四港は、安政四年即ち清の咸豐八年に、清國が英佛米三國と通商條約を結びて、互市場と成し、に始まり、臺灣が我國の有に歸しても、引續き貿易港たり。而して、就中基隆港は島の東北隅にありて、我内地に對しては、恰も門戸に相當し、神戸との間に汽船の定期航海あり。又之より本島沿海の航

路もありて、東廻り西廻りの定期船あり、海上の交通頗る便なり。陸上交通亦、我版圖に歸してより以來、大に其面目を改めたり。從來の道路は甚しく不完全なるものなりしが、今や大に改良して、中央の幹線は基隆より、臺北、新竹、苗栗、臺中、嘉義、臺南、鳳山等を経て、東部の卑南に至り、東岸線は基隆より、宜蘭、蘇澳、花蓮港等を経て、卑南に幹線に會し、又西には新竹より彰化に通ずる西岸線あり。

鐵道は、さきに劉鐵傳の計畫して、我が明治二十四年に開業せしもの、基隆より起りて新竹に至るまで、約六十哩あり。もと粗惡のものなりしが、我有に歸してより、大に之を改良せり。我政府は更に之を延長して、南の方恒春に達する縦貫鐵道を敷設せんとし、南は已に嘉義まで開通し、北は中港に達す。又別に其間には、輕便鐵道の設備あれば、不完全ながら、島の東北隅基隆より、西南隅の打狗まで、とも角も容易に交通し得るなり。基隆一に鶴籠と書く、位置内地に向ひて、交通便に、内地人の來れるもの最多し。基隆の地方石炭の産あり。

基隆より鐵道によりて西南に進まば、臺北に達すべし。臺北は現時本島の首府にして、總督府の所在なり。市街は、城内を本として、大稻埕、艋舺に連り、淡水河に瀕す。河を下らば滬尾街即ち淡水港に至るべし。臺北城は、周圍一里餘、高さ三間許、厚さ二間許の、支那式の城壁を繞らす。形は殆ど四角形をなし、南に二門、他の三方に各一門を開く。諸官衙をはじめ、有名なる建築物は多く、城内にあり、北門を出づれば、大稻埕に至るべし。艋舺は、西門外に連る。人口合して六萬二千に達す。臺北の地方、淡水河の通ずる所、茶園多く、製茶の業盛なり、又孟宗竹多し。淡水港は、北部の良港にして、商業盛に、貿易額に於ては、他の十箇の開港場を合せたるものよりも、更に多し。輸出品の主なるものは、此地方の特産たる茶にして、樟腦之に次ぐ。淡水港の東方に大屯山あり、河を隔て、西南には、觀音山あり、共に休火山にして、所謂大屯火山脈に屬するものなり。之より淡水河を遡れば、上流地方には、黄金の産地あり。

臺北より鐵道によりて西南に進まば、西海岸に近く、新竹街あり、一萬八千の

苗栗(樟腦)

臺中

彰化

鹿港

農産物

人口を有す。舊港は其西北にあり。

新竹より西南にありて苗栗あり。苗栗より新竹の地方樟樹多く樟腦及び腦油の製産甚多し。樟腦は總督府の專賣なり。

苗栗より南すれば大甲溪を過ぎて臺中に達すべし。臺中は本島中部の要地にして、さきには縣廳もあり、又混成旅團司令部の所在地なれども、繁花は遙かに彰化に及ばざるなり。彰化街は大肚溪の南にあり、臺中の西南にあり、中部屈指の都會なり、其近傍の八卦山は明治廿七八年戦役の激戦地なり。彰化の西南に鹿港あり、支那福建省の泉州に對し、本島と清國との最近距離として、交通便なれば、水淺く大船は容れ難きも支那船は多く碇泊す。之より南方、平地遠く連なり、田園よく開け農業盛なり。農業は移住支那人中大多數のもの、本業としてよく發達す。臺北、臺南の地方も亦田園よく開けたり。主要なる農産物としては、米、甘藷、落花生、茶、甘蔗などあり、麥、麻、藍等亦見るべし。臺灣は土地南方にありて、極めて暖國なれば、農産物の發生もよく、南方に至れば、米には一年二回の收穫ありと云ふ。此外鳳梨、龍眼肉

椰樹の事

新高山

柑橘類、檳榔等其他熱地的の果實草木多し。たゞ臺灣本島には椰子を産せず。世人或は其地熱帯にあれば椰樹は無論發生するもの、如く想像し、土匪討伐或は臺灣の風景などを寫せる繪畫には、往々にして椰樹林を示せるもあるも、こは全く誤謬にして、本島には、南部地方と東部地方とに僅々數本あるを見るのみ。然るに、本島の東南にある、紅頭嶼と稱する小島に至らば自生せるもの多し。椰子は往々他の島嶼に漂着して、其地に發生するが故に、太平洋中の小島多く之を生じ、我が九州筑前の北方なる、小呂と稱する小島の如きに至らば、自生するものあるを見る程なるに、この臺灣の大島に無きこと、奇と云ふべし。

臺南はもと臺灣の首府たりし所にして、本島の西南部にあり。臺中よりは嘉義を経て至るべし。我國第一の高峰と稱する新高山は、嘉義市街の東方に位す。山頂高さ三千八百六十米、富士より高きこと八十米、突なりと云ふ。山の高さを示す數字の如きは、固より調査の度毎に、多少の相違ありて、到底精密に之を言ひ表はす事難きも、とにかく、此山が最高なる事に就ては、

本邦地理 臺灣

すべて學者の一致する所なるが如し。此山原名をモリソンと云ひ、支那人は八通關山と稱す。新高山の名は明治三十年に、聖上の親しく命じ給へる所なり、新領土の高山との意ならん。山脈これより南北に連りて、臺灣の脊梁を成す。

臺南

臺南はもと和蘭人の據りし所にして、當時の城址尙見るべく、其後鄭成功の據りしも亦此所なれば、歴史上の遺蹟多く、成功の廟祠もあり。市民は明人の子孫多く、明末の風を存して、温和なりと云ふ。臺南の地方、田圃開けて、砂糖の産出夥し。臺南の西に安平港あり、港口不便なれども、東に臺南の市街を控ゆるが故に、百貨輻輳し、貿易盛なり。殊に南部地方の特産たる、砂糖は多くこゝより輸出せらるゝなり。

安平

鳳山

打狗

東港

安平の南東にありたりて、打狗港あり、また開港場として、盛なりしも、今は大に安平に劣れり。此地臺灣縦貫鐵道の終點なり。打狗の東方鳳山あり。枝竹パイプは此地方に産す。之より南東にすゝみ、下淡水溪を渡れば、東港あり、米穀の輸出地として、貿易

港なり。

恒春

牡丹社

恒春は本島の南端にあり、之より東南にすゝまば、帝國の極南なる、南岬に達すべし。恒春の北方山中に牡丹蕃社あり、明治七年征臺の際に、征服せし所なり。

宜蘭

更にはじめに返りて、基隆より東南に進み、本島の極東なる、三貂角を回らば宜蘭地方に出づべし。宜蘭は、東海岸地方に於ける第一の都會にして、一萬六千の人口を有す。此地方は、三方山を以て圍まれ、東は海に臨みて、中に平野あり、土地肥沃なり。熟蕃多く住して、耶蘇教行はる。其東南に蘇澳港あり、東海岸唯一の貿易港なり、但取引極めて微々たり。

卑南

紅頭嶼

之より南東の海岸絶壁多く、すべて蕃地を控えて、開化未だ及ばざる所多し。南方なる卑南大溪の下流に卑南あり、住民僅に五千五百に足らずと雖、臺東地方唯一の要地とす。其前面海中に火燒嶼あり、火燒嶼の南東海中に紅頭嶼あり、周圍凡そ十二三里、マライ種に屬する一種の土人ありて住す。其數僅に一千二三百。言語風俗頗る本島と異なりと云ふ。島中椰子樹の自